

研究

二〇一六年 第七十九号

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇一六年 第七十九号

No.79 2016



国立歴史民族博物館蔵伊能大図

第一三七号 部分

（河出書房新社版『伊能図大全』より引用）

アメリカ議会図書館に所蔵する伊能大図模写本は、2系統の模写図の集合である。即ち名称のなかに、明治初期の軍管区の名称を冠するものとそうでないものがある。軍管図は精緻度の違いはあるが、彩色図である。

そのアメリカ大図の欠落図7枚のうち3枚は、国立歴史民族博物館に所蔵されている。歴博の伊能図は地理学者秋岡武次郎博士の旧蔵品で、秋岡氏は市中で購入したという（伊能忠敬研究会監事 清水靖夫氏談）

一方、歴博にはアメリカ大図との重複図が一枚あって、本図一三七号がそれである。さらに、国立国会図書館とアメリカ大図との重複も一枚あって八一号長野が該当する。これらから、明治初期につくられた伊能大図の模写図は複数セット制作されたことが推測される。そう考えると、焼失以外で廃棄されることは考え難いから、現在でも伊能図は何処から突然現れても少しもおかしくはない。

前置きが長くなったが、本誌のカラー版体裁変更のトライアルとして、綺麗な伊能大図を使ってみたと思います。神戸・明石付近を選び、アメリカ大図一三七号より多少精細な歴博大図一三七号を使うこととした。

この地域は第五次、第六次、第七次で測量されたが、海岸線は主に第五次で、山陽道は第七次で測られた。では第六次測量では何処を測ったのであろうか。測量日記を読む限り経路の叙述と出迎え案内などの役人の名前は賑やかだが、日数的にも測量されたとは思えない。第七次が既に決まっていたのであるか。初めての場所を不測で通るのは大変珍しい。

第五次測量は文化二年十月七日に布引滝のすぐ東の大石村から始まった。摩耶山に登って山島を測り、広厳寺に立ち寄り楠公の書を見、生田神社に参詣、布引滝も一覽した。楠公碑の前では、碑の位置を入れるため、山々の方位を測ったとある。翌日は海岸を西須磨まで測る。須磨寺の財宝を一見。次の日は明石城下近くの大倉駅泊。

第七次測量（文化六年十一月十日）では、山陽道を測り、布引滝まで測線を伸ばす。中村から男滝七町二十二間、男滝から女滝まで三町十四間と記している。今回は須磨寺にも測線を伸ばし、敦盛の笛、画像、甲冑などを拝観、平忠度塚にも寄っている。ついでに観光的要素が増えてきている。

（渡辺一郎）

表紙解説

目次

79号

国立歴史民族博物館蔵伊能大図 一三七号 部分
（河出書房新社版『伊能図大全』より引用） 渡辺 一郎

話題

●愛媛県立図書館 久門家文書 解説（三）

解説者

伊藤 栄子

●志摩の的矢と越賀村を訪ねて
記事整理 渡辺 一郎 高宮 勲

●第五次測量と幕末幕府海軍測量の軌跡 野田 雅子

●川幅測定場面を記した野帳の解説と検証
戸村 茂昭

●連載 新説 伊能測量物語（再開）
渡辺 一郎

●第五話 第二次測量始まる

●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十四回
監修 渡辺 一郎
編著 井上 辰男

忠敬談話室

●佐世保市立花高小学校・堀江謙成さんの
「伊能忠敬が通った早岐」 河崎 倫代

●相模国 大山探訪顛末記
「伊能測量隊宿泊先は何処」 文 大沼 晃

●「伊能測量隊宿泊先は何処」 写真・構成 狼 芳明

●「伊能忠敬の足跡を辿り 春の湊町を巡る」 山浦 佐智代

●「各地の記念碑・標柱等紹介（八）」 河崎 倫代

●「2016年度総会報告」
「伊能忠敬研究会設立20周年記念」 事務局

●石川県支部ニュース
加賀藩測量の足跡をたどる（五の二） 室山 孝

●九州支部ニュース
伊能忠敬没後200年記念行事

●「伊能測量旅程・人物全覽」データベース紹介と講演の集い」福岡にて開催
会員だより

●新入会員自己紹介

愛媛県立図書館 久門家文書 解説 (三)

解説者 伊藤栄子
記事整理 渡辺一郎
同 高宮 勲

一四の一 公儀天文方御役人廻浦二付御仕成方調

氷見組
中野村
兎野山村

一、御宿老軒内

老間 伊能勘解由殿
老間 稻生秀藏殿

但秀藏殿義勘解由殿御子息之由二付、御同人次之間之積り

老間

坂部貞兵衛殿
柴山伝左衛門殿
青木勝次郎殿

老間

下河部政五郎殿
上田文助殿
久保木左衛門殿

老間

若党 神保莊作(正作)
棹取 善八
佐助

小者五人

右間取難出来家居二候得バ三軒二取分手当之事
御付紙ニ本文若党ハ間数有之家居二候得バ別間、
差支候家居ニ而ハ屏風仕切り致候可然

但勘解由殿御宿屋敷内又ハ向寄ニ而、南北見
晴し候土地十坪計用意之事

付紙ニ而 於御宿品ニより筆者御好ミ可有之間、若
御用之節ハ早速指出候様、両三人程手当いたし置
可申事

一、御座敷所持之居室若御宿ニ相成候共、疼有
之段申相用不申答

一、御昼休ミ人家ニ相成候節ハ、御朱印台并の
し三宝差出し可申事

一、床飾り之事
上之間床真中江白木三宝ニ奉書紙式枚敷置
候事 但御朱印台也

但違棚有之家居二候得バ、右棚へ軸もの寄
書之類出し置其下へ刀掛、料紙、硯箱相添置
候事

明り先へ三宝熨斗飾り付
但其家之模様ニ随ひ床へ御朱印台、熨斗三
宝并刀掛指置可然 次三ノ間 掛物画、盆石、
刀掛、硯箱のべ紙 巻紙 三宝熨斗
下分ハ見合ニ而取計可然事

但御宿寺院、村役人宅ニ候得バ脇亭主用意の事
一、鎗懸之事 玄関江出来之事
一、田葉粉盆之事 但きせる たばこ添
上之間、次三共 御老人江老つツ、
下分へハ人数見合ニ而可然事

一、燭台之事 ぼんぼり付
上三三間毎江老つ宛
一、丸行燈
上三三間毎江老ツ宛
但下分へハ見合ニ而可出

一、臥具之事

上三三とも 絹夜着蒲団

同縁葎

同縁蚊張

下分 木綿夜着蒲団

同縁葎蚊張

一、浴衣之事

上分浴衣ハこつまニ而新規出来
下分見合ニ而古キを用ひ候積

一、湯手拭之事
上分こつま老つ宛、下分イ毛綿三つ程
御宿数ニ相成候時は右ニ随ひ

一、湯殿之事

上分 大たらひ 中たらひ さげ
小桶 杓 おり桶
右新規出来

下分 居(スエ)風呂 御宿老軒ニ候ハ二つ
程

一、湯殿刀掛
上之分ハ竹ニ而出来
有合不見苦敷候得バ相用可然

一、手水鉢并手拭之事

上之分新二桶出来麻手拭
下之分有合手水鉢木綿手拭

一、御賄之事

御着座干菓子差出候事
上下 一汁三菜

但御領分御入込始而之御泊りと、西条御
泊りニ而ハ一汁五菜

夜分御測量有之時移候節
一、御夜食之事

夜分御測量有之時移候節

一、御昼休 一汁三菜位之積

一、御小休 押ぬきにしめ又は蒸菓子等見合之事

一、御賄方之儀左之面々罷越差図有之事

御賄統取

秋山条右衛門

川口龍蔵

下役

栗本三十郎

塩出善九郎

白石和助

村上丈右衛門

岡田伴右衛門

羽生万助

一、御宿肝煎之事

一、御宿肝煎老兩人ッ、羽織袴ニ而相詰候事

一、膳枕之事 有合之内入念候筋

一、給仕人之事 上下とも袴着用 前髪之者出

間敷候 御人数并御宿数ニ随

ひ手当之事

但給仕人拾人程ハ翌日之御宿迄途中相附候事

一、御宿近辺火廻り之事

肝煎之者兩人、人足四五人召連時々相廻

候事

一、急事手当之事

人足 肝煎

一、急事之節 御宿近辺之家へ相詰させ候事

一、公儀御役人方御ひらき所之事

寺院有之村方ハ寺院之内ニ而手当可然事

一、御宿門前挑灯之事

門前并玄関江御宿より挑灯差出シ可申事

一、御宿玄関幕之事 御幕ハ御打せ不成筈

一、盛砂飾り提之事

御宿心得ニ而玄関又ハ路次口江、盛砂水

提差出シ候事

一、夜分御測量之節

高張挑灯

燭題 台

幕

薄縁

右之分用意之事

但幕薄縁リハ途中用意之内相用可然事

御代島江御渡海之節、島内場所を見立輕ク

小屋出来之事

仕様大意

長六間二巾老間 三方篠簾圍ひ入口仕切ハ

すだれ、内江屏風引置候 やね苦葺縁台敷

但備後表疊敷 小屋前式尺程小石又ハ砂置

候事

右上分御小屋仕切之儀は御宿間取之通り

外ニ 長式間 巾老間

三方篠簾圍ひ板之類敷、其上薄縁

外ニ上下用所用意之事

附リ 手水道具

途中用意之次第

一、看板合羽笠并駕桐油用意之事

六人分

五人分

一、薄縁

内

備後表薄縁

七島表

一、莛 式拾枚 御荷物置候敷筵

一、青駄 内

引戸

八挺

内老挺宜敷筋

たれ戸

三挺

一、雨覆ひ之事

七島三拾四五枚

雨覆ひ御持参無之候ハ、相用候筈

一、昇台

昇棒

一、草履わらんじ

一、傘木履

一、野風呂

茶わん其外とも

付紙 野風呂之茶ハ御嫌ひ之由、土びん

式ッ用意致、

壺ッハ茶、壺ッハ湯用意可然事

一、煙草盆

一、火縄

一、提杓とも 蓋付

一、筆紙墨用意之事

紙ハ美濃紙、奉書、杉原、半紙半切紙硯

箱

右御荷物肝煎

用意物肝煎

何れも羽織も、引着

一、箱挑灯

是は若途中日暮候節并御泊リニ而、御測量之

場所屋敷外ニ等と相成候節相用ひ候用意

一、測量御道具用意

- 一、杭木 拾五本程 長四尺より七尺迄
 一、掛矢 老挺 外二老挺ハ為御持之由
 一、ぼんてん 拾七本

長式間計廻り五寸位竹

外二 毛氈 貳枚

幕

さいはり竹之事 二三本

長式間位二而先へまた木を付

長式間巾老尺歩行板四五枚程 但構

さん打

一、人足五拾人

内

拾七人

ぼんてん持

拾人

縄引夫

六人

床几持

付紙 本文床几御持参之様子ニ相聞候得共、

八ッ程用意之事

貳人

野風呂持

六人

磁石持

貳人

絵図持

貳人

火縄持

貳人

提持

貳人

用意

右人足ハ御領分中付添之筈

大町組、氷見組之内ニ而人柄等相撰用意

右引纏ひ肝煎貳人

中野村組頭

新兵衛

大町村

亀右衛門

御領分中付添

- 一、右両人之者共土地不案内之場所も可有之条、
 組切ニ割方老人ッ、差出一同肝煎を可申候
 一、測量御道具ハ今一通り用意、別段ニ為持
 候事

但若御二先ニ御分り之節用意、且ハ前段

用意之内損じ代り等之ため

一、海辺御通行ニ而ハ人家隔り御小休所差支

候ニ付、左之通手当之事

一、縁台式面ならべ四角江柱を立、けた(桁)

三通り渡し式枚継油障子を以日覆、三方幕

口へすだれかけ候事

右之通四通り出来、場所随ひ引双(ナラ)べ

候時は三方幕囲ひ内仕切すだれ

但取合せ分夫々懸ケかね留メ

外ニ御昼休小休之節、御賄場所幕囲ひ天幕

幕并串、敷もの其外御賄道具手当て之事

一、家来分右間江薄縁敷日覆天幕之事

一、随勤之面々休息之節日覆天幕之事

右は御通行之節、御跡々持参随勤御役人差図ニ

随ひ取立候様、大工又ハ素人之内ニ而功者もの

両三人程肝煎老人召連候事

一、道橋之事

疹所取繕ひ軽ク掃除之事

一、川越之事

加茂川之儀乗越へ渡瀬より御渉之積り、川中道

かた(ママ)等いたし置、若出水有之候得ハ渡船之

事

但渡船之儀は古川土場ニ而四五艘用意致置、

御通行前日之模様ニより、渡瀬瀬登セ可申事 右

は出水模様ニ寄り土場ニ而御渡申儀も可有之、

且御順道模様ニより慎瑞役所下より土場へ御渡

り候とも、又ハ喜三右衛門新田より御渡り之儀

も可有之哉、若右両所之内より御渡りニ相成土
 場前ニ而船入用も難計ニ付、渡船土場へ指置候
 事

一、右之外東筋沖手御通り筋、川尻江尻り等有

之場所々は、かり橋土た俵入飛渡シ等御順道ニ

随ひ前日手当之事

但若船用意不致候而ハ指支之場所も有之候

ハハ伺出可申事

一、西条御泊り市塚より御乗船之積り、御船浦船

御手当有之候間、市塚川御乗船場取繕ひ可申事

付紙一、船木組大庄屋、新居浜浦役人村境迄

船ニ而罷越其段申込、御案内ニ乗組居候船

屋村、永易村役人と代り御案内之事

但大島、黒島本文ニ准じ候事

但本文之通ニは候得共磯浦通り御越之儀も可

有之候条、市塚川東手御上り場も取繕ひ可申事

渡船之儀は御用意有之候橋船并漕船之内、取

合相用候事

一、磯浦通り御通行之時は佛崎山越之場所、上り

場、下り場取繕ひ且山中之道作り并山中之内場

所見合せ御休所用意之事

但小屋掛ニは不及、途中用意小屋取建相用ひ

可然事

一、市塚川乗船場御休所之事

小屋掛ニ不及途中用意小屋相用候事

(以前に同じ付紙があり左に記す)

付紙

一、家内よりのぞき候義堅ク仕間敷候

一、男ハ御通り道筋へむざと出申間鋪候

一、御通り道筋之村々ハ頭百姓之内式人兼而能申

付置、御通り之前方右体之義、其外不作法ニ無

之候様ニ心を付可申候

但右之分ハ御上より之御書付ニハ無之、折々
へ渡候書付ニハ大庄屋之心得ニて書加申候

一、御役人方御入込之儀、海辺より御入込可有之哉、又ハ小松町方より御入込可有之哉、難相分
候得共、氷見村之内宮ノ下ニ而ハ御小休之家用
意之事

一、禎瑞龍神社之辺御藏前古訓分、土場津太木置
場ニ而御休所場取いたし置可申事
小屋ハ途中用意之筋相(ママ)用意候事

一、右之外新居浜より東筋ハ御他領入交り之義ニ
而、兼而場所取も難相極候間御泊所より之御順道
程合見繕ひ御休所ニも可相成、人家ヲ掃キ明テ用
所掃除等いたし置候事 并人家無之所ハ順道地所
見計御休所場所取いたし置可申事
但上下之用所用意之事

一、人家無之道筋ハ拾町拾五町程ツ、見合、篠
簀圍ひニ而用所尅ツ、用意脇江提ニ水入杓
付置候事

一、途中医師之事
御通行道筋医師在宿為致可申事
但海辺御通行ニ相成医師宅隔り候村分ハ、最寄
りへ出張せ置可申事
御休泊之村方医師無之筋ハ、一兩人御宿近辺江
相詰させ置候事

途中御先引出向ひ
一、村切御先払
一、御案内之事
庄屋組頭羽織も、引着村境へ罷出候而、組
頭ハ御案内いたし 庄屋ハ御跡ニ付参り、
何等御尋等之儀可相答

一、大庄屋下之村方御案内差支候ハ、頭百姓を

組頭代ニ仕立指出可申事

一この間の文書一

一、御宿々亭主御出迎ひ之事

麻上下着ニ而町方ハ町口、在中は村境、浦島等
ハ御船着場迄罷出居候而、御宿亭主御迎ひニ罷
出候段可申込事

一、御荷物

内

一、明荷 式拾

一、御駕 老挺

一、御長持 老棹

一、御挟箱 式荷

一、笈荷 老ツ

一、柳こり 六ツ

一、天文御道具 式包

一、張竈御刀箱 五ツ

一、琉球包 四ツ

一、小付 五ツ計

大様右之通相聞候間、人足百人程用意いたし
置、猶御近領付出し数ニ随ひ手当之事
右は御領分江御入込より御通行済候迄随勤
之事

一、同心 式人
途中并御宿々ニ而御測量有之節、堅メとして随
勤

右夫々宿手当之事
外二人足五拾人程
肝煎式人

右は昼夜ニ不限御用之節々罷出候義ニ付、
御宿最寄ニ宿可申付置事

(注 緊急の場合の予備隊と思われる。五〇人は多い)

一四の二 御伺之頭書

(注 伊能隊の接遇について伺いと回答集)

一、御朱印台白木三宝 氷見組写

一、熨斗台三宝

一、上分浴衣 但幾ツ出来可仕哉

一、湯手拭

一、揚殿 大たらい さげ 杓

中たらい 小桶 おり桶

但幾通り出来可仕哉

一、湯殿刀掛

一、手水鉢

但幾通り出来可仕哉

右之分下ニ而出来可仕哉

御付紙 右之分下ニ而三通り出来候筈、尤尅通りは
氷見村御宿ニ而出来、尅通りは町御宿大町組ニ
而出来、尅通りは新居浜浦御宿船木組ニ而出来
筈

但氷見村御宿相済候ハ、垣生村へ相廻し可申、
町御宿相済候ハ、大島浦へ相廻し可申、新居
浜御宿相済候ハ、蕪崎村御宿へ相廻し可申、
垣生村御宿相済候ハ、中之庄御宿へ相廻し
可然、何れも申談弁利(ママ)宜敷様浴衣地手
拭地相調有之相渡候筈
一、御鑓掛新ニ出来可仕哉、有合候得ば古キ筋を
用ひ可申哉

一、御宿玄関幕之儀、御幕は御打せ不被成候二付、幕無シニ而宜御座候哉

御付紙 本文之通幕は無之筈

一、御宿門前并玄関江出候丁ちん共台ニ仕可申哉

但町構ニ而門無御座家居は露次前へ出可申哉

御付紙 本文之通出来之筈、印は黒輪ニ而可然、尤片黒ニ不紛様

一、夜分御測量之節、高張丁ちん二張台共下ニ而新ニ出来可仕哉

但御上より御貸下被下候哉、下ニ而出来仕候時は仕様奉伺候

御付紙 本文之通り出来之筈、印は黒輪ニ而可然片輪ニ不紛様

一、御宿近辺火廻り、拍子木打せ可申哉

御付紙 追而伺出可申事

一、急事手当人足何人肝煎何人用意可仕哉

御付紙 追而伺出可申事

一、急事之節、御ひらき所掃除其外手当之儀如何可仕哉

御付紙 掃除等いたし置可然、格別手当ニ不及可然

一、御代(ミヨ)島江出来之御小屋は諸事船木組

ニ而出来仕置候而宜御座候哉

御付紙 本文之通り船木組ニ而出来之筈

一、勘解由様御駕人足并小者手替り共拾老人分、

看板合羽笠は、御役所より御貸下被下候様ニは相成申間敷や

御付紙 本文看板合羽は御貸下之筈、笠は下ニ而相調候筈尤笠は竹之子笠途中用意

一、備後表薄縁拾三枚

御付紙 下ニ而出来之筈、尤表裏縁は調有之候付相渡候筈

同断

一、七島表薄縁八枚

御付紙 右同断

右表御調置被下御座候趣承知仕候 右此節御渡被下候ハ、細工人江申付出来指仕申度奉存候

但右薄縁り表并へりハ何ニ御座候や

一、青駄引戸八挺垂戸三挺共新規出来可仕哉

御付紙 本文借り合相済可申候

一、雨覆七島三拾四五枚、右は御調置被下御座

候 内々ニ而御渡被下候儀ニ御座候や

御付紙 本文相調有之候ニ付相渡候筈

一、青駄桐油蒲団共新規ニ出来可仕哉

御付紙 本文借り合相済可申候

一、青駄人足合羽用意ニハおよび申間敷哉

御付紙 本文追而伺出可申事

一、御途中用意薄縁幕其外品々昇台ニ而昇せ申度、尤新ニ出来仕度奉存候

御付紙 本文借り合可申、指支候ハ、新ク出来候

筈

一、傘木履等は合羽簞ニ而持せ候様仕度奉存候

傘木履は下ニ而相調可申候 古キ長持借り合早セ可然事

一、途中御入用御茶道具つり台ニ而昇セ可申方可然様奉存候

本文之通可然事

一、御家来中茶道具は野風呂ニ而別ニ荷と可申やと奉存候

本文野風呂ニ而は指支可申候 鐘子(カンス)又ハ羽釜(ハガマ)ニ而可然事

(注 鐘子は茶の湯に用いる釜、羽釜は胴廻りにつばの付いた炊飯用の釜)

一、箱挑灯八張用意仕候様ニとの御事

右は新規調候可仕哉、印等も付候儀ニ御座候や

御付紙 新キ出来印ハ黒輪ニ而可然事

一、毛氈式枚は相調御領分中持廻し仕候方宜様奉存候

御付紙 本文借り合相済可申事

一、御小休所御小屋、家ね油障子ニ而は毎度取扱候ものニ御座候得ば、損じ可申と奉存候天幕ニ仕少(カ)々之雨天等御座候而は油紙用意仕置、天幕之上江覆候様仕候ハ、持扱も仕安ク奉存候 左候ハ、新ニ出来仕度奉存候

御付紙 本文野障子ニ而は可然繕ひ用意紙并油か
ご用意致可然事

一、都而入用之幕并幕串共御貸下被指下候趣仕
度奉存候

御付紙 本文御幕ハ御貸被成候筈、幕串之旨不
及昼休所下分休所賄所とも柱杭共弁(マ)マ
利成様出来可申候 尤申談可申出事

一、川越渡船四五艘右渡船江は老艘二付薄縁式
枚、腰掛式ツ用意可仕や

御付紙 本文下ニ而出来可然候

右之通奉窺上候 以上

辰七月

(注 測量日記と対照はしてないが、以下は実際の伊能
隊行動状況と思われる)

一、同十八日 昼タ

一、同十九日

一、同 廿日

一、同廿一日 昼タ

一、同廿二日 昼タ 六丞□□カ

一、同廿三日 昼タ 六丞 同断

一、同廿四日 昼タ 同断 嘉平参

一、同廿五日 早朝 認もの出ス

一、同廿六日 今在家入込

一、同廿七日 西条御泊

一、同廿八日 西条御泊

一、同廿九日 西条町御泊

一、同三十日 新居浜御泊 夜御料庄屋式人宿へ
参、白石様へ伺之上返事

一、同 朔日 垣生村へ御泊 下分梅蔵、野田
栄蔵

一、同 二日 御一先ハ明六ツ、御一先ハ五ツ、
御一先ハ五ツ半垣生御出立、大島御泊 宿伝
五郎

一、同 三日 御一先大島廻り御改、九ツ時御仕
廻御泊 宿 小松や 下河部様、青木様か

一、同 四日 秀蔵様、政五郎様、勝次郎様御三
人荷内浜より蕪崎迄御見分御泊

勘解由様、坂部様、柴山様、上田様、久保木様
御船ニ而蕪島(マ)マへ御渡 同所御泊

一、同 五日 雨天蕪崎御泊

一、同 六日 秀蔵様、政五郎様、勝次郎様御測
量外様御陸大島八ツ時過御着御泊

同夜御暇乞ニ出ル 和忠次、直右衛門、八之丞、
新兵衛

此日御着後六郎二帰ル 中ノ庄泊 扇や万次郎

一、同 七日 諸道具中ノ庄大庄やへ預ル 八ツ過
より出立帰ル

一、同 九日 御役所式日ニ而なし 御宅へ罷出ル

(褐色は注記と参考)



伊能図中図 第5図 尾鷲 (部分)

志摩の的矢と越賀村を訪ねて

第五次測量と幕末幕府海軍測量の軌跡

野田 雅子

今年二〇一六年は五月二十六、二十七日に伊勢志摩サミットが同地賢島で開催され、先進七カ国とEU首脳が一堂に会する事になった。

この地は文化二年、伊能測量隊が第五次測量往路で訪れた地であり、幕末文久二〜三年（一八六二〜一八六三）にかけて幕府海軍が「尾勢志三箇国測量」のため測量を行った地である。

幕末の文久元年、英国測量船アクテオン号が海岸、暗礁、港を各地で測量する際、幕府から英国側へ渡ったのが伊能図の所謂「イギリス小図」と言われるもので、現在イギリス・グリニッジの国立海事博物館に収蔵されている伊能小図三鋪であるのはよく知られている。

幕府は英国に伊勢神宮領域に上陸はしないという前提でこの地方の沿岸測量を一度は許可していた。これを受けて鳥羽藩は万一に備えて急遽砲台と陣屋の設置に追われている。しかし神宮領の海岸域に隣接する藤堂藩は強い懸念から英国船の測量差し止めを求める上申を行い、朝廷からも同藩と幕府の双方に神領域沿岸に異国船を立ち入らせてはならぬという上旨がもたらされた。

事態は急転し、神領域沿岸を含む尾州伊良子崎から勢州浦、紀州境九木浦まで英国測量船に立ち入らせない代わりに自国で神領域沿岸の測量をなし、その海図データを英国に渡す事となった。

測量技術を自負する藤堂藩は独力で自藩領分を測量する旨を申し出ていたが、幕府はこれを退けて幕府海軍の手で行うと決定し、幕閣が尾勢志三箇国の沿岸測量の命を築地の軍艦操練所に下す。これが文久二年正月のことである。

私はこの測量に参加し、維新後はオーストリアに留学してドイツ式銅版地図技術をわが国に導入、内務省地理局で「測絵図譜」を制定する等、近代地図作成に貢献した岩橋新吾（教章）に興味を持っている。

不連続な研究でいまだ成果をまとめられずにいるが、伊勢志摩サミットという今年、伊能測量隊と尾勢志測量チームが時を隔てて滞在した的矢と

越賀村を訪れた際の事を少し書いておこうと思う。取材して六年が経過しており現状は多少変化があるかもしれない。その点はご容赦を願いたい。伊能忠敬の第五次測量は御承知の如く完全な幕府事業となつて初の測量で文化二年二月二十五日品川を発し、文化三年十一月十五日に江戸へ帰着という長期に及んだがその往路、伊能隊はこの地方に足を踏み入れている。

私にとつては幕府海軍が測量をした越賀村をこの目で見たいたがための志摩行きだった。

近鉄名古屋駅から賢島に向かい、そこからは船で和具港に渡つて越賀を目指すコースで、途中彼らの上陸地であつた的矢へ立ち寄つた。その経路の大部分に伊能測量隊の足跡があり、岩橋の関係からも伊能図の重要性を思い知つたのは実は後になつてからのことである。

伊能測量隊の動向に関心を払っていれば、もつと見るべきものがあつたはず、と今にして思う。過疎化が進む地方の例に漏れず、この方面も公共交通機関も採算割れでバス路線の廃止が続き、磯部―的矢間も予め前日までに予約を入れての相乗りのマイクロバス、タクシーしか手段がない。

志摩磯部駅から「ハッスル」号うみコースに予約を入れて、まず帰りの「発車時刻」ありき、滞在二時間半という駆け足実踏とあいなつた。

的矢の港

的矢に鳥羽から伊能隊が到着したのは、文化二年五月十三日のことである。

止宿は『測量日記』によれば曹洞宗の寺院「宿円庵」である。

伊能隊が十三、十四日二泊した宿円庵は、村の



禅法寺境内

寺子屋でもあり、明治に入るとこの地区初の小学校になり、同八年廃寺になった。伊能隊や幕府測量隊の来た当時、的矢には禅法寺と宿円庵、そして如意寺の三ヶ寺があったが、如意寺も昭和三十年代に廃寺になり、現在禅法寺が的矢地区の唯一の寺院となっている。

禅法寺十九世住職（取材当時）によると同寺は一五〇〇年代前半には真言宗の寺であったのが、織田信長が岐阜を手中にした永禄十年（一五六七）、当代天英によって曹洞宗・鳥羽の常安寺末寺となったという。一度火事で焼けたが十一世の時に再建し、本堂他の建物は新たになった。これは文政年間の事であるから、残念ながら伊能隊の頃の本堂ではない。境内で目を引く立派な金毘羅堂も、同時期の再建である。

御住職のお話によると宿円庵は禅法寺本堂と境内を挟んで向かい（西正面）の金比羅堂の背後に建っていた、つまり隣り合っていたという。

金比羅堂傍らにある四つの碑のうち一番奥は灯籠台（部分）で地藏尊六体の浮き彫りが施されている。昔土地の本道の辻に置かれていて、往時夜旅人の目印の常夜灯だったらしい、とこれも御住職の御話である。伊能隊メンバー達も、咸臨丸で入港後上陸した幕府測量隊も、この灯籠を目安に付近を往来したのだろうか。



金比羅堂傍らにある四つの碑

禅法寺は小的矢の山腹に建っており、海拔十八メートル、門前は直ぐ下り坂で坂の先は海である。坂の傾斜地に貼りつくようにして民家が立ち並び坂を下りきって岸壁迄の地面は昭和三十年代までに改修造成した海岸で、江戸時代は海中だったのだ、という。

『磯部町史』にはそれと判る写真が掲載されている。伊能測量隊当時の海岸線も現在より引つ込んだラインになるわけだ。

禅法寺境内の阿弥陀堂横から入る登り坂を行くと僅かな耕作地で、その先の的矢地区の墓地在が広がっている。そのすぐ南西にあるのが『測量日記』にもみえる日和山だが、的矢に日和山は「大的矢」「小的矢」と二つの日和山がある。

時間の事もあり、「大的矢」は割愛したのが今も心残りだ。

正面の遙かその向こうは太平洋である。的矢港に入った帆船は出港前に必ずここへ登り、気象を観た。

方位石は平成七年に据えられたレプリカで、本物は市立磯部郷土資料館の方で保存されている。それは文政五年に灘廻船中が寄贈した二代目の方位石で、文化二年に伊能測量隊がやって来た頃の石は更に古い石ということになる。



方位石

的矢墓地に隣接するのは「小的矢」の日和山で、整地された小さな一面に磯部町の立て看板があり、円筒形で、直径約8センチの「方位石」が設置されている。

眼前には的矢湾が広がり、三ヶ所が眼下左に、渡鹿野が右にみえる。当時の大的矢の初代方位石と思われる石が昭和十二、三年頃に山麓から発見されて、これも大切に同館に保存されている。



小的矢日和山からの眺望



磯部郷土資料館蔵大的矢の方位石
ブログ『神宮巡々』より転載

伊能隊は鳥羽の日和山にも何度も登って高山を
観測し、特に基点としている富士山の展望・観測
を何度も試みた。しかし時期が悪い。梅雨の天候
で、雨天、あるいは曇りの日が多く、富士山を展
望するのは難しかったことが『測量日記』からは
伺える。

一行は相差村で富士山を測るとともに同村境界
からの矢村迄を計り、忠敬自身は乗船で矢に直
行、推算地図を成した、とある。

天測も行つてまずまずの一日だったが明けて十
四は雨で逗留である。

禅法寺の境内奥阿弥陀堂の背後には宿縁庵の近
くにあったという「妙見堂」が移築されている。
今にして思えば、これをこそ写真に収めるべきだ
った。

後に知ったことだが、日本各地にある妙見信仰
とは北辰信仰、つまり北極星をなぞらえた妙見大
菩薩への信仰で、物事を観る力を妙見と尊ぶとい
う。天文学と信仰が作り上げた妙見堂が伊能忠敬
の止宿傍にあり、ここで天測が出来た事を思うと
趣き深いではないか。

十五日、未明から雨は上がったので、七時半、
午前四時に矢を出立、下之郷村へ至り、ここで
二手に分かれて「出会の測」を行ったという。

実はこの時、紀州和歌山から前藩主である徳川
治宝が伊勢神宮参拝に出発している。

和歌山を發つた藩主一行は志摩から鳥羽、伊勢
へ向かう。紀州藩主の大名行列と幕府御用の測量
隊が同時期東西からこの地方を通過することにな
る。

街道周辺は双方で徴発される人足のやり繰りと
荷駄運搬に気を使い、道は混雑が予想される。

紀州藩主一行の「行列」と測量隊の「隊列」が
よもやのバツテイングを避け、行列と隊列が村々
を滞りなく無事通過してもらおうよう神経をとがら
せる事態となったのだ。双方が最も接近したのは
的矢宿円庵宿泊から3日後、一六日だった。
一六日 朝より雨。午前より大雨逗留。

此日紀州公磯部 即上之郷村止宿。大雨後一七日
同所御逗留 (『測量日記』)

磯部の下之郷に幕府の伊能測量隊、隣の上之郷
には紀州藩主一行が宿陣している。

この後六月に入つて五カ所で止宿した際に忠敬
は月蝕の観測が上手くゆかなかった事もあつてか、
御機嫌斜めの八つ当たり気味の態度だったことが
記録に見える。

この時忠敬は「紀州風を吹かせている」とい
ことを言つたようである。

これは磯部で下之郷、上之郷と隣村で泊まり
あわせた前後に関わる感情に違いない。

紀州公の行列がなければ、この地域での測量計画
は違うものになったのだろうか。

測量隊の動向を知るうえで貴重なのが『尾鷲組
大庄屋文書』に含まれている「須賀利浦文書」や
紀州藩新宮領三ノ村国大庄屋・西家の「西家文書」
で、先の御機嫌の悪かった忠敬の様子もこの中に
記録されている。

この第5次測量往路で起きた村々の対応と忠敬
の意向との行き違いには、測量隊のメンバーの行
動が絡んでのことである、という事は早くから渡
辺一郎先生が言及されている。

余分な事をし、必要なことをぬかる対応に行く
先々で受けて、忠敬は遂に自身の名で「蝕れ」を
出すに至る。

名実ともに公儀御用となった伊能測量隊の事業
のそれまでと異なる局面が表出されたのがこの志



米国議会図書館蔵伊能大図第 117 号 (部分)



岸壁の変遷 磯部町史より

摩地方から尾鷲でのことだった。測量の困難を伴う複雑な地形が彼らを疲労させ、雨天続きが苛立ちを一層深いものにしたように感じる。

その五十七年後。

文久二年六月品川を発した咸臨丸はこの的矢に八月三日に入港、尾勢志測量チームが上陸する。同船は航海の途中、西から北上中の麻疹の流行に巻き込まれた。水夫が上陸した際罹患したのを皮切りに、咸臨丸乗組の面々も次々に罹患、船内で枕を並べて伏すという事態に陥った。このため下田に一月を空費した。この航海は榎本釜次郎らオランダへの幕府派遣留学生を長崎へ送り届けるもので、尾勢志三箇国測量隊はこれに同乗して鳥羽で上陸する予定だった。

「風待ちの港、的矢」という観光向けのキャッチコピーに見るように、ここは古くから開けた良港で、江戸と上方を結ぶ菱垣樽廻船航路の中継地で船上生活の食糧や物資の補給場所だった。

荷が遅れるの的矢での風待ちであれば、発注元は責任を問えない決まりだという。

風待ちする船宿、遊女屋が軒を連ねて繁華な港町としての矢は賑わった。

咸臨丸は鳥羽港に入るはずが航路を間違つて的矢に入港したという。方位を間違えたというが、的矢は風待ちの港、水夫たちの命の洗濯をする一大歓楽地渡鹿野を擁している。自ずと引き寄せられたのではないかと、という気がしなくもない。

航程の遅れで故郷の肉親家族との再会を待たされる塩飽島の水夫衆をここで慰労せずに通過できるだろうか。

磯部から三ヶ所、パールラインを通り、的矢へ

入ったタクシーで「あつこが渡鹿野、むかしっから男のパラダイスやネ」と運転手さんが笑いながら指し示したけれども、的矢の港は往時のような賑わいはなく、「的矢牡蠣」養殖とかつての繁栄の名残を風情として残す淋しさが返って旅情を誘う。その名残が、禅法寺から一五〇メートル程南西に位置する神社入り口の古い石灯籠だ。

文久元年に当地の遊女置屋連中の寄進したもので、翌年即ち文久二年の八月にこの地を踏んだ測量隊面々の目には真新しく映ったことだろう。

的矢上陸後の幕府測量隊の足取りは実ははつきりとしていない。八月三日的矢港に入った咸臨丸から上陸後、同月下旬尾鷲・久木浦で測量をしたという記録が『尾鷲市史』にはある。



台座に「置屋中」

彼らが尾鷲で測量を始めた頃、的矢には英国商船が入ってくるという事件が起きた。

鳥羽藩に緊張が走ったのは言うまでもない。

急遽的矢神社は本陣として藩主が直接指揮を執るといふ騒ぎになったが、翌日何事もなく英国商船は帰ったらしい。

幕府測量隊にその話が伝わったかどうか、彼らは尾鷲から半年をかけて先志摩半島へ至る。鶴方村で越年、翌文久三年正月に「越賀村」から測量

は再開され、対岸の三河の吉良吉田で全行程を完了したのは同年秋である。



的矢神社

絵図認方・岩橋新吾は十月十六日付で三河・幡豆郡吉田村から家族宛てに「測量御用が済んだ」旨の書簡を認めている。そして実際に彼が帰府したのは十一月十六日であった。

およそ一年半にかかる長い測量御用だった。

現在県道船の発着所は昔的矢港へ入った後の船改めの番所である。

風待ちの港として繁栄したその昔は停泊する船は三ヶ所まで連なるほどだったという。

的矢地区に今唯一残っているのが県道船で、何度乗っても無料で三ヶ所と的矢を往復出、通学はじめ生活の足となっている。

幕府測量隊の尾勢志測量から八年後。

的矢湾は再び測量船を迎え入れる。

明治三年五月、新政府は急務の水路測量事業のうち先ず南海測量事業を決定した。同事業は海軍の第一丁卯と英国測量船「シルビア号」との共同で行われたが、的矢湾はその初地であった。

土地の絵師が描いたという「シルビア号」の絵があるというので、磯部漁協的矢支所を探して訪れてみた。

来意を伝えると先方は一瞬何のことかと戸惑われた。やがて半信半疑の様子で職員が奥から取り出して来て下さったのは埃を被った一枚の額である。そこには、的矢の海に浮かぶ洋艦が描かれていた。絵の中のシルビア号のマストには日の丸と英国旗と思しき国旗が翻っている。日本側の測量主任は翌年水路部を創設する柳瀬悦である。同年六月十二日から十五日の三日間の測量で共同とはいえ、的矢では専ら英国が測量し、柳以下日本側はそれを見学するばかりだったらしい。

絵は褪色が進んでいるようだが、坂の上に周囲の家より大きく描かれる屋根が見えた。これは明治初年の的矢小学校、つまり宿円庵ではないのか。そして、その右上方にある濃い緑と灰色に書きこまれているのが位置からみて禅法寺ではないかという気がしている。

いくらか拡大し、見やすく色に修正を加えたものを参考までに挙げておこう。



拡大図



明治3年の的矢湾のシルビア号（作者不詳）

磯部漁協的矢支所にて撮影



後方に見えるのは賢島

賑やかだったかつての矢滞港の様子が伺い知ることが出来る。海図の歴史上必ず取り上げられるシルビア号を描いた貴重な絵だが、現地では意外なくらいに忘れられた存在になっていた。

漁協で時間を過ごし慌てて帰りのバス乗り場「老人いこいの家」駐車場へ行くとすでに土地の老人三人がすでに車中のシートに座っておられた。私が最後？出発時間、間に合ったよね？と少々焦った。予約は四人だったらしい。

「よろしいか、ほな、しゅっぱつしますう」

志摩市は磯部地区の自然を楽しむウオーキングコースを選定している。時間が許す向きは「測量日記」を念頭に歩くと面白いかもしれない。

駆け足の矢滞在のあと磯部へ取って返し、近鉄で鵜方を経て賢島へ、定期船で英虞湾を渡る。目指すは越賀村である。

越賀村

サミットの行われる賢島はその昔は「徒歩越島」といい、干潮時、鵜方から歩いて渡れたという。賢島からは英虞湾を周遊する遊覧船や、先志摩半島の西端、御座岬と和具港への定期便が就航している。定期便で和具港へ向かう途中、目にする島々の一つ一つを、伊能測量隊も、幕府海軍の面々も測量して回ったのだ、とその大変さを感じる。



英虞湾・真珠の養殖はえ縄

越賀村は、先志摩半島西端の御座岬から東に三キロ、熊野灘に南面する良港である。『測量日記』によると、伊能隊は矢滞周辺と伊雑浦沿岸の測量を終えた後、越賀村へ到着、ここで二泊している。



伊能大図第117号 鳥羽（部分）

止宿先は越賀村のほぼ中央に位置する宝珠院で、同寺は鳥羽で彼らが十日間止宿した常安寺の末寺でもある。

伊能測量隊では、「天測」を行うためその条件にふさわしい場所を選ぶ必要がある。

越賀村には宝珠院、普門寺、大蔵寺と三ヶ寺があり、地元ではそれぞれ西寺、中寺、東寺と呼ばれる。天測に向く見晴らしの良く都合十坪ほどのスペースが必要という条件をクリアし、選ばれたのが中寺の宝珠院だったのだろう。

現地で見えたかぎり、大蔵寺は小規模で境内も広くはなく、普門寺は広さが十分でも村の西に位置し海に近い低地で、天測には如何か？と思う。その点宝珠院は県道を隔てて山の方、やや高地に位置しており、境内には十分なスペースがあり、見通しが良い。

伊能隊は宝珠院に到着した夜、境内で「天測」を行った。

現在の宝珠院の本堂は平成十二年落成した新しいものだが、同地区の『越賀区有文書』（以後『越賀文書』と略記）には幕府海軍測量隊が止宿した時に使われた寺の間取りが記録されている。伊能測量隊が止宿した当時も間取りは変わらないと思われる。



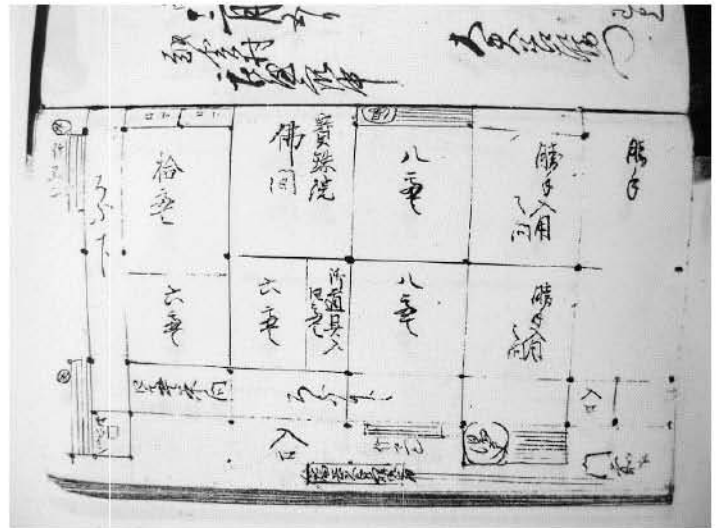
宝珠院 本堂

越賀村バス停から海方面に降り、左手に入る細い道を歩いてゆくと村の「郷倉」がある。郷倉はこの地方の各村にあり、江戸期は年貢米や備蓄米を蓄える重なる蔵だった。

鳥羽・志摩地方は山と海が通り、平地が少ない。段々畑と僅かな水田で米を作るが、米は貴重だった。昔は年のうち数回、減多なことでは村人達の口に入る事はなかったのだとも言う。

蔵の屋根には「多びす」と「大黒」が鎮座している。貴重な備蓄米や年貢米を守り続けてきた屋根の二神は伊能隊、そして幕府海軍がやって来た時も変わらずそこから見下ろしていたのだろうか。

江戸から御公儀御用の測量隊を二度迎えた村で



宝珠院の間取り（越賀区有文書）

伊能隊は僅か二日だったが、幕府海軍の測量隊はこの越賀村に実に一ヶ月滞在した。

同じ測量と言いながら、海岸線や陸地の測量を主とする伊能隊と、入り江や港、海の水深の浅深を測量する幕府海軍それとはやり方もかかる手間も違う。

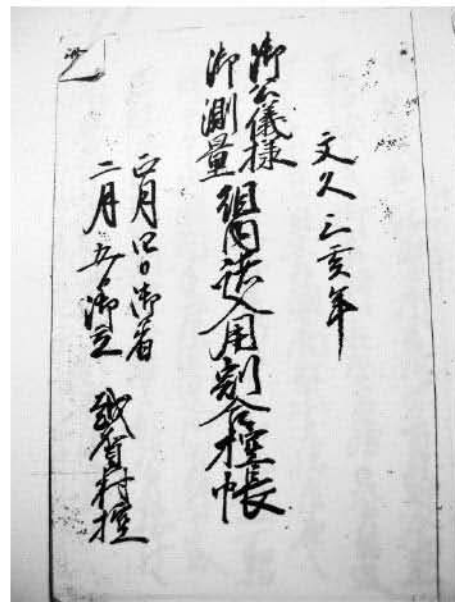


は郷倉の貴重な米で炊き出しを行ったのだ。



郷倉の屋根に鎮座するゑびす

連絡を取り、越賀村に行く前に津市庁舎内で越賀文書について多々ご教示を受けた。



御公儀様御測量組内諸入用割合控帳

そして文書コピーで原文を読み合わせていて、二人とも次の一文にぶつかった。

一月二日

岩橋様陸地御見分有らせられ弓神事半二的場へ御高来御拝覧遊ばされ村田様ハ妙祐ノ畑より御覧遊ばされ：

ピンゴ！である。一五〇年前の越賀村で、幕府海軍絵図認方の岩橋新吾は、御用中西方浜へ降りて歩いてゆき、参集している村人に交じって「弓引き神事」を見ていたというのだ。

中世からの古い伝統神事『弓引き神事』は今も続いている。

乙矢、吹矢、中矢役選ばれた村の「品行方正」な六人の若者が越賀神社でお籠りをして潔斎精進してのち、西方浜で身を清めて古式にのっとり、

三回ずつ弓を引く。この役に父子三代にわたって務めた、とお話し下さった宿「磯月」の御主人によるとこの時射的の中心には「鬼」の一字が書いてある。それを神社社務所に籠って潔斎中煮炊きで使用した釜の底に付いた煤を削り溶いて作った墨で黒く塗りこめて封じてある、というのである。

いざ弓を引こうとするとところで「しばらく、しばらく」と割って入り新年を寿ぐ祝詞の言上があつてから、六名は次々と弓を引いてゆく。

「…(略)、当たっても当たらんでも、神事、神事、ぴつしやり当てらつしやい」と言い継がれて来た祝詞を聞いて弓を引くのは、プレッシャーなのだ、と御主人はいう。

西方浜は昔もつと広がったんよ、三分の一くらいは浸食されて狭くなったと思う、とも。

では、もつと広がった西方浜へと歩いてゆき、村人達の傍らで神事を岩橋は見ていたわけだが、数百メートル離れた妙祐の畑からは、測量中の村田弥助が「ご覧になった」と文書は記している。

「妙祐の畑」というのは昔熊野詣の途中この村に住みついた比丘尼妙祐の庵室の畑であつたといひ、現在も村の年配の人々はその呼び方を覚えてる。

郷土誌には多少異なる記述があるが、土地の人はそう云い伝えている。

その場所は現在駐車場だが、記録にあるようになるほど西方浜を眺める事の出来る位置である。ちなみに村田が測量の手を止めて眺めたという畑

冒頭で述べたように当時の私はこの測量隊に参加した岩橋新吾の動向を知りたかつた。

越賀村の事前調査で、面白い記述に出会っていた。それはこの地方の村々で行われる正月の神事についてで、越賀村では『弓引き神事』というものが古来行われてきている、というものだった。「西方浜」で正月十一日、村で選ばれた六名の青年が弓を射る。

幕府測量隊は文久二年暮を鵜方村で過ごし明けて文久三年正月四日、この越賀村へ移動してきている。

好奇心の強そうな岩橋はこれを見ていたに違いない、と直感した。

私は三重県史料編纂グループの藤谷彰先生に

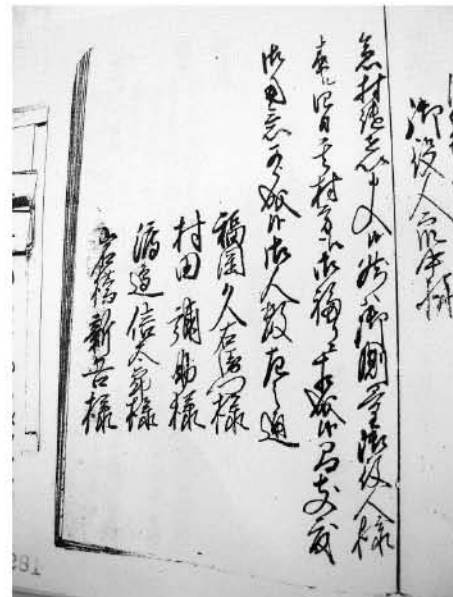
は新年の「福広げ」を行う畑祀を行った数日後にあたる。正月初めての「肥撒き」を行って数日後なのだから、村田の足元からは妙祐ならぬ、妙香が立ちのぼっていたかもしれない。



西方浜

『越賀文書』は越賀村へ測量隊がやって来た文久三年正月四日、測量隊長である福岡金吾や岩橋らが村へ到着すると水夫共々すぐさま城鼻を見分し岩井戸に榜示標を立てる作業（示くい打ち）に取り掛かった、という記述から、二月五日に次の目的地である片田村へ移動で村役一同が片田村ま

でついて行きお見送りをした、という記述まで日々測量隊の動静を伝えている。



次の村へと移動する際、御見送りに庄屋や村役が同道するという伊能測量隊の時のルールをそのままに踏襲しているのが興味深い。
季節の違いで、伊能隊は梅雨時で測量が予定通り進まなかったが、幕府測量の時は冬の晴天続きで、村では「雨乞い」を行った、とある。程なく恵みの雨は降ったが風が強く海に出られず測量は休日となった。

海上からの測量であるから、漁業を生業とする村々にはこれは負担であった。獲物の種類によっても漁に出る時間がそれぞれなのに、測量御用となればその時間の漁は断念せねばならない。
時には始終付き従って、弁当、茶菓、煙草盆は勿論、酒迄を供する準備も行ったらしい。
極寒の冬の海上での測量では暖を取るために一杯引つけたのかどうか、それで測量に支障はなかったのか：等と微笑を誘われる。

勝海舟の『海軍史』には測量隊の名は次の七名が記述されている。

海軍一等士官	福岡久右衛門
同 二等士官	塚原銀八郎
同	渡辺信太郎
三等士官	長田清三
同	宮永扇三
絵図方	野村総右衛門
同	岩橋新吾

他に水夫四名、で計十一名とある。しかし尾鷲市史には、これに加えて三等士官前田右太郎、同・村田弥助の名が挙がり、他に家来四名を含めた計十七名との記録がある。

これを越賀文書の記述を見ると当初村に現れたのは測量隊の長である福岡金吾、長田、渡辺、村田、そして岩橋で、越賀村滞在もかなり終盤になって突如塚原銀八郎、野村総右衛門の名が出てくる。
(宮永、前田の名前は一見して発見できなかったが) この名を振り分けると、

福岡・渡辺、長田、村田、岩橋
塚原・(宮永、前田)、野村、となる。

階級でバランスすると福岡を長とするグループと別動隊である塚原を長とするグループが出来るし、目的によつては少人数、あるいは単独で作業を行っている。

福岡と塚原は共に先年の英国測量船アクテオン号に目付役としてアクテオン号に乗船し測量技術を実地に学び、彼らが伊能小図は英国側へ手渡し

たのだった。

岩橋がよく組んでいるメンバーが福岡、長田、村田である。

福岡隊の絵図方として岩橋が、塚原隊の絵図方には野村総右衛門が当たったように想像するが、岩橋より一年早く軍艦操練所の出役していた野村はこの時すでに齢五十を超えている。尾勢志測量事業のあとの幕府海軍絵図認方は岩橋新吾が実質リーダーであったと思つてよい。

技能で出役を示す「業前」の場所の等級で岩橋が野村他より一等級上とされている事もそれを物語する。

なお、人名中家来とあるのは測量隊メンバーの身分によつて高禄の者は自分の家来を召し連れての参加であることを示す。渡辺信太郎は家来を二名連れての参加であつたらしい。そして何事かがあつて渡辺は越賀村滞在中、江戸からの書状が到来すると翌日帰府の途に就く。越賀村で渡辺信太郎は離脱した。急遽江戸へ帰るその渡辺に付添つて長田と共に神明村まで見送っているのも岩橋だった。

ここで詳述はしないが、越賀村の一か月にわたる滞在の記録中「岩橋」の行動の記述が他の測量隊メンバーと比較して圧倒的に多いことに気がついていた。何故か。

それは彼がきつとこの伊勢・松坂地方、いわゆる南勢地域で生育した、という事が関係していると思う。

御公儀の海軍測量方御一行のうち、おっとりとした伊勢言葉を話すお武家は岩橋しかいなかったであろう。「言葉」の親和性ではあるまいか。

岩橋新吾は伊勢松坂（周辺とも）の出身であるとされる。天保六年生まれという彼は嘉永年間江戸に出て狩野派絵師の修業をした後、幕府御家人の御先鉄砲組同心岩橋家を継いだ。ご家人株を買った所謂「金上侍」であるか岩橋家縁故の継養子であつたかは不明だ。

三十俵二人扶持の組同心など幕府の中ではお目見得以下の微禄な身分である。江戸の町人は御城門守備の御先手同心を陰で「番太」と揶揄する事もあつた。

それが越賀村では「岩橋様御高来、御拝覧遊バサレ」というのである。大げさだが辺境の田舎で御公儀のお武家様とは大層なものに写つたのであろう。

伊能忠敬が「御公儀御用」の威光を思つたように岩橋は故郷の地で改めて自分の立場を思つたかもしれない。

この尾勢志測量から数年後、彼は榎本艦隊と共に箱館戦争を戦う。

五稜郭降伏・謹慎の後、明治三年四月赦されて降伏人一同と共に静岡に赴いた。東京の新政府内では絵図・測量技術の腕を見込んだ岩橋の争奪が起きていた。

二月十二日申立起候 地図製式

港泊海岸測量算術 右得業之

岩橋新吾…(略) 此者地図ニ於テハ

無比類者ニ御座候当時土木司ニテ

住所探索ノ由ニモ遙ニ承知仕候得バ

至急ニ御達相願度…

(「岩橋新吾採用之義申出」)

二月と言えば五稜郭降伏人はまだ謹慎処分中で岩橋は仲間と箱館の弁天台場に押し込められている最中である。すでに新政府海軍操練所では岩橋を早く出仕させるべく政府中枢に運動を行つていたので。降伏人一同の謹慎が解けたのが四月十二日のことで、静岡に入つた五月になつても海軍操練所には岩橋採用許可の沙汰がなく、再度岩橋の召し出しの督促を行つているのである。土木司の方でも岩橋の所在住所の探索に乗り出しているのだ、至急こちらに出仕させる命を出せ、という切羽詰まつた催促ぶりである。

「地図製式港泊海岸測量算術得業」、「地図ニ於テハ無比類者」の岩橋はその技量故に新政府にとつても不可欠な人材だった。

岩橋の新政府出仕に付いては旧鳥羽藩士の近藤真琴の働きかけがあつたといわれている。近藤真琴は旧幕海軍所翻訳方を務めており岩橋とは職場の同僚であり同じ南勢出身である。尾勢志測量時、鳥羽藩側から公儀測量方の対応を行った藩士の一人が近藤真琴だった。二人は生涯を通じて交誼を結んでいる。

岩橋の幕府軍艦操練所絵図認方出役は文久元年十一月である。幕閣で測量事業の決定をみると時を置かずに、南勢地方出身で絵を描く彼が出役する。もはや運命的でさえあつた。

先人伊能忠敬達が測量したのと同じ海岸線歩き、山を描く。短艇に乗つて水深を測量した。

そして、越賀に入つて十日余り後の十五日、彼らは宝珠院で圖引きを行つている。



宝珠院への坂道

測量結果である海図は慶応元年に完成、幕府に上呈された。

文久三年秋に完了した測量結果を海図に仕立て上呈したのが慶応元年秋で、海図作成に入ってから二年かかっている。

如何にも時間がかかっているが、まず遠因として軍艦操練所が元治元年三月焼失したことが挙げられる。

進みつつあった海図作成はいくらか影響があったであろう。

そして同年から岩橋は、横須賀製鉄所建設にか

かる用地選定の横須賀湾測量にも駆り出されており、二、三カ月単位での出張が二回あった。恐らく尾勢志測量の海図が完成する前後、今一度海岸周囲御用についている。

横須賀・舟越周辺の測量結果も実測図として仕上げねばならないであろうから、尾勢志測量の海図だけで時間を費やすわけには行かなかったはずである。絵図認方は慢性的に人出不足だった。

ともあれ、慶応元年八月漸く仕上がった尾勢志測量の海図の「御褒美」として同年暮十二月二十八日、岩橋は金二十両を頂戴している。これは開成所の画学局の地図作成の「御褒美」と同額である。

さてそれがいったいどんな海図であつたのか。

岩橋自身は勿論その下絵類を自宅に保管した。それを息子章山が保持していると思われる文言を西田武雄が美術雑誌『アトリエ』に書いている。同誌が刊行されたのは昭和十年で、その時点までは下絵類は岩橋家に存在していたのであろう。その後は未詳のまま現在に至っている。

上呈された海図の所在については以前国土地理院で「内務省から引き継がれた地図が関東大震災をくぐりぬけ、太平洋戦争時、山梨に疎開させていまだ手付かず未整理の地図類が東大にあると思う。運が良ければその中にあるのかもしれない」というお話を伺っていた。

ならば、可能性はゼロではないのだとずっと思っている。

岩橋の評価を決定付けたこの海図の行方を希求する私に微かに光がさしたのは二〇一三年、当会代表理事の鈴木純子先生の御研究に接した時である。

前述の手付かず未整理のままだった地図類の整理作業の中で、この尾勢志測量の原図の写しと思われるものが発見されたのである。

「明治期の転写図と思われる」というこの「尾勢志海岸實測圖」は未だ一般には公開されていないため実見する機会を私は持っていない。伊能図との検討については以下に鈴木先生の御研究から引用させていただきたい。

『海岸線に注目すると、測量の基礎史料として伊能図（大図）が使用されている事がわかる。しかし、測量範囲の海岸線は改測され、測量範囲外の渥美半島東部と渥美湾奥の砂州に伊能図の海岸線が顔を出している。（次ページ図6・図7）。図で太く濃い線で描かれた海岸線は改測部分、細く薄い部分は伊能図の海岸線である。』『幕府海軍から海軍水路部へ』鈴木純子・東京大学史料編纂所研究紀要第二十三号）

写真で見ると感じる「写し」の精緻な描写、そして鈴木先生の指摘される料紙の裏打ちの入念な仕様、丁寧さは岩橋の他の作品にもみられるもので保存を考えての周到さが共通しているように思う。

早計に過ぎるが、岩橋はかつて自分が幕府下で描いた実測図のこの「写し」に何かの形で直接関係したのではないか、という想像を私は止められない。

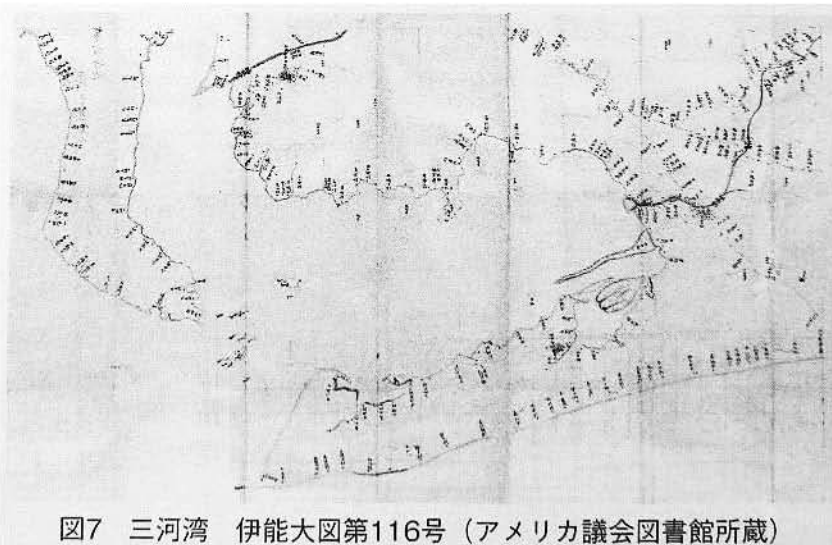


図7 三河湾 伊能大図第116号（アメリカ議会図書館所蔵）

『幕府海軍から海軍水路部へ』鈴木純子より引用

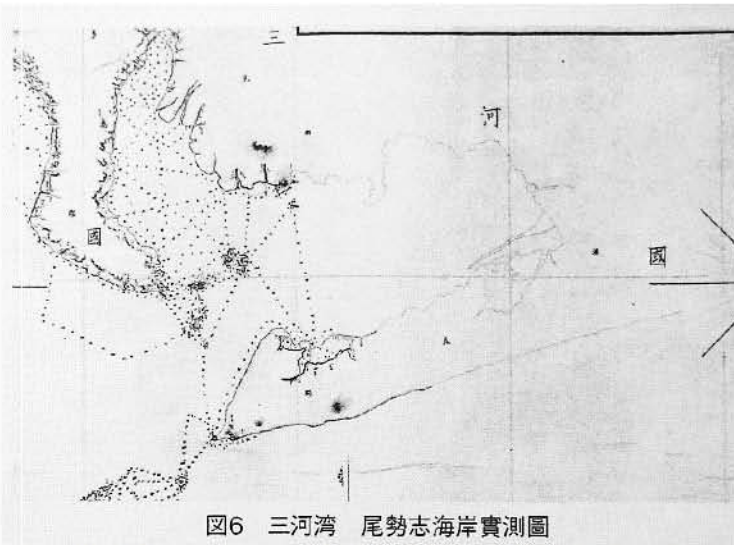
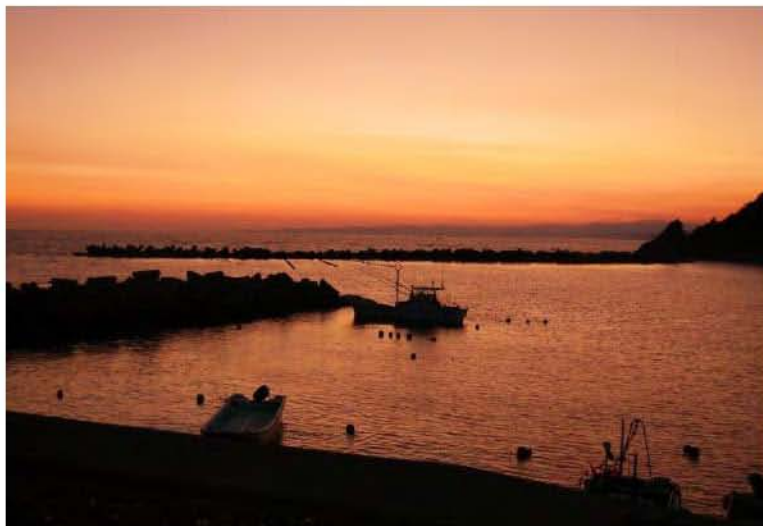


図6 三河湾 尾勢志海岸實測圖

湾奥部の砂州の形に注目、海岸線の太い部分が文久測量、細い部分が伊能図

『幕府海軍から海軍水路部へ』鈴木純子より引用



この原図の所在を含め、不明な点の多いこの尾勢志測量の史料発見と研究が進むのを私は心待ちにしている。

この『實測圖』の御座から越賀、和具村にある海上浅深計測ルートと『越賀区有文書』他にみる測量隊メンバーの行動の照合を試みると測量の実際がより具体的に浮かび上がるかもしれない。

明治初期の近代地図作成には伊能図がデータとして使われ、あるいは関連部局で多くの謄写が成された。内務省地理寮から地理局地誌課、更に修史館と伊能図利用の現場にはいつも岩橋がいた。伊能図の存在を抜きにして彼を語ることは出来ない。

越賀の夕暮れは美しかった。

あの時私の見た美しさは、きっと今も二〇〇年前も変わらない。伊能忠敬や岩橋新吾も同じ夕暮れを眺めたはずである。

遥か地平線に沈みゆく夕日は、荘厳でさえある。

引用・参考文献

- 米国議会図書館蔵伊能図大図一一七号
- 伊能中図第五図 尾鷲
- 『磯部町史（上）』志摩市磯部町
- 『尾鷲市史上巻』尾鷲市
- 『伊能忠敬測量隊の記録』三重県史料資料叢書Ⅱ
- 『開国起源』勝海舟全集二 勁草社
- ブログ『神宮巡々』<http://jingul25.info/>
- 『幕府海軍から海軍水路部へ』鈴木純子 東京大学史料編纂所研究紀要 二十三号
- 『越賀区有文書』（志摩市越賀地区）
- 『海軍省 公文類纂』防衛省防衛研究所
- 『アトリエ』十二巻九号 昭和十年九月
- 『正智遺稿』岩橋章山 明治四十三年 復刻版・明治美術学会 平成二十年

川幅測定場面を記した野帳の

解説と検証

戸村 茂昭

はじめに

今年から遡ること二一〇年も昔の文化三年正月二十八日、第五次伊能測量隊は備前福山城下に到着した。翌二十九日の日記を紐解いてみると、図1のようにしたためられている。

解説すれば次の通り。

「同廿九日朝曇天。六ツ後福山城下出立。東河、坂部、下河辺、丈右衛門、^{角二、榮二、}川口村^{丈助、半六、}芦田川前より水呑村境まで測る。

高橋、稻生、小坂、佐藤、**浅五郎**、吉平、前夜徳山より乗船、夜八ツ頃簗島へ着く。夜明て手分にて測り午後に水呑村・・・」

ここで**浅五郎**とは窪田浅五郎といい、測量術を学びたい、と以降一ヶ月近く測量隊に随身した地元の人である。その窪田家にこの日の測量メモ帳が遺され、現在は岡山県立博物館に所蔵されている。なお、この窪田浅五郎については本会の七十八号会報で紹介した「路程車発見」の記事にも登場している人物である。

図1 測量日記（原文）

同廿九日朝曇天。六ツ後福山城下出立。東河、坂部、下河辺、丈右衛門、^{角二、榮二、}川口村^{丈助、半六、}芦田川前より水呑村境まで測る。高橋、稻生、小坂、佐藤、**浅五郎**、吉平、前夜徳山より乗船、夜八ツ頃簗島へ着く。夜明て手分にて測り午後に水呑村・・・

本稿はその測量メモ帳いわゆる野帳を解説しつつ、伊能測量隊のマニユアルとされている「伊能東河先生流量地伝習録」と対比しながら解説を加えて見ることににより、測量現場での生々しい状況を伺い知ろうと試みたものである。

一、野帳（測量メモ帳）の解説と解説

前述の測量日記にしたためられている地点は伊能大図第一五七号に描かれている。この伊能大図はアメリカ大図としては存在しておらず、現在分かっているのは図2に示す海上保安庁海洋情報部所蔵のものだけだそうである。



図2 伊能大図第157図
海上保安庁海洋情報部所蔵
伊能大図より抜粋した部分に、測線を浮き上がらせると共に地名を加筆した。

この伊能図は通常の伊能大図のように地名などの情報を書き込まれていないが、図から分かるように簗島は当時、独立した島であったようである。しかし、二一〇年後の現在では川口村から陸続きになっている（図3）。



図3 地理院地図

図2における測線と簗島を地理院地図に重ね合わせた。

当時の川幅は左下の尺度で照らし合わせてみると大凡 800～850m

窪田家に遺されていた測量メモ帳（図4）は図2における測線のうち芦田川の川巾を測ったものである。

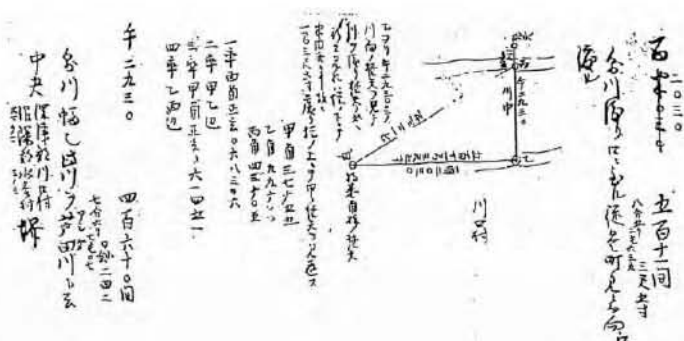


図4 芦田川の川巾測定の野帳
岡山県立博物館所蔵
測量留（目録番号2-6）

図5は図4の野帳にしたためられている文字を解読してみたものであり、野帳の下段がその解読である。

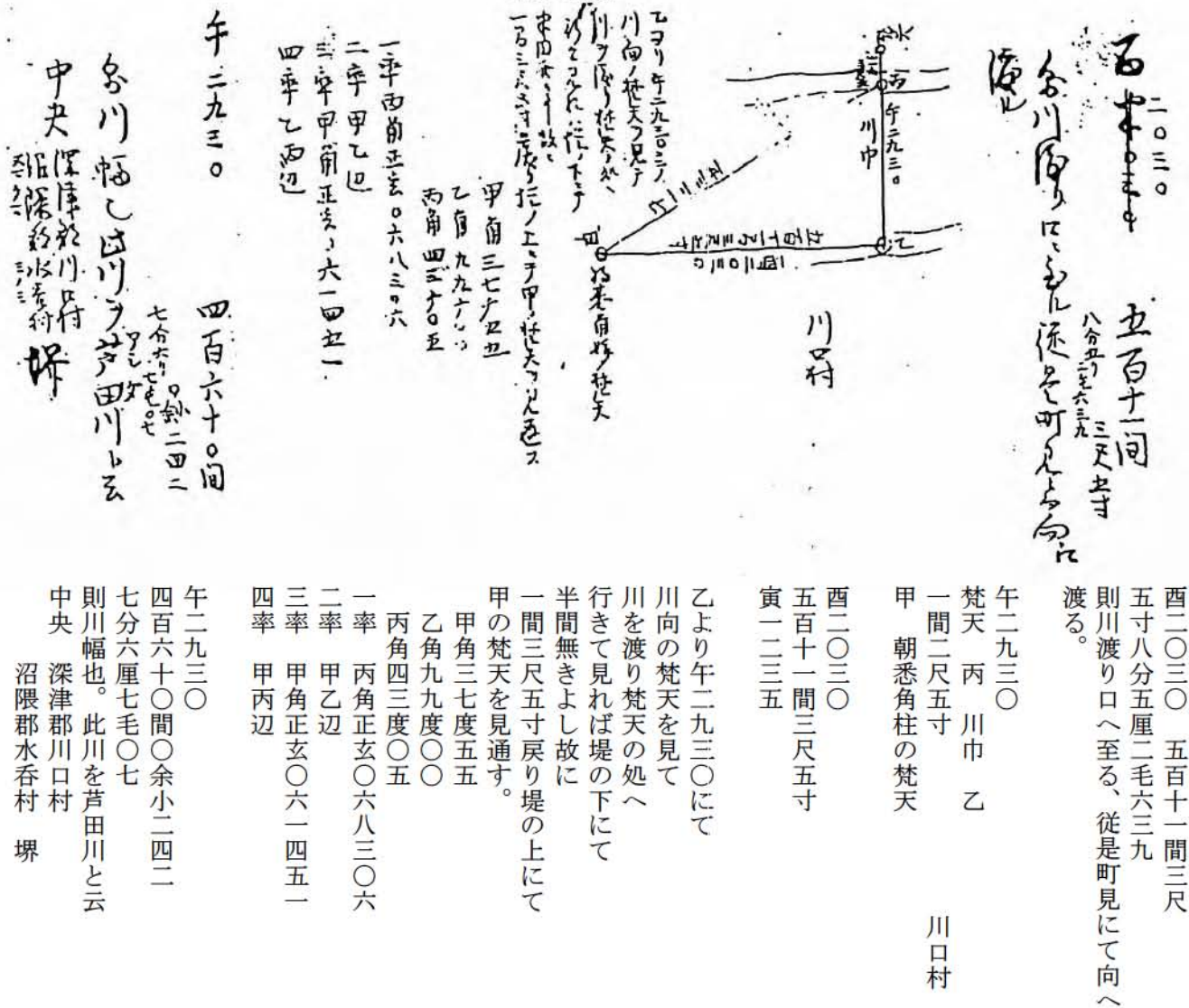


図5 芦田川の川巾測量の野帳（解読）

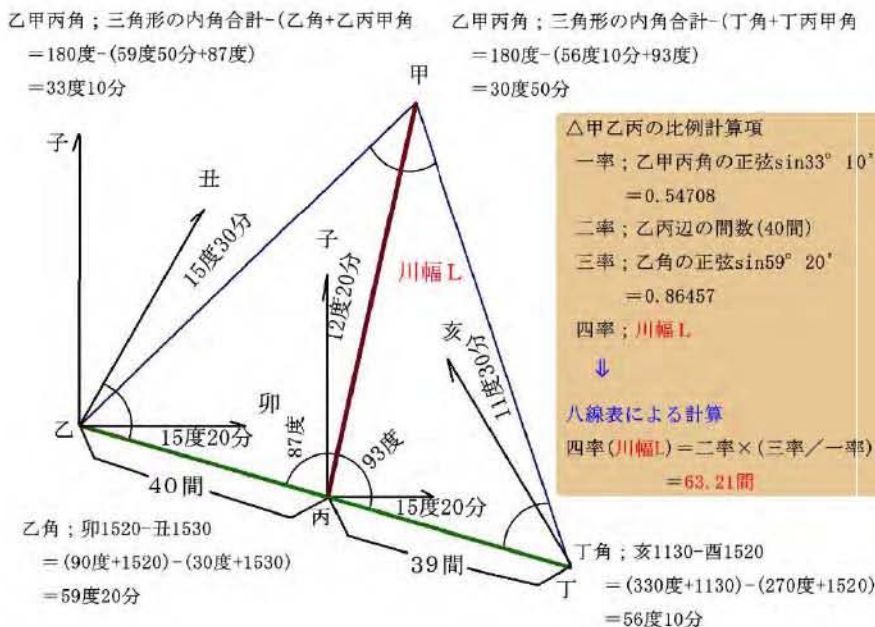


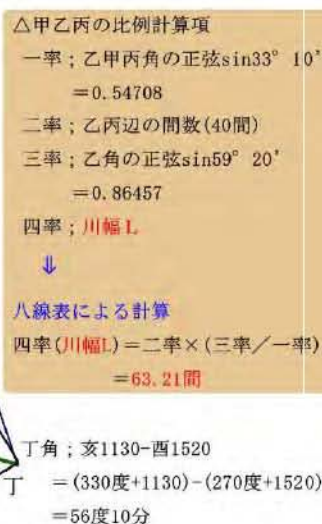
図6 川幅測量方法説明図（保柳睦編著「伊能忠敬の科学的業績」掲載の量地伝習録から誤謬を修正の上推算部分を補足）

二、野帳（測量メモ帳）の川幅測量の検証

ア、川幅測量方法を量地伝習録で予習

実行的な測量であつた芦田川の川巾測量の野帳を検証する前に、伊能忠敬先生流の川幅測量方法をしたためてある量地伝習録を予習してみることにする。

量地伝習録・町見の節の記述によれば「川幅ナドノ間数ヲハカルニハ、凡ソ川幅ノ十分ノ一乃至二程モ川形ニ上下にヒラキ、方位盤ニテ方角ヲ測ルベシ（矩ノデニヒラクニ及バズ）。ソノ方角を以テ繪図ヲ引キ、間数ヲ求ムベシ。モシ八線表ヲ以テ推算スルトキニハ、左ノ如シ」。



量地伝習録では川幅測量として

「対岸に長さ三間の梵天を立て、その梵天の頂上に対する正接(仰角)を測定して計算する」という狭い川幅の場合の直角三角形による解法も説明しているが、本事例の場合は川幅が一キロメートルにも及ぶ事例であるからこの解法の対象ではないので言及から省くことにする。

さて忠敬先生の意図を付度して現代風の言葉で前記の測量方法を忠敬先生になったつもりで講釈すれば、次のようになるであろう。

先ず、川の手前の川岸沿いに、梵天丙を中心左右に梵天乙と梵天丁を川幅の十分の一ないし二程度の距離をとって立てる(ヒラク)。

次に、川を渡った対岸にも梵天甲を立てる。

その際、川向こうの梵天甲と手前の岸の梵天丙を結ぶ辺丙甲と手前の川岸の梵天乙―梵天丙―梵天丁を結ぶ辺乙丙丁(直線)とは必ずしも直角にする必要はない。何故ならば、大きな川幅の場合は直角にしようとする調整のための声は届かないのだから実行的に直角にすることはできないからである。

そのようにして立てた四本の梵天に対し手前の岸に立てた梵天相互間の間数を測る(図6では辺乙丙の四十間、辺丙丁の三十九間)。

次に半円方位盤を使って手前の岸のそれぞれの梵天から対岸の梵天に対する方角と手前の岸に立てた梵天相互間の方角を測る(図6では辺乙丙の卯十五度二十分、辺乙甲の丑十五度三十分、辺丙甲の子十二度二十分、辺丁甲の亥十一度三十分)。

最後に、測定したデータをもとにして二つの三角形からなる図面(図6)を作成し、三角形の内角を計算して四つの比例項を求め、比例式を使って川幅を推算するのである。ここで、三角形を二つにする目的は測定誤差を補正するためであるから、誤差を小さくできる場合は臨機応変に三角形は一つでも構わない。

イ. 芦田川の川中測量時の野帳の検証

図5において、最初に書かれている文字は「西二〇三〇 五百十一間三尺五寸、八分五厘二毛六三九、即ち川渡り口に至る。是より町見にて向へ渡る」である。

野帳の冒頭にメモされているということは当日に測量した最初のデータであるということとを意味しているようである。つまり、前日の測量終了地点に打ち込まれた甲の杭から堤防沿いに五百十一間三尺五寸離れた川を渡る渡船場(乙の地点)に立てた梵天の方角は西の方角二〇三〇(二十度三十分)であった、ということであろう。

図6及び図5は南北の上下が逆になっているため理解しづらいので、測量結果の伊能図である図2或は現在の地図の図3と同じ方角になるように表現を変えたものを図7に示す。

西の方角というのは図8に示すように十二支で方角を表現する方法であるから、真西の方角から二十度三十分ほど北よりの方向に当たり三百六十度換算では二百九十度三十分ということになる。



図8 十二支による方角表現

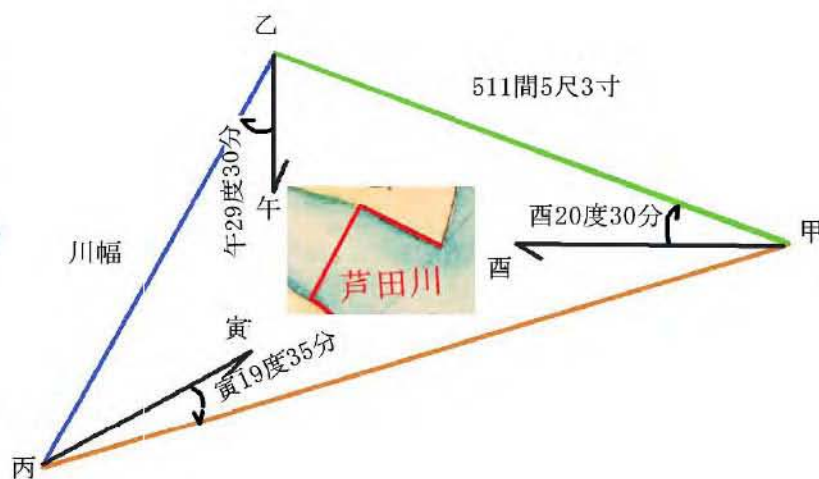


図7 川幅を求めるための絵図

次にメモされている情報は「八分五厘二毛六三九」である。「分」「厘」「毛」という表現は尺貫法における長さの単位で「分」は「寸」の十分の一という短い長さである。そのデータが五百十一間三尺五寸というデータに対する注釈のように表現されているところを見ると、大図として表現する場合の縮尺した長さのようである。即ち一間は六尺であるから五百十一間三尺五寸は三千六十九・五(511×6+35)尺となり、分で表現すると三〇六九五〇分、これを大図の縮尺の三六〇〇〇で割ると八・五二六三九つまり八分五厘二毛六三九となつて野帳の表現と合致する。メートル法では二十五・五七九ミリメートルに相当し、この有効数字に接してみるにつけても、伊能測量が如何に緻密であるかをこの野帳から知らされ感動のあまり脱帽してしまつたものである。

ところで、「伊能東河先生流量地伝習録の『町見』」の項によれば、前述したとおり「**川幅ナドノ間数ヲハカルニハ、凡川幅ノ十分ノ一、二ホドモ川形に上下二開キ・・・**」とされていることと比べて、結果論であるが本件の場合には川幅とほぼ同等の幅の五百十一間五尺三寸（一キロ弱）も開いている。伝習録の意味することは誤差を極力小さくするためと解釈されるから、大きく開く分には問題ないわけである。多分、甲の地点から見て渡船場迄直線であつたので一気に川幅を測つてしまおうと判断して甲乙を大きく開いたのではないだろうか。その結果として、伝習録で教導している二つの三角形測量は一つの三角形で対応したようである。因みに

伝習録の事例(図6)でも、推算した川幅が六十三・二一間に対し、開いた距離は十分の二を遥かに超えた八十間という距離に開いているのである。

次にメモされている情報は「是より町見にて向へ渡る」があつて中央上段の書き込みにつながっている。文字面を解読すれば

「乙ヨリ午二九三〇ニテ

川向ノ梵天ヲ見テ

川ヲ渡リ梵天の処へ

行て見れハ堤ノ下ニテ

半間なき由故ニ

一間三尺五寸戻り

堤ノ上ニテ

甲ノ梵天ヲ見通ス」

と読むことが出来る。

つまり、地点甲で実行すべき全ての測量(乙への方位測量と甲―乙間の距離の測量)が終わったので、振り返り方位測量のための甲地点の梵天を立てている者だけを残して芦田川の堤防を乙地点迄全員が進み、次に乙地点から対岸の丙地点に予め立てられた梵天への方位を測量(町見)したところ午の方角二九三〇(二十九度三十分、三百六十度換算では二百〇九度三十分)というデータを得たというこのようである。導線法ではここで更に乙―丙間の距離の測量が必要であるが、此処は川の中であり目の子で見ると五百間前後はありそうなので間縄が使えない。そこで、此処は後で計算によって求めることとして、舟で対岸まで進むことにしよう、とプロジェクトリーダーの伊能忠敬先生は判断したと想像される。

そこで、舟で対岸まで進んでみたところ、丙地点に立てた梵天の位置は堤を境にした川とは反対側の堤の下で幅が半間もなかったため、測量作業ができない。

そこで、堤の上の地点甲への方位を測れるところまで戻った。戻ったその距離は一間三尺五寸であつたということのようである。まさに愚直なまでの忠実なレポートである。

そして地点甲への方位を測つた結果は**寅の方角一二三五(十二度三十五分、三百六十度換算では七十二度三十五分)**であつたということのようである。

次にメモされている情報は
中央中段である。解読すれば

「 甲角三七度五五
乙角九九度〇〇
丙角四三度〇五

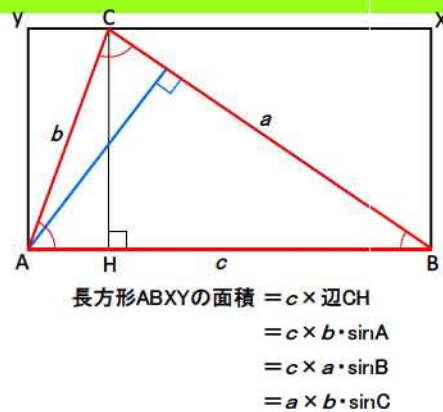
一率 丙角正弦〇六八三〇六
二率 甲乙辺

三率 甲角正弦〇六一四五一
四率 乙丙辺

と読むことが出来る。」

この部分は伝習録における「**絵図ヲ引キ**」というマニュアルで示されている作業をした結果であろう。即ち、測定値として得た「甲乙辺の五百十一間五尺三寸」という間数及び酉の方角**二〇三〇**という方位、「午の方角**二九三〇**」という乙丙辺の方位」並びに「寅の方角**一二三五**という方位」を基にして△甲乙丙の絵図を作成し(図7)、その絵図の上で、先ず「甲角」「乙

角「丙角」の角度を図9の通り推算したのである。
 このように三角形の各頂点の内角のデータが野帳にしたためられ、且つ、この時点において「率」という表現の比例項がしたためられておれば、高校で幾何を習った者ならば、これは三角形の解法の一つである**正弦定理**(図10)によって川幅(四率の乙丙辺)を求めようとして



等号で結ばれた全てを abc で割れば

$$\frac{\sin A}{a} = \frac{\sin B}{b} = \frac{\sin C}{c}$$

$$\frac{a}{\sin A} = \frac{b}{\sin B} = \frac{c}{\sin C}$$

図10 正弦定理の証明

$$\begin{aligned} \text{甲角} &= \text{酉 } 2030 - (\text{寅 } 1235 + 180^\circ) \\ &= 270^\circ + 20^\circ 30' \\ &\quad - (60^\circ + 12^\circ 35' + 180^\circ) \\ &= 37^\circ 55' \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{乙角} &= \text{午 } 2930 - (\text{酉 } 2030 - 180^\circ) \\ &= 180^\circ + 29^\circ 30' \\ &\quad - (270^\circ + 20^\circ 30' - 180^\circ) \\ &= 99^\circ 00' \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{丙角} &= \text{寅 } 1235 - (\text{午 } 2930 - 180^\circ) \\ &= 60^\circ + 12^\circ 35' \\ &\quad - (180^\circ + 29^\circ 30' - 180^\circ) \\ &= 43^\circ 05' \end{aligned}$$

図9 三角形の内角の推算過程

三、感想
 伊能測量隊の生々しい測量現場での様子をメモした野帳を解説し且つ検証していく過程

野帳の最後にメモされている左端の情報「午二九三〇 四百六十間二四二」は、この解法の答に合致する。
 すなわち、乙地点から午の方角二九三〇にある芦田川の川幅は四百六十間二四二であり、大図上では七分六厘七毛〇七ということになる。メートル法では二三三・〇一二ミリメートル、実際の川幅は八二八・四三二メートルという結果を得た、としたためた野帳だったということのようである。

$$\begin{aligned} \frac{\text{四率}}{\sin \text{甲角}} &= \frac{\text{二率}}{\sin \text{丙角}} \\ \text{四率} &= \frac{\text{二率} \times \sin \text{甲角}}{\sin \text{丙角}} \\ &= \frac{3069.5 \text{ 尺} \times 0.61451}{0.68306} \\ &= 2761.45 \text{ 尺} = 460.242 \text{ 間} \end{aligned}$$

図11 正弦定理に基づく推算

いるのだろうかと言うことは分かるというものである。
 すなわち、図11のとおり川幅を推算したことになる。

で、毎日が日曜日のシニア世代を過ごしている筆者は、図らずも高校一年の時の幾何の時間を思い出し、遙かに過ぎ去った往時を懐かしく思い出したのであった。伊能測量では坂道の距離測量データから地図制作のための平面の距離を求めたり、富士山の高さを求めたりするために三角関数を使っていることは解説図書から知っていたが、川幅を求めるために**正弦定理**を使っているなどということは浅学にして知らなかったのである。正直なところ正弦定理の存在さえも忘れてしまっていたのである。
 江戸時代は和算が盛んで円周率などを使うかなり高度な計算まで出来るようになっていたということは耳学問で知っていたが、その現実的な求め方を伊能測量の遺した史料を目の当たりに出来て感動したものである。
 また、その正弦定理の活用で求めた川幅を現在の地図上に照らしてみた結果はほぼ正確であることも感動のものであった。その正確さの背景には間縄(間のオーダー)や鉄鎖(尺のオーダー)を凌駕した五百十一間五尺三寸という「寸(三ミリメートル)」という細かさのオーダーまで求められていただけでなく、方位測量のオーダーも分度器や杖先羅針ではオーダー的に無理な「分」までを得ることが出来る方位盤という測器を備えて使っていたことにも改めて感動したのであった。
 最後に、本稿を仕上げるために甲角、乙角、丙角の推算や正弦定理に基づく推算という頭の体操に没頭することによって、よっぽど脳細胞の新陳代謝が行われた様に感じスツキリしたのであった。(了)

連載 新説 伊能測量物語 (再開)

第五話 第二次測量始まる

渡辺 一郎

松島湾、三陸海岸で大々的に海上引き縄

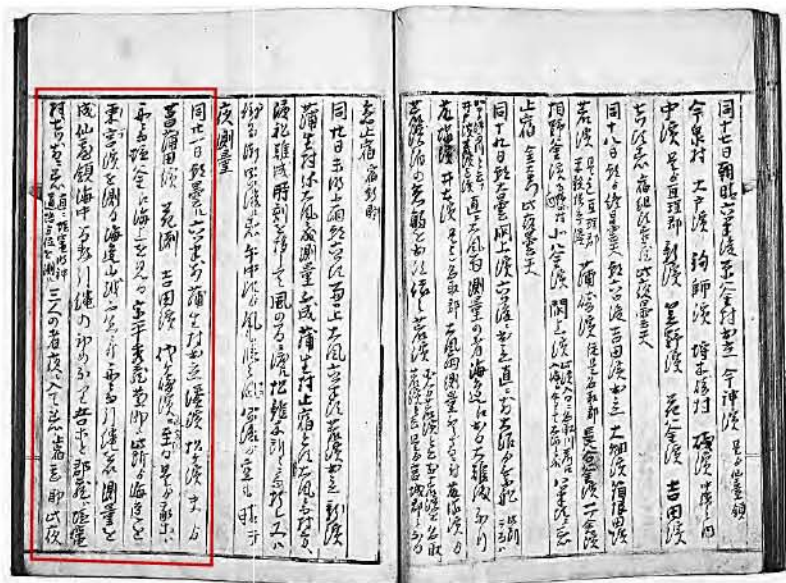
東日本大震災の被災地域の七ヶ浜町から塩釜、松島から石巻、釜石までの仙台領の測量では、海中引き縄が大幅に取り入れられていた。海中引き縄は各地でおこなわれているが、伊能大図を眺めて、これほどはつきりと海中引き縄がみられる地域は多くはない。

仙台藩領に対しては、他と同じに、幕府勘定奉行から幕府代官経由で伊能隊がゆくから、お定め安い賃金の人足提供と案内人を出せ、船手配も、という先触れが出されている。

大藩ゆえと思われるが、これに加え若年寄立花出雲守から江戸の藩邸にも通達が出された。これを受けて現地では家老片倉小十郎から領内の向々へ指示がされている。村々に流れているその通達を忠敬は測量日記に写しとっていた。

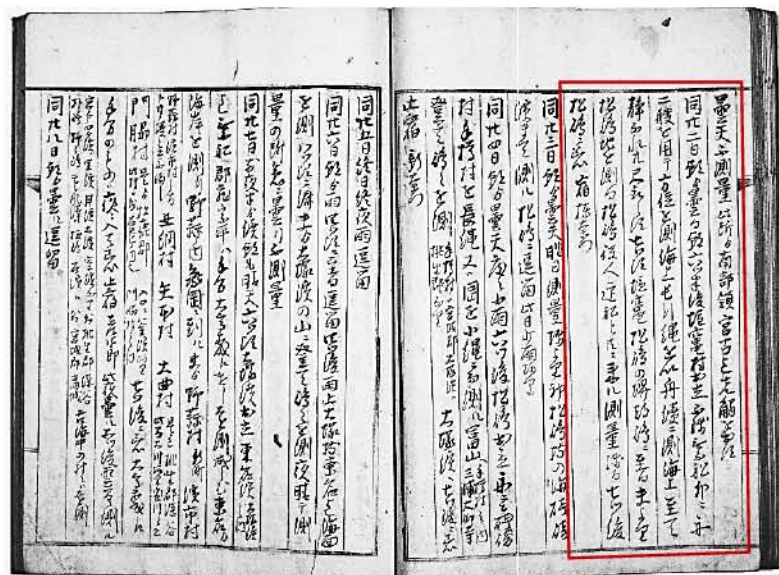
海岸線は入り組んで、沿岸に縄を引けと言われても交通路が船しかなく、海中を測った方が早い、ということだったかもしれないが、南部領では海上引き縄は行われていないから、幕府の丁寧な通達が影響しているのだろう。日記にはこんな風に記す。

享和元年八月二十一日、朝曇る。六つ半前蒲生村出立。湊浜、松が浜、それより菰蒲田浜、花淵、吉田浜、代が崎浜、東宮院に至る。是より我等は舟にて塩釜へ海上を見る。宗平、秀蔵、慶助は、此の所より海辺を東宮浜を測る。



海辺、山越不宜に付、舟にて引き縄を以、測量を成
仙台領海中間数、引縄の初めなり。吾等と郡蔵は塩釜
村へ七つ前に着。直ちに塩釜明神道路方位を測る。三
人の者、夜に入りて着。止宿甚助。此夜曇天不測量。
此所より南部領宮古迄先触れを出す。

「同二十二日、朝より曇る。朝六つ半後塩釜村出立。不残乗船、外に舟二艘を用いて方位を測る。海上長引縄を以、舟続に測、海上至て静なれども尺取らず。七つ頃塩釜松島の堺、都島に至る。それより松島地を測る。松島役人迎船と共に来る。測量残る。七つ後松島に着。宿棟右衛門」



伊能大図をみると、七ヶ浜の周囲は海岸を測り、東院浜から引き縄が始まる。翌日の記事を見ると、測量船は二隻で、初日、忠敬・郡蔵は地形を写生しながら塩釜へ先行したことがわかる。海中引き縄の具体的な方法は日記ではわからないが、指図する船の他に舟二隻の3隻では難しいと思う。

理論上は、発着二つの陸上の目標を決め、2点を結ぶ直線上で、A B二隻で順次縄を張ってゆけばいいのだが、実際的にはなかなか大変だ。最初は、起点に船Aを置き縄端を保持させ、船Bに縄を落としながら目標と結ぶ直線上を縄引をさせればよく、Aから目標を結ぶ線上をBが進めるよう合図するだけでよい。

縄が終わったら、Bを固定点として縄を保持し、Aは縄を巻き上げながら進む。全部上げたら、縄端をBに渡して、Aが縄を落としながら目標に向かって進む。進路はBから目標を結ぶ直線に入っていればよい。これを繰り返し、測量は可能な筈である。

しかし実験してみると、そう簡単ではない。直線上を進ませるには、陸上から合図してあげないと出来ないのではないか。

縄には浮を付けたと思うけれど、巻き上げるのは結構大変だ。海の中で船の位置を固定するのはさらに大変である。まさか、碇や竿を使つたとも思えない。遠山の方位を複数観測しながら位置をキープしていたとも思えない。なんとなく船頭の感に頼ったのではないだろうか。

二十二日、波静かだがはかどらない。松島村の船が迎えにきたが、予定が終わらなかつたという。何となく気持ちがわかる気がする。このあと、仙台領では海岸の海中引き縄が多くおこなわれているから、技術は向上した。各地の測線を伊能大図上で御確認をお願いしたい。

遙か後年の対馬の測量では、海中引き縄の地元史料が残っていて、先縄船、後縄船、中取船、羅針船、札船など数隻で引き縄船団が構成されているが、この辺ではとてもそうはいかないで、隊員の技量でカ

バーされていたと思う。

仙台領の海上引き縄の模様を測量日記から抜き出してみよう。

八月二三日 朝より曇天。昨日測量残り初、松島持の海を磯崎浜まで測る。松島に逗留。此日小雨あり。

同二四日 朝より曇天、度々小雨。六ツ後松島出立。舟にて磯崎村、手樽村を長縄、又は岡を小縄にて測る。富山、手樽村は宮城郡、大塚浜は桃生郡なり。大塚浜へ七ツ後に着。止宿新右衛門。

同二六日 朝より雨、四ツ頃に至る。逗留。四ツ後雨止。大塚持東名迄海面を測、八ツ頃に済。それより大塚浜の山に登り島々を測。夜晴て測量の所急に曇り不測量。

同二七日 前夜半より続朝も晴天。六ツ頃大塚浜出立。東名浜（大塚浜の内）迄乗船。郡蔵、宗平は手分、大高森へ遣し遠測成しむ。東名より海岸を測り、野蒜の内亀岡に到る。それより野蒜村、新町、浜市村（野蒜村、浜市村の間、トサノ湊という舟渡し）、丑網村矢本村、大曲村（是迄桃生郡深谷）、此間大川あり。定川という。門脇村、是迄牡鹿郡、此村は則、石巻の内也。七ツ後に着。大高森へ手分のものは夜に入て着。止宿彦四郎。此夜曇る。五ツ後雲間に測る。（宮戸四ヶ浜は里浜、月浜、大浜、室浜なり。則、桃生郡深谷。朴島、野々島、寒風沢、桂島、石浜は、則、宮城郡高城。右海中の村々は遠測。

同二九日 朝より曇天。朝五ツ前門脇村出立。

石巻村（門脇村と軒を並、川を、（北上川の流、則湊）渡り湊村、（則、石巻の内なり）、門脇村、石巻村三ヶ村を石巻港という。それより渡波村（根岸村の内）、祝田浜、佐須浜、小竹浜、（此所石巻より荷物積立。出帆を見合港なり。馬ノ背という小島ありて舟掛の所三四町四方もあり。深も三四尋程なり）。折浦七ツ前に着。（此日祝田浜、中食の頃小雨、無程止。七ツ頃より降出し夜に至る）。止宿弥右衛門。祝田浜より指ヶ浜迄を遠島という。

同晦日 朝曇。五ツ前出立。船中引縄を以測る。無程雨あり。月浦、待ヶ浜、荻浜、小積浜、牧浜、竹浜、狐崎浜七ツ前着。止宿検断佐十郎。此日度々雨、（月浦は前に小手島あり。二三町四方、深三四尋ありて港なり。海際引縄にて測）。此夜晴天。測量。

九月初日 朝より晴。六ツ後出立。船にて海岸引縄を以測量す。福貴浦、小網倉浜、大原浜、給分浜、小淵浦、（此所は上港なり。前に鮫島あり。湊入口中三百間それより段々幅狭、村中に入込む。居浦より十四町三十五間、深七八尋）、村中にて三尋二尋。小淵浦は給分浜の分郷なり。七ツ後に着。夜晴、測量。（此日大原浜にて桑原氏門人佐藤玄達に逢、此所の産なり。止宿へ見舞に来る）。止宿惣左衛門。此辺海中田代浜あり。島にて仙台罪人を流す所なり。（從横十八九町もありという。此所より網地へ渡るに一里半ありと。網代も長渡共に長さ一里半、横十八九町という。

同二日 小淵浦六ツ後出立。船中引縄海岸測量。

十八成浜、鮎川浜八ツ半後に着。止宿肝入勘四郎、(此朝郡蔵手分鮎川浜より山鳥の渡まで測量に遺す所、明日測量行路都合不宣に付、鮎川より山道一里五六町新山浜測量)。此日曇天、夜小雨あり。(此海中に網地、長渡二島あり。実は一島なり)。

同三日 朝より曇天、小雨。金華山渡海不成。逗留。夜少晴て測量。

同四日 朝曇天。五ツ前鮎川浜出立。乗船金華山へ渡る。登山、愈曇て遠山遠岬不見。それより新山浜、迎船に乘て昼後に着。小雨あり。宵曇、五ツ頃より晴る、止宿三右衛門。

同五日 前夜より西風、朝は晴る。それより曇る。六ツ後新山浜出立。泊浜舟引縄にて測る。泊浜より西風強、海上船にて測難く、宗平、秀蔵、慶助、泊浜より谷川浜迄陸を測る。郡蔵は谷川浜より陸、鮎浦迄測る。(谷川浜の前に谷川浜持の祝井浜あり。又同村持の大谷川浜あり)。郡蔵は九ツ頃、予は八ツ頃、宗平、秀蔵、慶助は七ツ頃に着ぬ。鮎浦止宿。肝入善兵衛。此夜測量。

同六日 曇天。朝六ツ半前鮎浦出立。寄磯浜、塚浜、飯子浜、野々浜七ツ頃に着。止宿肝入久兵衛。夜曇る。雲間測量(船中引縄島測る)。

同七日 曇晴。朝六ツ半頃野々浜出立。大石ヶ原浜、横浦、高白浜、小乗浜、鷺神浜、女川浜九ツ前に着。夜曇る。止宿大肝入丹野勇吉。家作よし。此日も船中引縄にて測る。

同八日 曇天。朝六ツ後女川浜出立。船中引縄

を以測る。宮ヶ崎、石浜、桐ヶ崎、竹浦、尾浦、出島、指ヶ浜、(是迄牡鹿郡)、分浜、(是より桃生郡)、此浜より十五浜という。七ツ頃に着。止宿秋山惣兵衛。此夜測量。

(海中に江ノ島あり。家八十六軒あり。仙台領の流人島のよし)。余、先年奥州松島を遊覧しけるに、頃は皐月末の八日、佐原を出立。鉾田という所まで乗船す。風波ありて尺取らず。漸に串挽へ着て船泊りしける。傍にも旅人乗し舟ありける。

苦越しに物語れば、松島より遠き分ヶ浜という所の秋山惣兵衛という者にて、交易の事に銚子港へ来り。復、その国へ帰りけるなり。

彼人いいけるは、一人旅の物寂しければ、願くは同伴し賜えかしと乞し程に、此方も旅なれぬ身の幸と同道しけるに、日々駅次、止宿の事などいと懇に執斗いける。十日程を経て仙台の城下に着けるに、此所の名所など案内し、且、酒食迄も篤く饗応しける。

別に臨て惣兵衛いいけるは、貴邦は吾郷を去る事百里余の山海を隔てぬれば、枉駕難かるべし。余は交易の為に銚子港、又は東都へ幾度も往来す。

その行路なれば、必尋ね問んと約して別れぬ。それより年を経ぬれど、互に音信をせざりしに、此度台命をこうむり、国々の海辺を来往しける。此国の守よりも令ありて止宿の事迄も沙汰せられけるに、不思議に、此分ヶ浜なる秋山惣兵衛なる者に舍り会ぬ。

真に深き因縁にてぞありける。終夜往事を語り合ひ、指を屈すれば安永七戊戌の歳にて二十四年にぞなりける。主じも別離を惜み

、此先の泊々二三日の間送別しける。

同九日 朝晴、又曇る。六ツ半後分ヶ浜出立。水浜(唐桑あり。雄勝浜の内なり)。雄勝浜、(此所にすずり石あり。高島に少し劣れり)。明神浜、小島浜、大浜、立浜、桑ノ浜、熊沢浜、大須浜七ツ頃に着。止宿仲兵衛。夜測量。

同十日 朝曇る。荒浜(舟越浜の内)、船越浜、名振浜、尾崎浜、長面浜(是迄桃生郡、分浜より此浜迄十四浜なり)。釜谷浜を加て十五浜という。今は釜谷浜は岡となり海辺にあらず。此前より肝入長沼甚蔵村々付添う。仙台領も村役人送迎案内は外に同じ。所により村役人の外、棒付役人案内す。右数ヶ村、又は数十ヶ村支配なし。その支配の村々より肝入検断一兩人出して、組村を案内せしむ。八ツ頃に着。止宿清兵衛。七ツ過より曇る。

同十二日 朝より曇る。六ツ後長面浜出立。船中引縄にて測る。郡蔵、秀蔵、大指浜より寺前浜迄陸地を測る。是より本吉郡十三浜という。追波浜(北上川の流あり。此所迄秋山惣兵衛送別)、吉浜、月浜、立神浜、長塩尾浜、白浜、小室浜、大室浜、小泊浜、相川浜、小指浜、大指浜、小滝浜(是迄本吉南方十三浜という)。長清水浜、滝浜、水戸辺村七ツ半後に着。此夜曇る。止宿は義内。(十三浜より村内の小浜々を除き本村ばかり出す。以下同じ。)

同十三日 朝晴。六ツ半後水戸辺村出立。郡蔵、秀蔵、手分にて陸地、折立村、志津川村を測る。宗平、慶助は船にて、海面引縄にて荒戸浜、清水浜を測る。是より本吉北方なり。歌津村の内華ノ浜寄木、伊里

米町八ツ頃に着。(舟測量は七ツ前。)夜曇る。

同十四日 朝曇る。六ツ頃伊里前町出立。郡蔵、秀蔵は歌津村の内稲淵、泊浜、中山、名足、石浜の陸地を測る。我等、宗平、慶助は船にて引縄を以、田ノ浦浜、湊浜、小泉村の内(蔵内浜、二十一浜、赤浜)まで測る。此所より平磯村止宿迄陸を測る。八ツ半頃に着。宿庄蔵。夜晴。測量。

同十五日 朝六ツ後平磯村出立。岩尻村、波路上村、長磯村、最知村、岩月村、松崎村、赤岩村、気仙沼八ツ後に着。此日曇、八ツ半後より雨、夜更て晴る。止宿日除儀右衛門。此主も先年米交易の事にて佐原村へ罷越し、我等宅へも相見舞。我等にも対面せしといひ。是も不思議の事なりき。

同十六日 朝五ツ前出立。船に乗、引縄を以測る。鹿折村、則、本吉郡北方という。唐桑村の小館浦九ツ後に着。止宿肝入人文左衛門。此夜測量。

同十七日 朝より晴る。海陸手分、六ツ半頃出立(小館浦)。乗船引縄にて海岸を測。御崎明神へ立寄、此岬にて遠測し、神主方にて昼飯す。陸は御崎より小原木村(大沢浜)迄測、六ツ半に着。船測量は御崎明神迄測、それより陸を歩行、七ツ半に着。宿肝入十左衛門。陸測量は残る。

同十八日 朝より曇天。朝六ツ後大沢浜出立。(郡蔵、秀蔵は昨日測量残を測。)小原木村(大沢浜)より海岸船引縄にて長部村、是より気仙郡、今泉村海辺を測る。それより高田村(是より陸の海辺を測る)。浜田村、(今泉、高田、浜田、人家は岡にあり)。勝木

田村、小友村迄陸を測る。止宿飯肝入与兵衛(家もよし。貞実者)。八ツ後に着。夜又曇る。

同十九日 朝晴。六ツ頃小友村出立。広田村より泊浜、(同村の内なり)迄、海上引縄にて測り。それより陸地を大野浜迄測。又海上末崎村迄測量。郡蔵は朝より手分、小友村より直に末崎村門ノ浜へ測る。八ツ半頃門ノ浜着。止宿肝入治五兵衛。夜曇。

同二日 朝五ツ前末崎(村門ノ浜)出立。手分、郡蔵、秀蔵は陸地を大船渡村迄測る。宗平、慶助は海上引縄にて赤崎村より綾里村迄測。郡蔵、秀蔵は六ツ頃に着。船中の測は岬回り外海に成。波浪立て難儀に及べり。此村の入口より村内迄測量残り。五ツ少前に着。此夜晴天なれ共遅着不測量。綾里村(湊浜)肝入与平治。

同二日 朝より曇る。六ツ後出立。宗平、慶助は昨日の残を測り、直に越喜来を測。余と郡蔵、秀蔵は唐船番所にて所々測る。越喜来村、浜々おとし。七ツ後に着。止宿肝入善左衛門。此夜雲中測る。

同三日 越喜来村出立。手分、郡蔵、秀蔵は朝早く七ツ半出立。我等、宗平、慶助は六ツ後に立。吉浜村、唐丹村(唐丹村の内、大石浜より船にて引縄測る。是を終とす)。七ツ頃に着。止宿西村善太郎。肝入周蔵。

同四日 前夜より風雨、今四ツ頃に至止む。逗留。午後より晴る。夜測量。(気仙郡大肝入より高田村検断忠兵衛、浜々村添案内。)此所に至り南部領大槌町役人と対談し、是迄仙台領の止宿。首尾合。村々

浜々役人案内、大肝入よりその支配の手配り、肝入検断付添の儀、領主より村触、並に難所道繕等迄委細に通達す。

然る所南部領には、公儀触は勿論、領主より此度の御用触無之由に付、急に大槌支配の南部役人へ申遣し候よし。それより海辺村々掛役人へ大槌町支配より申合。その支配の間村役人を別に二兩人宛付添、止宿人足の儀執斗ける。

仙台領案内忠兵衛。並に唐丹浜の役人よりかけ合なくば、南部領にては止宿等の差支は無覚束候。唐丹より平田村山越、此間仙台領、南部領界、是迄気仙郡、是より閉伊郡、此界より大槌町支配付添案内。佐助、清助なり。村々役人送迎は同前。

同五日 朝六ツ後唐丹浜出立。此日曇天。南部領閉伊郡平田村、(肝入市兵衛という。家作大によし。此所にて中食す)。釜石村九ツ頃に着。止宿肝前宇右衛門。家作大によし。昼後晴。測器仕立。夜に入大曇。

以上が仙台領における海中引縄のすべてである。

幕府の公用扱いとなる

羽越海岸の測量 第二次測量の成果を踏まえて、忠敬が知らないところで第三次測量が発令される。命令は享和二年六月三日、若年寄・堀田撰津守から高橋至時を通じて忠敬に伝えられた。高橋から忠敬に、呼出し状がきて、自分の一存で手続きをしていたが、(命令が出たので)持持参で厩局に出頭せよと言われ、高橋至時から申渡しを受けた。

そこもと、一昨年昨年蝦夷地測量御用として差し遣わされ、伊豆より蝦夷地まで海辺地図仕立て差し出され候ところ、右は陸奥出羽等全体形象相備わず候故、陸奥三馬屋より西の方北海道出羽・越後・越中・能登・加賀・越前までの海辺、それより陸地通り南の方尾張へ出、尾張・三河・遠江・駿河の間、海辺測量致し、以前の地図相補い、尾張・越前より東の方諸図全体海辺地図出来候様に致したく、自分勘弁をもつて相伺い候ところ、即ち右国々海辺測量として、そこもと差し遣わされ候の旨、堀田攝津守殿 仰せ渡され候に付きこの段申渡し候、早々支度致し出立、入念御用相勤め候様相心得らるべく候

戌六月三日

高橋作左衛門

伊能勘解由殿

とあり、追って書きで、八月に日食を観測することが示された。続いて、手当を六〇両下さること、道中人足五人、馬三匹、長持一棹の人足を下さること、御用状差し立てのこと、そのほか、注意が記されている。東日本全体の地図を作れという命令である。幕府内で意見が固まり、至時が申請し決裁を受けたのであろう。忠敬も非公式には十分承知していた。

あわせて、道中奉行、勘定奉行など五名が連署した御触れが三通出された。千住から三馬屋までと、三馬屋から越後高田まで、および越後高田から善光寺、中山道経由板橋宿までの通行に、人馬を提供せよという同一文言の三通である。

道中御奉行、御勘定奉行御触れ

天文方 高橋作左衛門弟子

伊能勘解由

馬三匹

人足五人

長持ち一棹 持ち人足

右はこのたび、北国筋海辺浦々測量御用として差し遣わされ候に付き、書面の通り無賃の人馬下され候間、宿々、村々その旨相心得、往返とも滞り無く差し出すべき者なり

戌六月 和泉 左近 飛騨 主膳 美濃

飛騨 主膳 美濃

江戸伝馬町

日光道中 千住宿より

奥州道中 白川宿

羽州 若松通り

津軽 米沢

上ノ山

弘前より

三馬屋迄

右宿村々

問屋

年寄

名主

組頭

中

追って、この触書早々相廻し、承知の旨別紙請書相添え、留まりより宿村送りを以って、左近御役所へ相返さるべく候、以上

先触れの伝達は伝馬町の伝馬役・馬込平八が扱った。馬込は諸街道の伝馬扱いの元締めで、宿駅の人馬を規制していた。馬込は添え触れをつけて「伊能

勘解由様が測量御用で各地を巡回される。御勘定奉行様方御連印の御証文を差し遣わされたので伝達する。御印物なので、墨をつけたたり、汚したりしないよう大切に扱い、継ぎ送れ」と千住宿の間屋に指示し先触れを渡した。

日付けは六月八日だった。千住宿では問屋左衛門が、先触れと全く同じ写しを作り本紙は封印した。汚すといけないので写しを作ったのである。「御本紙の儀は大切に存じ、例の通り相封じ送り送り候間、墨付き、手摺れ等これ無き様御仕送りならるべく候」と添え状をつけて次の草加宿に送った。

もちろん自宿用の写しも作られた。同封された書類はつぎのとおりである。

御勘定御奉行様御連印

一、御触書御本紙

草加より三馬屋まで

一、御触書 壱通

当宿より米沢、上山、津

軽三馬屋まで (千住で作

られた写し)

一、宿々御請印帳老冊右同断

(これも千住で作られたらしい)

一、御触書 壱通

三馬屋より出羽国それより

越後国高田迄

このほかに、馬込平八から、三馬屋より越後国高田迄に当てた添え触れ、千住宿・問屋左衛門が三馬屋より越後国高田迄に当てた添え触れが同封された。封印された本紙もさらに一通あったはずである。三馬屋の触れは同じ便で運ばれた。全部では添え触れを入れると九通となる。木箱に納められ、万一を考えて必ず二名以上で担いで運ばれた。越後高田への触れは中山道板橋宿に送達を命じられたろう。

そして六月一〇日には、忠敬自身の三馬屋までの先触れと、白川までの宿泊日程をきめた泊附も出された。先触れのなかで馬三匹のうち一匹は、人足二人と取り替えると指示する。

止宿、川越などの支障がないよう案内人を出してほしいこと、宿付近に南北に見通しのよい一〇坪くらいの敷地を用意して欲しいこと、御定めのお金、米代を払うこと、一汁一菜で馳走がましいことをしないように、と求めた。

雨天のときは逗留するので順延となること、休憩の場所には弁当を持参するから支度はいらぬことなども記された。

二つの触れを箱に入れ、先触 伊能勘解由と上書きして、家来に馬込平八方へ昼少し前に持参させ受取をもらう。馬込は忠敬の触れに添え状をつけて草加宿に送った。

六月一〇日に出した自分の先触れを忠敬は、七月一七日に秋田の下院内で見ている。

伊能隊の扱いについての秋田藩の通達写も一緒にあったが、これは六月一八日午の刻に着いたという。千住から秋田まで伊能隊宿泊地は三六か所、秋田から下院内は五か所だから、四一か所を八日間で駆け抜けたことになる。一日平均五か所である。昼夜兼行で走るのであるが、一か所平均五時間で写しを作って次に届けている。御勘定奉行先触れの威力は、このようなものすごいものだった。

先触れの発令者は第二次と同じ勘定奉行だったが、無賃で人馬の提供を受けられるという御証文の効き目は大きかった。沿道に対して幕府の公用であるという身分を明らかにするからである。地元は当然のこととして幕府のお役人として遇した。また、今回から測量隊と天文方との書状の送受を領主あるいは

幕府代官が扱うよう指示され、どこからでも御用状を差し立てることができるようになった。

攝津守の申渡しで、日本東半部の測量が決定したが、今回命じられたのは、羽越海岸から越後の沿岸測量であった。経路は千住から奥州街道を進んで、白河から会津若松に出て、米沢、山形、秋田から弘前、青森を経て津軽半島先端の三厩まで行き、日本海側に出て、男鹿半島を含めて日本海沿岸を測り、直江津から善光寺に寄り、中山道を江戸に帰るルートだった。

結果的に旅行日数は一三三日、距離一七〇一キロだった。一日平均一二・九キロである。この頃には隊員は熟達していたが、かなりの速度である。

これまでの実績を評価されて今回から伊能隊の待遇は格段に向上した。旅行用に人足五人、馬三四、長持人足四人を無賃で与えられ、ほかに手当が六〇両ついた。

手当は一日当りにすると、二七・三匁になる。隊員は七人だったから一人一日三・九匁である。一両を五貫匁とすると一人三・五匁となる。支払いは、宿舎で支払う白米五合分の米銭（一石一両とすると二五文）と木銭（百文以下）だけだったから、費用の収支は均衡し、多少小遣いを渡せる程度に上昇していた。

測量現場では、秋田、弘前、関川など先触れが不徹底な場所、多少の悶着はあったが、全般的には幕府公用事業として村方から手厚い援助を受けられるようになった。

観測では、一一泊もして準備した能代での日食観測は曇天で成り立たなかった。地図については、東日本全体をまとめることになったので、第三次測量地域だけの地図はつくられていない。

能代で日食観測できず 詳しい記録が残っている能代の日食観測をあげておく。第二次測量で能代には七月二三日（陽暦八月二〇日）から一一泊した。江戸を発ってから連泊したのは、会津若松と新庄だけであるから、たいへん目立つ。これは日食の観測のためであった。

四つ後というから午前中に着き、すぐ日食観測用の子午線儀の設置にとりかかる。翌二四日に子午線儀の据付けが完了する。二五日大風雨。二六日太陽の南中を測る。南中をとらえたので垂揺球儀を稼働させる。二七日は終日曇天。二八日曇天。二九日太陽の南中を測る。これで垂揺球儀の動作が確認できたことになる。晦日大曇雨、大雨、強風。垂揺球儀が止まってしまふ。すぐ再起動したのであろう。若干の誤差が出るが仕方がない。

八月一日、日食の当日である。朝から曇り少し風。午前中はときどき雲のなかに日影が見えたが、午後から一面薄墨の雲がおおって、太陽が全く見えなくなる。それでも、八つ頃（二四時ころ）から測量場に詰めて日影を待つ。日食が始まるころ、雲がますます深くても見えない。復円する少し前によくやく雲間にぼやつと形が見える。

大望遠鏡、中望遠鏡を使って測る。ここで測るとはそのときの食の進行度と垂揺球儀のカウントの対比を記録することだった。少しでも役に立てたいという努力である。復円するころは、また見えなくなった。終了時の垂揺球儀のカウントはあげられなかった。ものすごく注力したが、観測は失敗である。翌二日と三日に太陽の南中を測ったのち、能代を離れた。

天体観測 は伊能測量の表看板で、神武以来の試み（忠敬は測量日記にそう書いている）として、隊

員にとって自慢できるオペレーションだったが、一方で緊張感があり、体力的にも大変な作業であった。繰り返しになるが、天体観測で用いる子午線儀は正確に南北にセットしなければならず、そのためには太陽の南中を観測する必要がある。設置調整には少なくとも一昼夜を要した。しかし宿泊先に一泊だけする場合はそのような時間的余裕がないため、方位磁石で仮の南北線を決めて観測をおこなうことになるが、一般論として、方位磁石は磁気偏差が違って真北をささない。磁石のさす北と真の北にはわずかなズレがあり、観測誤差原因となる。

磁気偏差は時期的に変化し、忠敬の時代には、ほぼ真北と一致していたといわれているが、日本全土でそうであったかどうかは定かではない。ただ忠敬が意識していなかったことは事実である。天体観測といっても、現在のそれとは違い、簡単な機器を使い、時間的余裕のないなかで、おこなわれた作業である。ある程度の観測誤差は致し方ないとされていた。

それを少しでもカバーしようとして、たくさんの方星を観測することになったのではない。導線法の測量もそうであるが、もともと内蔵されている誤差要因を何とか除去しようとした努力であったと理解したい。それが結果的にはよい測量データを手に入れたということになったと思う。

読者は、伊能隊の天測は非常に精密であったと思われるかも知れないが、当事者である忠敬や至時はすべてにおいて完璧を求めているとは思えず、できる範囲内でベストを尽くす努力をしていたと考えられる。大変貴重な基本姿勢である。

経度測定 伊能隊は、天測によって各地の緯度だけではなく、経度も求めようとしていた。前述したよ

うに、ある地点の緯度を求めるには、恒星や太陽の南中高度を測れば比較的容易に求めることができるが、経度を求めるのは大変なことであった。

東西に離れた二地点の経度差は、時差という形で知ることができる。例えば、日本の経度基準である兵庫県明石市とイギリスの経度基準であるグリニッジとは経度差で一三五度、時差では九時間である。経度を知る必要性は大航海時代以降急速に高まり、イギリスでは国が二万ポンドの懸賞金をかけて、解決方法を募集するほどであった。

経度の測定は、常に基準地点（現在では英国グリニッジの天文台）の時刻を示す精密な時計があれば、太陽の高度と対比することにより容易に可能であるが、ヨーロッパでも正確なゼンマイ時計であるクロノメータ（経線儀）が一般化したのは一九世紀以降である。そのため、クロノメータ法以外にも、月と恒星との距離を測定する方法（月距法）、木星の衛星の食現象（凌犯）を使う方法などが考案された。

伊能隊は経度測定には大変な努力をしたが、成功していない。第一次から第四次測量までは南北方向に長い東日本を測量したため、経度問題をさほど気にする必要はなかったが、第五次測量以降の西日本は東西方向に長いので、地上測量での経度方向の誤差を補正する必要があると大きかったのである。

図法の違う伊能図を現在の地図と比較するのはどうかと思うが、北海道、東北、中四国などをブロック単位で現代図と重ねると良く合致するが、日本図にまとめて対比すると東偏する。経度が実測によったものでないためである。

伊能隊がおこなった経度測定法は、宿泊先で日食や月食を観測し、食の始め、食が最大、食の終わりの時刻を測り、江戸浅草の暦局と大坂の間（はざま）

観測所で同時観測された時刻と対比して、時間差から経度の差を求めようとした。

時刻は垂揺球儀という精密な振り子時計を用いて計測した。観測地に数日前に到着して、太陽の南中を観測し、この時点から垂揺球儀を起動する。太陽の南中から翌日の南中までが一太陽日であるから、一太陽日の間の垂揺球儀の振動回数を数えておき、食の当日は前日の太陽南中を起点にして何回目か、食の始め、食が最大、食の終わり現象が生ずるかを読み取った。

中国から伝えられた古典的な方法であるが、食の予想される一週間も前から現地に到着して、準備に時間が費やされた。しかし、当日が雨天、曇天であれば徒労となった。また、測量先で観測できても、暦局あるいは大坂の間家が雨天・曇天で観測できなかったら同じ結果である。

佐久間達夫氏の調査では、一三回おこなわれた日・月食の観測で、三か所とも観測できた例は二ヶ所しかなく、二か所で観測できた例を含めても五か所に過ぎなかった。観測結果は書状で通報するしか方法がなかったから、測量隊では観測が成立したかどうかは知ることができなかった。大変な努力をしたが、結果からみると、成果が上がらなかったといえる。

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十四回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

【第七次測量】（九州第一次）日向宮崎く大分 自 文化7年4月22日 至 文化7年12月30日

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
22	(24)	恒下村城ヶ崎町	同 宮崎市	本陣梅香屋文平 和泉屋善右衛門	江田村下海辺より赤江川北端、吉村字蟹町、恒下村枝瀬頭を歴て上別府村字上ノ町、赤江川を渡る。大田村字中村町、城ヶ崎町を過ぎ田吉村字八ツ手を歴て赤江川測先まで測。お肥伊東修理太夫殿より御国産を贈る、杉原紙、即ち受納。恒星測定	一八五
23	(25)	加江田村内海	同 宮崎市	本陣河野治郎左衛門 岩田屋倉助	田吉村字八ツ手より曾山寺川渡り加江田村枝折生迫を歴て枝内海まで測。淡島一周を測。淡島社に玉ノ井あり、甚だ清水にて汐も入らず名水なり。批榔樹・島芋あり。お肥分家伊東岩丸殿より御国産の御贈物あり、ろうそく、即ち受納。恒星測定	一八五
24	(26)	宮ノ浦村	同 日南市	本陣外山榊右衛門 落合九左衛門	加江田村枝内海より内海川を渡り伊比井村鶯巢を経て富士村字小目井まで測。	一九八
25	(27)	同	同	同	雨天逗留	
26	(28)	宮ノ浦村字吹井	同 日南市	本陣川瀬屋伝左衛門 津田屋伊兵衛	富士村字小目井より宮浦村字細割を経て、鶴戸山大権現の神前を測り、字小吹井小谷まで測。恒星測定	一九八
27	(29)	お肥城下	同 日南市	城主客家 飯亭主小村善右衛門	字小吹井小谷より平野村字梅ヶ浜を歴て、枝油津海辺まで横切、お肥城下上り口を経て西川を渡り、家中町上本町まで測る。お肥侯より国産の贈物あり、ろうそく被送也、即ち受納。暦局の状を認め渡す。恒星測定	一九八
28	(30)	平野村油津	同 日南市	本陣大庄屋 長嶺八右衛門 児玉屋伝藏	大島一周を測る。恒星測定	一九八
28	(30)	酒谷村	同 日南市	儀兵衛	お肥城下本町より酒谷本村を歴て字長野まで測る。	一九八
29	(31)	下方村枝大堂津	同 日南市	本陣徳丸屋郡蔵 児玉屋銀右衛門	枝油津海辺より字梅ヶ浜まで測る。お肥城下上り口より大堂津海辺まで測る。恒星測定	一九八
29	(31)	白木俣	同 日南市	多治兵衛	字長野より字白木俣を歴て牛峠字山ノ神まで測る。	一九八

10	9	8	8	7	6	5	4	3	2	1	文化7年5月(1810)	30*	宿泊日・旧暦
(11)	(10)	(9)	中食	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(6.2)	支隊中食	(6.1)	(西暦)
同	同	志布志町	高松村	西方村今町	都井村本郷	同	同	福島市木村	同	潟上村外ノ浦	一里松	酒谷村	宿泊地
同	同	鹿児島県志布志市	同 串間市	同 串間市	同 串間市	同	同	同 串間市	同	同 南郷町	宮崎県日南市	同 日南市	現・市町村名
同	同	浜田甚兵衛	庄太郎	浄土宗心光山常照寺	日高金左衛門	同	同	市木村会所	同	本陣安藤屋弥市 平野屋茂衛門	百姓治助	儀兵衛	宿泊宅
大雨逗留	雨天逗留	領江夏井村字丸山を歴て夏井村人家下まで測。野元嘉三治、岩山雲八より泡盛、国分刻煙草被贈也。江戸届を頼む。	南方村番屋下より今町川を渡り高松村、	都井村番屋下まで測。鬘垂島一周、沖鬘垂島一周を測る。お肥より暦局書状を持来る。	都井村海辺川尻より崎田村字永田崎を歴て南方村番屋下まで測。鬘垂島一周、沖鬘垂島一周を測る。お肥より暦局書状を持来る。	都井村字大迫字川尻まで測。	大納村字名谷より御崎村野々杵、そてつ多し、を回る。この所を都井岬という。	同所逗留測。幸島一周測。鳥島凡半周測。	大雨、この日測量相成りがたく無測。	同所逗留測。市木村止宿より字藤ノ浜辺を歴て海北村ニエ波村字夫婦浜領界まで測る。芸島泛測。字藤ノ浜辺より大納村字名谷海辺まで測。	風雨逗留。支隊山の手より帰る。高鍋候より鯛被送下、一同受納。	同所逗留測。中村字観音崎より潟上村枝外ノ浦上り場を歴て福島海北村領界まで測る。	特記・天体観測
		一九九	一九九	一九九	一九八	一九八	一九八	一九八	一九八	一九八	一九八	一九八	大図番号

23	22		21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
(24)	(23)	中食	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)							
大始良村	鹿屋中ノ村野町	中ノ村字笠野原	同	高山波見浦	同	同	同	同	南浦村内ノ浦浦町	同	高山波見浦	同	同							
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同							
鹿屋市	鹿屋市	鹿屋市		東串良町					肝付町		東串良町									
会所	町人木下屋長吉	壺屋金丹	同	重新吉	同	同	同	同	浦人鉄蔵	同	重新吉	同	同							
測る。	中ノ村野町より横山村境を歴て大始良村迄測る。それより大根占村境字横尾峠迄測る。	笠野原を歴て	中別府村字笹塚より小原村字馬見塚、字笠野原を歴て	同所逗留測。同浦測所より川通測る。中島一周を測る。柏原村街道海辺より上使街道、即大隅横切測、中別府村字笹塚まで測る。暦局行用状一封鹿兒島へ送遣す。	乗船し日崎を一見し、波見浦に至る。恒星測定	午中太陽測定	午中太陽と恒星測定	同所逗留測。内ノ浦浦町浜より字白木を歴て字日崎まで測る。	浦町人家下まで測る。	同所逗留測。小串村字高崎より字丸屋崎まで測る。小串村字なし南浦村枝内ノ浦浦町人家下まで測る。	同所逗留測。小串村字高崎まで測る。小串村字なしまで測る。両手とも大雨に成り止て帰る。	同所逗留測。鹿兒島より暦局用状相届く。柏原村街道海辺追分より辺田村字一松を歴て辺田村字西泊まで測る。	同所逗留測。鹿兒島より上使街道海辺追分まで測る。忠敬は直に波見浦へ着。	雨天逗留。忠敬時行に当り病氣。	安楽村より横瀬村、上瀬川を歴て柏原村の上使街道海辺追分まで測る。忠敬は直に波見浦へ着。	同所逗留測。夏井村人家下より志布志村を歴て安楽村まで測る。批榔島一周を測る。忠敬は残て山島方位を写す。				
二〇九	二〇九	二〇九	一九九	一九九			一九九	一九九	一九九	一九九	一九九		一九九							

7 *		6	5	4	3	2	1	文化7年6月 (1810)	30	29	28	27	26	25	24	宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
【支隊】		(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(7.2)	(7.1)	(30)	(29)	(28)	(27)	(26)	(25)							
岸良村枝大浦	辺津加村	同	同	同	同	同	同	大泊浦	同	大泊浦	同	伊座敷村	同	山本村	大根占村							
同	同	同	同	同	同	同	同	鹿兒島県南大隅町	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
肝付町	南大隅町	同	同	同	同	同	同	伊八 清太郎	同	伊八 清太郎	同	百姓権太郎 幸助	同	百姓武右衛門 庄左衛門	百姓藤治郎 伊太郎	同	同	同	同	同	同	同
同	伝兵衛 吉之十	同	同	同	同	同	同	伊八 清太郎	同	伊八 清太郎	同	百姓権太郎 幸助	同	百姓武右衛門 庄左衛門	百姓藤治郎 伊太郎	同	同	同	同	同	同	同
測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。	測る。
二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一	二二一

16 *		15	14	13		12	11	10	9 *		8 *		宿泊日・旧暦
【支隊】	(17)	(16)	(15)	(14)	中食	(13)	(12)	(11)	【支隊】	(10)	【支隊】	(9)	(西暦)
廻村	田上村	新城村	高洲村	大根占村	神ノ川村枝皆蔵	鹿屋中ノ村野町	南浦村内ノ浦浦町	岸良村	岸良村	辺塚村	岸良村枝大浦	辺津加村	宿泊地
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	現・市町村名
霧島市	垂水市	垂水市	鹿屋市	錦江町	錦江町	鹿屋市	肝付町	肝付町	肝付町	肝付町	肝付町	南大隅町	宿泊宅
金右衛門	会所	中村三左衛門	百姓信右衛門 助右衛門	百姓藤治郎	伊太郎	町人木下屋長吉	浦人鉄蔵	伊右衛門 徳右衛門	伊右衛門 徳右衛門	勘左衛門		伝兵衛 吉之十	
新城市より乗船、着													
新城市・終原村境より田上村字浜平を歴て海潟村天神山下迄測る。恒星測定													
高洲村枝野里より古江村枝舟間を歴て新城市・終原村境迄測る。午中太陽、恒星測定													
神ノ川村枝皆倉より大始良村枝小浜村人家下を歴て高洲村枝野里迄測る。午中太陽測定													
枝皆蔵より乗船して着。恒星測定													
一同乗船し柏原村着。陸路を鹿屋町へ着。緒荷物測器迄柏原人足差支。恒星測定													
定													
岸良村窪田川向より字宮原、岸良村・南浦境を歴て南浦村枝永坪迄横切、海岸添の山中腹を南浦村字日崎迄測る。恒星測定													
定													
岸良村枝辺塚村海辺より字舟木まで測る。岸良村止宿より海辺字東迄横切窪田川向迄測る。字東より海際山測、字船木にて会測。恒星測定													
岸良村枝辺塚村より岸良村枝辺塚村前迄測る。													
岸良村枝大浦より字鯨背迄測る。													
岸良村枝大浦より松ヶ崎観音崎迄測る。辺津加下浜より逆測して先手へ会測。													
岸良村松ヶ崎より岸良村枝辺塚村前迄測る。													
同所逗留測。辺津加村測所より字戸崎手前まで測る。戸崎向より順測、戸崎岬波浪荒に付測量手間取、前後より町間又遠測術にて測る。それより字崎山より字田辺に繋測る。恒星測定													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													
二〇九													

25	24	23	22	21 *			20 *	19 *		18 *		17 *		宿泊日・旧暦
(26)	(25)	(24)	(23)	【支隊】	(22)	【支隊】	(21)	【支隊】	(20)	【支隊】	(19)	【支隊】	(18)	(西暦)
鹿児島城下車町	同	鹿児島城下車町	脇本村	脇本村	段上村	廻村	国分郷小村	宮丸村本町	国分郷小村	宮丸村本町	廻村	通山村	二川村	宿泊地
同	同	同	同	同	同	同	鹿児島県霧島市	宮崎県都城市	鹿児島県霧島市	宮崎県都城市	同	同	同	現・市町村名
鹿児島市	同	鹿児島市	始良町	始良町	加治木町	霧島市					垂水市	曾於市	垂水市	
上町会所	同	上町会所	村方会所 番人七左衛門 太兵衛親与市隠宅	村方会所 番人七左衛門 太兵衛親与市隠宅	新茶屋有馬七左衛門	金右衛門	彦七	西川万右衛門	彦七	西川万右衛門	金右衛門	百姓市郎兵衛	郷土中浜藤十郎	宿泊宅
一手鹿児島市中を測る。江戸暦局へ書状を出す。恒星測定	同所逗留。恒星測定	隅州脇本村境より、東別府村字明神岬を歴て鹿児島市中真言宗潮音院前迄測る。午中太陽および恒星測定。松平豊後守殿より一同贈物あり。野元嘉三治へ帰府迄預ける。目録は別紙	段土村より、網掛川、別府川、綿瀬川を渡り、脇本村人家下を歴て隅州薩州界東別府村界迄測る。恒星測定	廻村出立、脇本村へ着。遠近惣而脇本村を繁富という。	浜ノ市村小島渡口より、日小浜村字長浜を歴て段土村西川前迄測る。竜門滝一覽。恒星測定	宮丸村本町出立、廻村へ着。遠近惣而福山という。	同所逗留測。国分郷小村止宿より、広瀬川を歴て浜ノ市村小島渡口迄測る。辺田小島、沖小島一周を測る。弁天島半周測。恒星測定	井蔵田村家中町より寺柱村薩州の番所を歴て牛峠迄測る。それより宮丸村、遠近一同いわく都ノ城本町へ帰宿。	廻村測所より、湊村を歴て国分郷小村止宿前迄測る。恒星測定	通山村より宮丸村字都ノ城、井蔵田村家中町を歴て中町迄測る。家中町より在前田迄測る。	二川村人家下浜より廻村、先手牛峠横切印迄測る。恒星測定	廻村より通山村迄測る。	海潟村天神山下より牛根村字辺田を歴て二川村人家下浜迄測る。恒星測定	特記・天体観測
二〇九		二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	一九九	二〇九	一九九	二〇九	二〇九	二〇九	大図番号

[illegible]

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
8	(7)	山川津	同	本陣肥後平吉 大迫けさ	湊浦止宿下海辺より、鳴川村境字辺田を 歴て山川津を過ぎ洲先のぼり迄測る。 同所逗留測。洲先より字瀬岩峰迄測る。 曆局用状相届く。夜木星測量 木星測る。暁に付一同労る逗留に及ぶ。 忠敬此日より持病。	二二一
9	(8)	同	同	同	字瀬岩峰より、鳴川村・大山村界を歴て 川尻浦止宿迄測る。忠敬病氣に付直に來 る。恒星測定。	二二一
10	(9)	同	同	同	川尻浦より、開聞崎を周り字津瀬を歴て 郡村字前浜迄測る。忠敬持病。恒星測 定。	二二一
11	(10)	仙田村川尻浦	同	百姓長十郎 伝太郎	郡村字前浜より、御領村枝石垣浦を歴て 西別府村西塩屋迄測る。此辺を知覧浦と いう。恒星測定。	二二〇
12	(11)	郡村	同	郷士中島勘兵衛 郷士種田市郎右衛門	西別府村西塩屋より、鹿籠村字脇沢津を 歴て鹿籠村枝枕崎浦迄測る。	二二〇
13	(12)	西別府村東塩屋	同	東塩屋諸左衛門 九兵衛	鹿籠村枝枕崎浦より、鹿籠村・坊津村境 を歴て坊津村字田代迄測る。恒星測定。 此坊津岬は九州一の絶景と云う。眺望す るに九州一ともいい難し。	二二〇
14	(13)	鹿籠村枝枕崎浦	同	浦人宇吉 甚兵衛	同所逗留測。坊津村字田代より字高立神 を歴て坊津浦迄測る。遠見番所へ至り山 島を測る。	二二〇
15	(14)	坊津村	同	庄兵衛 吉兵衛	忠敬は木星測量の用意に直に來る。 雨に付不測。	二二〇
16	(15)	同	同	同	大曇、木星測量不出來なり。	二二〇
17	(16)	秋目村	同	喜太郎 喜六	坊津浦より字深浦胸ヶ崎半周、久志村松 崎を歴て久志村今村浜迄測る。	二二〇
* 17	【支隊】 (16)	久志村	同	孫之進 忠左衛門	久志村今村浜より字末柏を歴て末柏鶴喰 崎迄測る。字末柏より字平崎へ横切、そ れより逆測、鶴喰崎迄測る。東の方山高 く二十度余、仮令晴夜も不成。	二二〇
* 18	【支隊】 (17)	秋目村	同	喜太郎 喜六	同所逗留測。字平崎より、秋目村を過ぎ 赤生木村字止松を歴て黒瀬村字釜ノ下迄 測る。沖秋目島一周を測る。恒星測定	二二〇
19	(18)	秋目村	同	喜太郎 喜六	同	二二〇
20	(19)	同	同	同	同	二二〇

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
21	(20)	片浦村	同 南さつま市	浦人長左衛門 勘左衛門	黒瀬村字釜ノ下より、片浦村野間崎を歴て字野間屋敷迄測る。木星測量の垂球を掛る。此夜、測量。	二一〇
22	(21)	同	同	同	同所逗留測。字野間屋敷より、大富字高崎を歴て片浦村番所岬迄測る。竹島、橘島一周を測る。恒星測定	二一〇
23	(22)	同	同	同	同所逗留測。片浦村番所前より、片浦村人家前を過ぎ字後手浦を歴て片浦村・赤生木村界迄測る。棧敷島一周を測る。	二一〇
24	(23)	同	同	同	同所逗留測。片浦村界より、大浦村字塩賀崎を歴て大浦村水ヶ崎迄測る。橘島一周を測る。午正を測り、夜恒星を測る。	二一〇
25	(24)	同	同	同	木星測量に同所逗留。午中を測る。夜雲間に測る。	
26	(25)	片浦村	同 南さつま市	浦人長左衛門 勘左衛門	此曉木星を測る。その凌犯刻限曇る。測量不成。暦局行書状を渡す。同所逗留。	二一〇
27	(26)	小湊村	同 加世田市	本陣治郎兵衛 覚左衛門	大浦村水ヶ崎より、小湊村東浜を歴て万瀬川北縁迄測る。	二一〇
28	(27)	入来村	同 日置市	百姓半十郎 覚蔵	万瀬川北縁より、新川を測遠術を用。池辺村字塩屋堀を歴て伊作川、入木村・今田村界迄測る。恒星測定	二一〇
29	(28)	日置村	同 日置市	新四郎 仙治郎	今田村より、浜田川、永吉村・吉利村境を歴て日置村字帆ノ湊迄測る。	二一〇
30	(29)	市来湊村浦町	同 いちき串木野市	浦人善吉 十右衛門	日置村字帆ノ湊より、大里村字戸崎を歴て湊川を渡り串木野迄測る。恒星測定	二一〇

〔平成二七年度 夏休み自由研究の紹介〕
佐世保市立花高小学校・堀江謙成さんの
「伊能忠敬が通った早岐」

佐世保市といえば、第七五号の平川定美氏による「伊能忠敬相浦地区測量二百年記念碑」が記憶に新しい。市内には、他にも紹介したい案内板等があるのだが、今回は小学生の自由研究を取り上げたい。佐世保市立図書館郷土資料室担当の池野さんから次のようなメールをいただいた。

当図書館では市内の小中学生が自分たちで調べた、佐世保の歴史や地理について発表する「児童・生徒の郷土研究発表会」を毎年開催しています。今年度の発表会で「伊能忠敬が歩いた早岐を検証する」というテーマで小学六年生が発表しました。伊能忠敬が測量した場所を、傘とひもを使って測量し、検証するというものでした。

「傘とひもを使って測量」とは？ 不思議に思い連絡を取ってみた。以下、現在、長崎日本大学中学校一年生の堀江謙成さんの研究を紹介したい。

(1) 「伊能忠敬が通った早岐」(小学校提出)



自由研究の動機・経過・感想

早岐に伊能忠敬が実際に測量に来ていたことを知り、同じコースを歩いてみる。また自分の歩数により僕のおおよその距離を測ってみた。



感想
地図での距離と自分で測った距離とのずれがけっこうありました。この研究をして自分で歩いて計算することはとても大変だと思いました。また伊能忠敬が通った道を自分が通って身近なうちに歴史の痕跡が残っていたことがわかりました。

(2) 「伊能忠敬が歩いた早岐を検証する」

平成二七年十一月十四日(土)、佐世保市立図書館で行われた第四六回「児童・生徒の郷土研究発表会」で、謙成さんは「伊能忠敬が歩いた早岐を検証する」と題して発表をされた。研究のきっかけとなった、『伊能忠敬測量日記』の該当部分は次のようである。

文化九年(一八一二)十二月八日

大村街道小森橋前③印を残す。三十三町四十五間。小森川小森橋渡る。二十七間。又、伊万里、大村街道追分へ⑦印を残す。之より海辺街道両用。右に一里塚、つかの上に名松有り。早岐村枝里ノ内、宇早岐浦、土井町、揚場、東町、三辻、③印を残す。九町二間四尺。

同年十二月二十日

枝権常寺、字地獄谷。それより小森橋脇当九日の残⑦印につなぎ終わる。

〔謙成さんの発表より〕

測量日記の十二月二十日のところに、僕の家のすぐ近くの地名を見つけました。「地獄谷」は、一五八六年の広田城合戦の戦死者を葬ったとされるところで、僕の家のすぐ近くです。忠敬は、地獄谷から今の権常寺のバス通りを通り、小森橋のセブンイレブン前の⑦印のところまで歩いていました。忠敬の地図の「権常寺」の向かいにあるこの印は、権常寺天満宮に見えます。忠敬が僕の家のすぐ近くを歩いていたことがわかり、とても驚きました。

それでは、実際に僕が測量した結果を発表します。測量は二つの方法をとりました。伊能忠敬と同じく、一つは歩数を数える方法、もう一つは二本の棒と棒の間に付けた縄を使って測る方法です。まず、僕の歩幅を測り、歩数をかけて計算する方法から発表します。

小森橋⑦印から三辻の③印までの測量結果です。僕の一步が0.48mで1633歩。よって783.84m。忠敬の測量では九町二間四尺で、985.8m。現代の地図上の計算では、976.8mでした。現代の地図と忠敬の測量結果が、とても近くて驚きました。しかし僕の歩数での測量とは、かなり大きな差が出ました。歩数で正確に測量するのは大変難しいです。

次に、忠敬の梵天を使う測量をまねて、梵天のかわりに傘、間縄のかわりに2mのビニールテープを使い、測量しました。ビニールテープの両端を傘に結び、たるまないようにピンと張って、二メートルに繰り返しの回数をかけました。測量結果は、

小森橋⑦印から三辻の③印までは、495回分で990mでした。忠敬の測量にかなり近い結果と



なり、とてもうれしくなりました。

傘と傘を二メートルのビニールひもで結ぶ



大勢の聴衆の前で、堂々の発表
(佐世保市立図書館)

※ 佐世保市立図書館で長年「児童・生徒の郷土研究発表会」が行われていることに敬意を表します。たまたま、伊能忠敬没後二百年記念誌編集のために佐世保市へ問い合わせたその年度に、堀江謙成さんの発表があったという偶然にも感謝します。

今回は、伊能忠敬たちが測量した道がほぼ当時のまま残っていて、方位を意識すること

《まとめ》
この研究をしてみても、自分で歩いて測量することは、とても大変だと思いました。僕が測量したのは小森橋から早岐本陣までですが、忠敬は北海道から鹿児島県まで、全国すみずみを測量しました。また、忠敬は距離だけでなく、勾配や方角も正確に計測しています。忠敬の我慢強さと強い気持ちは、僕にはまねできませんが、少しでも忠敬に近づけるよう、がんばりたいです。今回の研究で、本の中の歴史や人物がとても身近に感じられるようになりました。



※ 謙成さんのルートを、大図とヤフー地図で比較（小森橋㊟印から三辻の㊟印まで）

なく距離のみを測ることができました。そのことが、「傘とビニールひも」という簡便な道具でもかなり正確な数値が出て、達成感が得られる結果となったように思われます。

中学生となって新生活を始めている謙成さん、郷土への関心と実証精神をこれからも持ち続けてください。

全国の会員の皆さま、私たちも家庭や地域活動の中で、歩測や身近な道具を使って「ミニ測量」を楽しんでみませんか。会報への投稿をお待ちしています。

（没後二百年記念誌編集担当 河崎倫代）

相模国 大山探訪顛末記

―伊能測量隊宿泊先は何処―

神奈川県藤沢市 文

大沼 晃
写真・構成 狼 芳明

一月二十三日、小田急と大山阿夫利神社宮司の宿「旅館目黒」とのコラボによる「大山利き酒会」に参加した。会の内容は、禰宜の目黒久仁彦氏（以下禰宜敬称略）による大山にまつわる諸々の話に耳を傾けながら、大山に湧き出る名水で造る地元遠州屋酒店のお酒（甘口・辛口・大辛口）と宿の女将（禰宜のお母様。父上は宮司）のおとうふをメインにした創作料理を堪能することであった。

会がお開きになるころ禰宜に自己紹介を兼ねながら伊能忠敬研究会のPRを行い「江戸後期に伊能忠敬一行が測量のために大山に登り宿泊しています。ご存じですか」と問うたところ、

禰宜「はつきりとした記憶がないが、昔、古老からそのような事を聞き及んだことがある」とのことであった。

そこで、「一行が宿泊した宿を探して欲しい。後日資料（会報第六十一号 忠敬と江戸庶民の文化・大山講）一式を送ります」と約束と取り交わし宿を後にした。

参考までに忠敬の測量日記には次のように書かれている。

文化八年十一月二十八日（西暦一八二二年一

月十二日）晴天―途中略―先手坂部、門谷、尾形、保木、佐助、伊勢原村より初、坂戸村（大岡治郎兵衛・安藤小膳知行地右田中村少し、それより 上粕屋村。左坂戸村・白根村字三ノ宮青山街道追分）、（左右）田中村、（安藤小膳・飯河茂蔵知行所）、上粕屋村（中川三十郎、間部鉄四郎、中根主税、飯河繁之丞知行）、白根村（小笠原十左衛門知行所）、子安村（江川太郎左衛門代官所・竹尾善助知行所。此村に子安地蔵、子安観音あり。昼休庄屋弥右衛門）、大山町（大山寺領、後朱印百五十七石）まで測。伊勢原より一里十三丁十七間四尺四寸五分。止宿成田庄太夫（一軒にて済、家作よし）。此夜晴天測。

数日後、禰宜から「成田姓の旅館は二軒あり、そのひとつは旅館目黒の道路を隔てた前にあるおくむら旅館で、昔成田から経営を代替わりし現在に至っている。もうひとつは、新町にあったと古老から聞いているが、今は空き地になっているようだ」との電話連絡を受け取る。重々お礼を述べ、後日実地調査に何う約束を取り交わした。

そうこうしている内に月が替わった二十三日の産経新聞の神奈川版に三月中旬から「春の大山とうふ味めぐりキャンペーン」の記事が目にとまり、旅館目黒でも企画に参加することを知る。それにあわせて実地調査に出かけようと狼さんと連絡を取り合い、禰宜に取材を兼ねながら写真撮影をしたいと事前許可を貰った上で三月二十五日に出かける。きのこカレーパングラタンと地酒を楽しんだ後、スイーツ春らん

まんを頂きながらしばし歓談をする。（左の写真参照ください）



その後、持参した伊能大図を提示しながら本題に入ったところ、禰宜は一目見て次のような感想を述べた。

禰宜「現在の道なりとほとんど変わっていないように見えます。正確な測量なのですね」小生は、大山生まれの大山育ちの禰宜は参道をよく熟知している飾り気の無い人であると感じ入った。そこで「大図の☆印は旅館目黒より下なのでおくむら旅館は違うようですね」



河出書房新社刊「伊能図大全」より



大山参道(目黒氏所蔵)

帰路二人で散策しながら、もうひとつの候補先を探して見ます」(現在の地図と伊能大図を参照ください) 禰宜「バス停大山駅から下のようです。大山駅付近に清水屋さんというみやげ物店がありますので目印にしてください。因みに、昔バスはここまでで折り返していました。それ故に大山駅という停留所名が残っているのです。当時、そこから上は石段が続く参道でした。関東大震災の二日後に山津波に襲われて、このあたりは崩壊し山並みがすっかり変わってしまっています」と言いながら古びた写真を我々に見せてくれた。(写真参照ください)



「伊勢原市観光協会パンフレット山歩き」より

多分、この石段を伊能測量隊一行が登ったであろうと、写真を拝見しながら情景を思い描いていたが、禰宜の次の言葉に驚愕した。

禰宜「石段ばかりではなく鳥居や灯籠・彫像などはすべて大山講信者の寄進物です。遠くは現在の武蔵国（現埼玉）から運ばれてきたものもあります。写真にある獅子岩の像は山津波で下に流され、現在は獅子岩山荘の前に一体あり、二体目は神社の境内に運び上げられています。

旅館目黒の門前で三人での記念写真を撮った後、帰路の途中伊能測量隊がわざわざ横道にそれ測量した禰の大滝に立ち寄った。昔、この道は大山と秦野を行き来する生活道路であったようだが、現在は登山者しか利用していないようだ。その訳は、道の入り口に山ひるに注意と看板が出ているからでクワバラくわばらである。



旅館「目黒」前で 中央：目黒禰宜、左：大沼、右：狼

大山駅バス停留所を左折し旧参道に入り鈴川を渡ると古びた先導師（昔は御師と呼ばれていた）旅館を左手に見ながら旧参道を下って行くと左上に大山小学校があり、上空が広々と開けているので忠敬が天測を行うには格好な場所のように感じられた。夕暮れ近くなってきたので、そこまで調査は打ち切り帰宅。



その後、納得できない自分があり、三月二十八日ダメ元で伊勢原市役所文化財課（担当葉山氏）へ調査依頼の電話を入れたところ、ここをよく引き受けていただき数時間後に結果報告を頂いた。何でも新町の梅原橋の近くにあった。子孫のことはプライバシーに関する事なので調べることは出来ないとのことでした。

その情報を頼りに狼さんと四月十一日現地に向く。鳥居前バス停下車し、梅原橋を探したが見つからず。思い切って大山特定郵便局に



大山小学校付近

飛び込み、「近所に成田姓の家は有りませんか」と尋ねたところ 大山には該当者はいない」とのこと。しからば 梅原橋はどのあたりですか」と聞けば「分らない」とのこと。地元のことをよく知る郵便局員が知らないことになったが、伊勢原市役所からの情報であることを強調したら、わざわざ住宅詳細地図を出してくれたので目を皿のようにしながら探すと、何と、旧参道脇の川に架かる橋ではなくバイパスとして造った新道に架かった橋であった。後日談になるが禰宜にその顛末を話したら 局員は地元の人ではないので知らないのです」とのこと。

梅原橋の周辺の下手は空き地が広がっており、新しい住宅が建っていた。多分、このあたりに成田庄太夫宅が有ったのではないだろうか、また大図の☆印から判断し宿の庭ではなく少し離れた旧参道の右上の眺望のよい地点で行ったのではないかと、推測する次第です。休憩を兼ねて大山駅前の清水屋さんに入り甘酒などいただきながら女将さんと歓談したが、外からお嫁に來たので昔のことは知らないとのこと。

鳥居前に古い先導師旅館大木さんがいるから尋ねなさいと言われたので訪れ、成田さんのことを伺ったが、質問に答えた方は若い人で昔のことは全く知らないとい



大鳥居

のこと。帰りのバスを待ちながら鳥居前バス停脇の大鳥居を眺めていたら、柱の裏側に宮司名の入った文字板が目につき、これも後日談になるが、その方は禰宜の祖父であることを知った。昔は、鳥居から下は子安村で、上は大山町で境界（結界）を示していたとのこと。伊能忠敬一行は、この地点から町役人へバトンタッチされ宿まで案内されたのではなからうか。

以上が伊能測量隊宿泊先を捜し求めた顛末記です。最後に、取材協力に尽力された目黒禰宜と旅館目黒のスタッフのみなさんおよび測量日記と伊能大図大山部分の提供していただいた横溝高一氏に厚く御礼申し上げます。尚、五月二十五日文化庁は「江戸庶民の信仰と行楽地」巨大な木太刀を担いで『大山詣り』を日本遺産に認定した。伊勢原市役所のホームページを閲覧すると大山縁起ばかりではなく江戸から大山までの道中の浮世絵や古き時代の風景写真を見ることが出来ます。

ブルーニイガタ2016岩船のまちあるき 伊能忠敬の足跡を辿り 春の湊町を巡る

潮の香りに包まれた路地の魅力
山浦 佐智代

二〇一六年二月二十八日の、ウェブサイト伊能忠敬e資料館の、人物DBご連絡一覧には以下の情報が掲載されている。

「村上市の岩船地域（湊町）には、一八〇二年（享和二年）九月二十一日〜二十二日に（伊能忠敬一行が）伴田与惣左衛門に滞在され、測量をされた記録が残っています。この伴田家には、その当時の資料など（何を召し上がったのかも残されています）が保存されているようで、お役に立つのではないかと思います。この伴田家のご子孫の方にもこの件はお伝えしており、ぜひ繋いで欲しいとのことでした。」

この情報をお寄せくださった方は、新潟県村上市在住の大滝聡さん。有限会社オム・クリエイション取締役、NPO法人まちづくり学校代表理事（校長）等をされている方である。

さて、いただいた情報は渡辺一郎名誉代表（以後、渡辺さん）より、二つの用件と共に新潟支部に届いた。一つ目は、伴田家にお伺いして御挨拶申し上げ、二〇一八年に開催予定の伊能測量関係者交流顕彰発表会（仮称）にお誘いすること。二つ目は、伴田家に伝わる伴田与惣左衛門覚書（以後、覚書）を撮影し保存させていただく事である。

実は、この伴田家のことは一九八五年発行の、月刊「測量」の七月号、八月号、九月号の、三回

に分けて・・・

『伊能忠敬の越後岩船郡内沿海測量』

伴田与惣左衛門覚書より

という題名で掲載されている。著者は風間廣吉さん。当時、新潟県立村上桜ヶ丘高校の教諭をされていた方である。そして、二十一年後の二〇〇六年には、新潟支部の垣見壮一さんを通して、風間さんから転載許可をいただき、当研究会の伊能研究第四十三号、第四十四号、第四十五号、第四十六号の四回に分けて、

越後国岩船郡内沿海測量について

「測量日記」と「与惣左衛門覚書」より

という題名で掲載された。なお検索サイトで「測量日記」と「与惣左衛門覚書」と入力すれば、この「覚書」を読むことができる。

ところで、翌月、大滝聡さんから次の情報が届く。

内容の抜粋

実は四月二十三日（土）に、私が代表を務めるNPO法人まちづくり学校が主催する、ブルーニイガタという新潟県内のまちあるきイベントを岩船で行います。先日はその打合せで伴田様のお宅にもおじゃまして色々とお話を伺ったわけです。このブルーニイガタ@岩船では、伊能忠敬の足跡を辿るという副題を付けようと思っております。当時伊能忠敬が召し上がったという料理も地元の料理屋さんに再現していただき、お昼にいただくと思っています。

当日の詳細はこれから詰めていくのですが、今のところ十一時をスタートにして、伴田様のお宅に向かい、奥様から解説を聴きながら十二時には

数軒隣の町屋でその食事をいただく手はずになっています。

その後まちなかを歩いて眺めのいい石船神社まで行つてまち全体を見渡し、とても魅力ある細い小路をいくつか巡つて元の集合場所に戻るといふコースを考えています。……（以上抜粋）

私は、このまちあるきの内容に驚くと共に、すぐに渡辺さんに報告。渡辺さんからは「参加したい」という返事が舞い戻る。さらに、ご夫婦での参加も希望された。

このように、タイムリーな大滝聡さんの企画により、一つ目の用件は、渡辺さんご自身が担当されることになった。

そして、二つ目の用件には、もうひとりの大滝さんが登場する。村上市在住の郷土史研究家である大滝友和さんである。『我が故郷の忠敬測量物語』という本を自費出版するほど、伊能忠敬について造詣が深い方で、伴田家の史料も研究されていた。「覚書の撮影保存」の話を、お伝えしたら、「是非、やらせて欲しい」と言ってくれました。パソコン



大きな鯛が入っていたので、持ち帰る人も多かった。なお、鯛を食べた人は「おいしいが、少し硬い。」という感想であった。

が故障した時、伴田家の史料が、かなり消えてしまったからだという。ちょうど良い機会だからと、快く引き受けてくださった。そればかりか、知り合いの新聞記者に頼んで撮影し、伊能忠敬研究会のためにDVDにしてくださいだったのだ。ありがたく頂戴した。こうして二つ目の用件も完了したのだ。

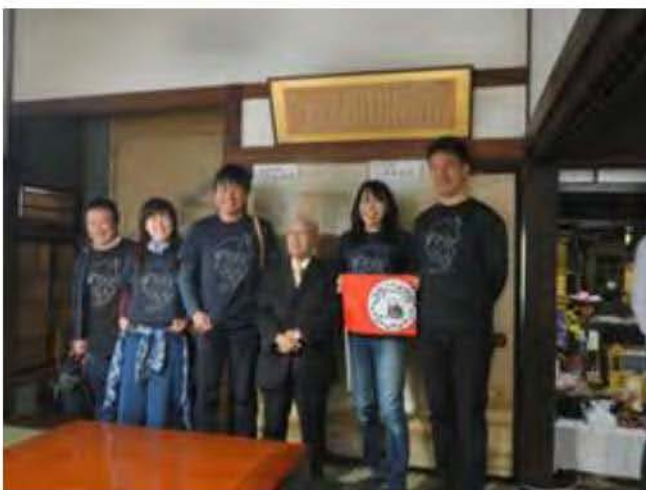
四月二十三日

「伊能忠敬の足跡を辿り 春の湊町を巡る」と副題がついた、まちあるきの当日は、暑くもなく寒くもない爽やかな天気恵まれた。東京から日帰り参加の渡辺ご夫妻、新潟支部支部長の小林一三さん。送迎担当もしてくださいだった山岸俊男さん、そして私(山浦)を含め、五人が当研究会からの参加メンバーである。なお、伴田家訪問時には、伴田ご夫妻による覚書と伴田家の紹介。次に渡辺さんによる、伊能忠敬についての講話。最後に大滝友和さんから、覚書の内容についての講話をお聞きすることができた。このあと、源内塾という町屋に移動しての昼食。伊能忠敬に提供されたものと、ほぼ同じ食事を頂く。



伴田家内

そんな中、挨拶に立たれた村上の某リーダーは、「・・・鯛は硬かったですか?・これは外国のだからです。外国の・・・タイの・・・」この言葉は、たちまち参加者から笑い声を引き出した。なお、食後は、ほとんどの人は、石船神社へと向かった。しかし、研究会のメンバーは、大滝聡さんのご配慮により、伴田家に戻り、覚書をゆつくりと拝見する時間を頂いた。伴田ご夫妻とお話することもでき、貴重な時間を過ごすことができた。ところで、伴田家には、毎年、某大学教授が、史料整理に見えているというが、まだまだ、時間がかかるとのこと。それ程、膨大な史料が保存されているのだ。



爽やか笑顔のスタッフと



覚書を見入る

最後に、風間廣吉さんが「越後国岩船郡内沿海測量」の「むすび」として書かれた文章を抜粋して掲載させていただきます。

全国測量といえは伊能忠敬の名が出る……事業を表裡にわたって支えたもの、師の高橋至時や間重富、至時の子景保（シーボルト事件により獄死）も居よう。測量機器を造った京や江戸の金工たち。手足となって働いた門弟ら一同。しかし測量隊が通過した地方住民の協力も大きいものであったに違いない。……特にこの地方の海辺つき浦々の住民が、この世紀の事業に誠意をもって当たっていることが「測量



伴田ご夫妻（両端）様と渡辺ご夫妻（中央）

日記」や「与惣左衛門覚書」によって判明した。これは、町や村役人が、幕府や藩あるいは代官所の権威に平伏しての行為であったのか。ここで伯寛与惣左衛門所懐の和歌に注目したい。忠敬測量隊の何たるかを理解していなかったならば詠み得ない歌と思うからである。

寿の星を南の空清く雲吹きはらへ秋の小夜風
爛かに朶見る星ともろ共にこの郷の名もせ々に曇
らじ

あるいは筆者ひとりの牽強附会に過ぎようか。
（二〇〇六年 伊能研究四十六号より抜粋）



国立国会図書館蔵 伊能大図 72 号（部分）



地理院地図（淡色）に伊能測量のルートを加筆

「伊能忠敬の原寸大復元大図フロア展」

フロア展は、縮尺3万6千分の1の原寸大復元図を床に敷き詰めて展示するので、その上を歩いて、伊能測量隊の足跡を体験できます。

展示場所は、第1体育館ほかです。

講演会の内容

「伊能忠敬の時代の日本の対外関係」

講師 西澤美穂子（歴史学科助教）

「近代黎明期の国土図作成」

講師 松尾容孝（環境地理学科教授）

「伊能忠敬の測量技術」

講師 熊木洋太（環境地理学科教授）

- 49 -

伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて ―各地の記念碑・標柱等紹介(八)―

二〇一三年秋より、全国の市町村『伊能忠敬測量日記』中の(宿泊地)に、伊能忠敬関係の記念碑・案内板・標柱・史料・文献・宿所情報などを問う調査書を送り、多大なるご協力をいただいてきました。厚くお礼を申し上げます。

九州に入って、各地から記念碑・標柱等の情報が相次いで寄せられ、今号にすべてを紹介することができませんでした。次号に期待してください。記念誌には、すべての記念碑・案内板・標柱等を一覧表にして掲載する予定ですが、写真は一部掲載になります。そこで、会報に随時紹介することになりました。旅行や仕事で現地にお出掛けの際は、是非とも訪ねてみてください。

一、兵庫県篠山市

篠山市は、兵庫県中東部に位置し、自然環境の豊かな地域である。四方を山に囲まれた篠山盆地に市の中心部が位置する。古来、京都への交通の要衝として栄え、町並みや祭りなどに京文化の影響を色濃く残している。

気候は盆地特有の寒暖差が顕著で、冬季の寒さは比較的厳しく、夏は高温・多湿、いわゆる内陸性気候に属する。現在では観光と農業を組み合わせたグリーンツーリズムや、気候の寒暖差を活かした丹波黒大豆などの特産物生産に移行しつつある。(篠山市ホームページ・ウィキペディア等)

※今回紹介する石柱「伊能忠敬笹山測量の道」四基は、

昨年十月にはほぼ同時に建立された。設置者は「伊能忠敬笹山領探索の会」と各地元のまちづくり協議会・振興会で、篠山市教育委員会の「地域の歴史文化を活かしたまちづくり事業」助成金などを活用した。「探索の会」の加賀尾宏一会長(当会会員)は、「未永く地域の歴史を伝えるとともに、ふるさとの良さを再認識するきっかけになれば」との思いを述べ、今後さらに同様の標柱をすべてのゆかりの地に設置し、将来は全十二か所に増やしたいと抱負を語っている。

(1)

①名称 石柱「伊能忠敬笹山領測量の道」

②碑文

・正面 「伊能忠敬笹山領測量の道」
・後面 「平成二十七年(二〇一五)十月建
大山郷づくり協議会

伊能忠敬笹山領探索の会」

・右面 「文化十一年(二八一四)二月三日晴 栢原から金ヶ坂峠まで測量した伊能忠敬測量隊十名は、笹山領追入村に入る。昼食後、これより二月朔日国料村で④印杭を打込んだ。追入峠まで測量。同村で止宿。夜は天体観測。」

・左面 「四日晴後曇 測量隊は、早朝より百三十一人の労役村民を従えて出発、神田神社、北野新村に入り、大坂・京都街道の分岐点に③印杭を打込む。引続き大坂街道を南下して測量。止宿は北野新村。夜は天体観測。」

③設置場所 篠山市追入字堂ヶ谷坪 500

④設置年月日 平成二十七年(二〇一五)十月

⑤設置者 大山郷づくり協議会

伊能忠敬笹山領探索の会

⑥設置の背景・経緯 平成二十二年十月、歴史講座「丹波学・伊能忠敬が測量した丹波の道」を聴講した加賀尾会長が、「伊能忠敬笹山領探索の会」(現在、二十四名)を立ち上げ、二十三年三月、伊能隊測量の道を求めて探索・測量を開始。二年間にわたる活動の成果を、出前教室やウォーキング、「伊能忠敬ミニフロア展」(平成二十六年三月)などを通して、小学生から一般市民にまで伝え広めてきた。今後も、伊能忠敬測量の史実を後世に残しふるさと再発見のシンボルにしようと、標柱の設置を提案し実現に至った。

⑦見学の可否 随時可能



右より、石柱(1)の正面、後面、右面、左面。
四基ともに正面の文字は同じである。

(2)

①名称 石柱「伊能忠敬笹山領測量の道」

②碑文

・正面「伊能忠敬笹山領測量の道」

・後面「平成二十七年(二〇一五)十月建

・西紀中地区里づくり振興会

伊能忠敬笹山領探索の会」

・右面・左面 略

③設置場所 篠山市上板井字平城ノ坪²⁸³

④設置年月日 平成二十七年(二〇一五)十月

⑤設置者 西紀中地区里づくり振興会

伊能忠敬笹山領探索の会

⑥設置の背景・経緯 (1)に同じ

⑦見学の可否 随時可能

(3)

①名称 石柱「伊能忠敬笹山領測量の道」

②碑文

・正面「伊能忠敬笹山領測量の道」

・後面「平成二十七年(二〇一五)十月建

・古市地区まちづくり協議会

伊能忠敬笹山領探索の会」

・右面・左面 略

③設置場所 篠山市草野字瓜ノ下²⁸²

④設置年月日 平成二十七年(二〇一五)十月

⑤設置者 古市地区まちづくり協議会

伊能忠敬笹山領探索の会

⑥設置の背景・経緯 (1)に同じ

⑦見学の可否 随時可能

(4)

①名称 石柱「伊能忠敬笹山領測量の道」

②碑文

・正面「伊能忠敬笹山領測量の道」

・後面「平成二十七年(二〇一五)十月建

・日置地区まちづくり協議会

伊能忠敬笹山領探索の会」

・右面・左面 略

③設置場所 篠山市日置²⁸³ 中立舎前

・日置地区中心地にある「中立舎」玄関横

に設置。中立舎は、当時の大庄屋・波部六

兵衛次賢(波部家六代目)が開いた石門心

学の道場。六兵衛光孚(波部家八代目)は、

自宅で伊能測量隊に昼食をもてなした記録

が残されている。

*石門心学(せきもんしんがく)は、石田梅

岩が創設した庶民のための生活哲学



2015年10月 除幕式に参列した城東小学校の生徒たち(中立舎前)

④設置年月日 平成二十七年(二〇一五)十月

⑤設置者 日置地区まちづくり協議会

伊能忠敬笹山領探索の会

⑥設置の背景・経緯 (1)に同じ

⑦見学の可否 随時可能

(伊能忠敬笹山領探索の会提供)

二、福岡県北九州市

九州の北東端に位置し、市の北側は日本海(響

灘)に、東側は瀬戸内海(周防灘)に面する。関

門海峡を挟んで本州の下関市と向かい合う。最短

距離となる早瀬瀬戸では約六〇〇メートルで接し、

対岸を歩く人が視認できるほどである。

大正時代に門司市、小倉市、戸畑市、若松市、

八幡市が成立し、一九六三年二月にこの五市が新

設合併し北九州市が誕生。三大都市圏以外で初の

政令指定都市となった。

一九〇一年(明治三十四)に操業を開始した八

幡製鉄所を契機として、鉄鋼・化学・窯業・電機

などの工場が集積する北九州工業地帯を形成して

きた。(北九州市ホームページ・ウィキペディア等)

①名称 記念碑「伊能忠敬測量200年記念碑」

②説明文 「(前略)九州には、忠敬六四歳の時か

ら高齢にも拘らず前後二回に及ぶ困難な測

量作業を行った。この小倉城下・常磐(原

文ママ)橋は、九州伊能測量の始発点であり、

小倉の五街道(長崎街道・唐津街道・中津

街道・秋月街道・門司往還)の起点として

意義深き地点である。ここに、伊能測量開

始200年を記念しその偉大な業績を讃え、

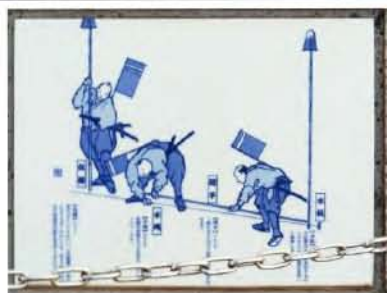
顕彰碑を建立する。」



記念碑全景



記念碑の左右には、葛飾北斎画「地方測量之図」の中の測量作業風景が4面はめ込まれている。
(北九州市立自然史・歴史博物館提供)



伊能忠敬 測量200年記念碑

江戸時代の測量家伊能忠敬は、50歳で商家の家業を長男に譲り第二の人生を志し、天文・数学を学ぶ。寛政12(1800)年、55歳の時江戸より蝦夷地に向け測量の第一歩を踏み出した。以後17年の長きにわたり日本全国の測量を行い、我が国初めての実測による当時世界最高水準の日本地図を完成した。この間の歩み四千万歩、地球一周分の距離に及ぶ。
九州には、忠敬64歳の時から高齢にも拘らず前後二回に及ぶ困難な測量作業を行った。
この小倉城下・常盤橋は、九州伊能測量の始発点であり、小倉の五街道(長崎街道・唐津街道・中津街道・秋月街道・門司街道)の起点として意義深い地点である。
ここに、伊能測量開始200年を記念しその偉大な業績を伝え、顕彰碑を建立する。

平成13年9月建立 寄贈 伊能忠敬記念碑建設実行委員会

記念碑正面(上)と
後面(下)

1級都市基準点 第2001号

東 経…130°52'40".497 経 距…11,292.625
北 緯…33°53'09".732 緯 距 98,269.314
標 高………4.068

北九州市



⑦見学の可否 随時可能

①名称 石碑「伊能忠敬測量隊御宿跡」
②説明文 「第八次伊能忠敬測量隊御宿跡 文化
九年(一八二二)十月十二日」
③設置場所 大川市大字小保 浄福寺山門前
④設置年月日 平成十年頃
⑤設置者 宗教法人 浄福寺
⑥設置の背景・経緯 歴史講座に参加した浄福寺
の住職が、坂部貞兵衛一行が宿泊したこと
を知り、地域の祭などで歴史を周知するた
めに、小保・榎津のイベント「肥後街道宿
場を歩く(現在は「小保・榎津 藩境まつり」
が始まったのに合わせて建てた。

三、福岡県大川市
筑後平野の中央に位置し、筑後川が市の西部を
流れ有明海に注いでいる。また、市内を延べ三百
キロメートルにもわたるクリークが縦横に走り、
独特の景観を有している。
主要な産業は、「大川家具」「建具」などの木工
業で、木工所、家具店、製材所などの木工業関連
の建物が集積している。また、筑後川と有明海の
豊かな恵によってもたらされる水稲・いちご・海
苔などの農水産業も盛んである。
(大川市ホームページ・ウィキペディア等)

※ 追分地点に建てられた「御境石」。伊能測量の四年

後の文化十三年、小保（柳川藩）の住民と榎津（久留米藩）の住民の間で土地の境界争いがあったため建てられたもので、当初は木柱だったという。現在は藩境の広場休憩所にて展示されている。



※ 伊能忠敬が「右八幡宮、左側久留米・柳川界石垣、



斜に四辻、久留米・柳川道追分（十月十三日）と記した小保八幡神社前の「界石垣」＝「藩境の石列」。高さ約一メートルの石柱が二十八本現存する（発掘調査では二十九本）。石柱の穴は馬つなぎのためと思われる。

四、大分県国東市

国東市（くにさきし）は、大分県の北東部、国東半島のほぼ東半分（南東部は除く）を市域としており、市域北部から東部にかけて伊予灘に面する。市域中東部の海寄りの地域に集落が点在しており、西部は国東半島の中央部にあたり、山地となっている。

平成二十五年、宇佐市、杵築市、豊後高田市、国東市、姫島村、日出町からなる「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」が「世界農業遺産」に認定された。

（国東市ホームページ・ウィキペディア等）

(1)

①名称 石碑「伊能忠敬先生測量隊」

②説明文

・正面「文化七年（西暦一八一〇）年伊能忠敬先生測量隊 御宿泊 本陣福力屋渡邊家跡」
 ・左面「伊能忠敬先生測量日記抜萃 陰二月六日（新三月十日）両手共九ツ後 浦下原村着 止宿 福力屋儀兵衛 造酒家にて家作大に 二階共に畳百五十枚も敷よし 新宅なり」
 ・右面「平成元年十月吉日 神戸市 松本秀俊 東京都 渡邊象太郎 建之 建立協力者 安岐町前町長 中尾弥三郎 安岐町前教育長 小川倡吉書」

- ③設置場所 国東市安岐町下原 241-1 大分県信用組合前
- ④設置年月日 平成十年十月
- ⑤設置者 松本秀俊・渡邊象太郎
- ⑥設置の背景・経緯 不明

(2)

①名称 石碑「伊能忠敬先生測量隊」

②説明文

・正面「文化七年（西暦一八一〇）年伊能忠敬先生測量隊 御宿泊 小原大庄屋格 後藤鉄之助宅」
 ・右面「杵築藩実録 差添医師 尚綱来訪 測量隊一行十八名三月四日・五日後藤家宿泊 賄合計千四百余銀札一貫三百目古今珍ラシキコトナリ」
 ・左面「平成二十五（西暦二〇一三）年九月 第十五代後藤博正建之」

- ③設置場所 国東市国東町小原 104-1 後藤家正門前
- ④設置年月日 平成二十五年九月
- ⑤設置者 後藤博正
- ⑥設置の背景・経緯 観光やウォーキングの関係で、立ち寄る目安となるよう所有者が建立
- ⑦見学の可否 随時可能



⑦見学の可否 随時可能



伊能忠敬が宿泊した後藤家の奥座敷

(3)

①名称 木柱「伊能忠敬先生測量隊」

②説明文

・正面「文化七年(西暦一八一〇)年 伊能忠敬先生測量隊 御宿泊本陣 久保屋橋本七郎右衛門家跡」

③設置場所 国東市国東町富来浦

④設置年月日 不明

⑤設置者 不明

⑥設置の背景・経緯 不明

⑦見学の可否 随時可能



(国東市教育委員会文化財課提供)

五、大分県杵築市

杵築市は、大分県の北東部、国東半島の南部に位置し、別府湾に面する海岸地域から山間部に至るまで、地形は多様である。東に伊予灘、南に別府湾と、東南部は眺望の美しい海岸線となっている。瀬戸内式特有の温暖な気候の恩恵を受け、海の幸・山の幸に恵まれた土地であり、「歴史と文化の薫り高き 豊かな感性があふれるまち」を目指している。(杵築市ホームページ・ウィキペディア等)

※

杵築は、伊能忠敬の師高橋至時・間重富が大坂で天文暦学を学んだ麻田剛立(こうりゅう 一七三四・九九)の出身地である。剛立は杵築藩の儒学者を父とし、本名を綾部彦彰という。幼いころより天文現象に興味を示し、少年期にはすでに太陽・月などの天体の位置や運行の予報計算をおこなったことが、弟子西村太冲著『麻田剛立先生行状記』(石川県立図書館所蔵)に記されている。

医学を学び、藩主の侍医を勤めるかたわら、本格的な天体観測と実測にもとづく暦法の研究に取り組んだ。杵築で十四回、大坂で三六回の日食・月食観測記録が残っている。また人体の内部構造に関心を持ち、動物の生体解剖実験をおこなうなど、探究心に満ちた科学者であった。

安永元年(一七七二)一月頃、杵築を出て大坂に移り住み麻田剛立と改名。天文塾「先事館」を開き、各地からやってきた門人たちと最先端の天文暦学を学び実践した。伊能測量隊が携行した垂揺球儀などの機器の多くは、ここで発明・改良されたものである。

(1)

①名称 標柱「伊能忠敬測量隊宿泊本陣跡」

②説明文 「文化七年(一八一〇)二月七日伊能忠敬測量隊一行は杵築城下にはいり測量を行い、城下には二泊した。止宿本陣は仲町佐伯屋、別宿は谷町伊予屋であった。」

③設置場所 杵築市大字杵築285番地「丸越商店敷地内」

④設置年月日 平成十六年

⑤設置者 杵築市教育委員会

⑥設置の背景・経緯 杵築市文化財調査委員から

⑦見学の可否 随時可能
設置の要望があったため



(2)

- ①名称 標柱「伊能忠敬測量隊別宿跡」
- ②説明文 (1)と同文
- ③設置場所 杵築市大字杵築157番地2 萬力屋敷地内
- ④設置年月日 平成二十三年
- ⑤設置者 杵築市教育委員会
- ⑥設置の背景・経緯 (1)に同じ
- ⑦見学の可否 随時可能



(杵築市教育委員会文化・スポーツ振興課提供)

六、宮崎県高千穂町

高千穂町は九州山地のほぼ中央部、宮崎県の最北端に位置している。町の中心部を五ヶ瀬川が貫流し、名勝天然記念物高千穂峽が神秘的かつ雄大な自然を創出している。夏・冬の気温差が大きく、四季の変化に富み、春の新緑、秋の紅葉がみごとである。

高千穂の起源は古く、古代遺跡の発掘や多くの出土品等の遺物により、紀元前四千年頃から集落が作られたと推定される。一方、天の岩戸開きや天孫降臨などの神話の高千穂町としても知られている。(高千穂町ホームページ・ウィキペディア等)

※「タリディリー新聞」(延岡市)に長期連載された

「御用の旗が日向路に行く」のコピーをいただいた。著者は編集委員の秋山栄雄氏。内容は、『測量日記』を引用して測量行を紹介し、時には伊能忠敬との想像上の会話を楽しみ、時には測量からまったく離れて、神楽を詳述したり民話を紹介したり。大変な博覧強記ぶり。しかし、平成十六年に亡くなっていた。

- ① 名称 木柱「伊能忠敬測量隊宿泊地」



②説明文等「文化九年(一八二二年)六月十九日」

七、佐賀県鳥栖市

- ③設置場所 高千穂町大字下野1-4
- ④設置年月日 平成二十四年
- ⑤設置者 下野東ふれあいクラブ
- ⑥設置の背景・経緯 高千穂町企画観光課の町民活動支援事業として実施された
- ⑦見学の可否 随時可能

(高千穂町教育委員会教育総務課提供)

七、佐賀県鳥栖市

鳥栖市(とすし)は佐賀県の東端に位置し、北は脊振山地を隔てて福岡平野、南は筑後川をはさんで久留米市に隣接している。鳥栖という地名は、その字のとおり「鳥の栖(すみか)」という意味である。奈良時代に書かれた「肥前風土記」によると、ここに住む人々が鳥小屋を作り、雑鳥(くさぐさのとおり)をつかまえて飼ひならし、朝廷に献上したことから「鳥屋の郷」、「鳥櫓(巢)郷」(とすごう)と呼ばれ、のちに鳥栖という地名になったと伝えられている。

道路網の整備が進み交通都市となると、地の利を活かした企業誘致が進められ、工業都市としても発展した。物流拠点としての整備も進められている。(鳥栖市ホームページ・ウィキペディア等)

- ①名称 長崎街道路面表示「伊能忠敬測量基準点」
- ②説明文 「長崎街道 伊能忠敬測量基準点(小倉まで20里 長崎まで37里)」
- ③設置場所 鳥栖市田代大官町「田代宿高札場」標柱前
- ④設置年月日 平成二十二年三月
- ⑤設置者 鳥栖市教育委員会
- ⑥設置の背景・経緯 鳥栖市長崎街道観光資源整

備事業によって観光者の便宜を図るため、長崎街道の市内路線六十カ所に路面表示を設置した。

⑦見学の可否 随時可能



(鳥栖市教育委員会生涯学習課文化財係提供)

八、長崎県雲仙市

島原半島の北西部に雲仙普賢岳を取り巻くように位置しており、北岸は有明海に、西岸は橘湾に面している。雲仙山系の険しい山地と、それに連なる丘陵地、及び海岸沿いに広がる平野部から

なる。日本最初の国立公園である雲仙天草国立公園に指定され、美しい海岸線と雄大な自然が特徴である。

二〇〇五年十月、南高来郡の七町、国見町、瑞穂町、吾妻町、愛野町、千々石町、小浜町、南串山町が合併して誕生した。

(雲仙市ホームページ・ウィキペディア等)

①名称 案内板「深浦邸(旧愛津庄屋跡)」

②説明文 案内板全文「一八六四年二月二十一日、初めて長崎の地を踏んだ坂本龍馬が島原街道の「千々石道」と呼ばれる山道を越えて初めて宿泊したのが、この深浦邸(旧愛津庄屋)である。現在も子孫が住むこの地には、残念ながら当時の建物は残っていないが、城郭を彷彿とさせる石垣が積み上げられ、豪農の財力をうかがわせている。他にも、非常に精度の高い日本地図を作成したことでも有名な伊能忠敬もこの庄屋に宿泊したと言われており、数多くの歴史的人物がこの庄屋に宿泊したのではないかと考えられる。」

③設置場所 雲仙市愛野町乙 深浦邸前

④設置年月日 平成二十二年三月三十一日

⑤設置者 長崎龍馬の道活用広域観光推進協議会
(長崎市・諫早市・雲仙市・島原市で構成)

⑥設置の背景・経緯 NHK大河ドラマ「龍馬伝」の放映に合わせ、龍馬にゆかりのある地としてPRするため設置。ゆかりの地調査の中で、伊能忠敬の宿泊が判明したため、併せて掲載することとした。

⑦見学の可否 随時可能



「旧愛津庄屋跡」の案内板



旧西郷村宮崎五兵衛宅跡(ここで天文測量。現在、石垣のみ残存)

他にも非常に精度の高い日本地図を作成したことでも有名な伊能忠敬もこの庄屋に宿泊したと言われており、数多くの歴史的人物がこの庄屋に宿泊したのではないかと考えられる。

(雲仙市教育委員会生涯学習課文化財係提供)

あとがき

今回は、八市町の記念碑・案内板等十四点、関連建物二点、宿所一カ所を紹介しました。篠山市「伊能忠敬笹山領探索の会」の加賀尾宏一会長と会員の皆さまのスピード感あふれる実践力には圧倒されました。

北九州市立自然史・歴史博物館の守友様、大川市教育委員会生涯学習課の末吉様、国東市教育委員会文化財課の松本様、杵築市教育委員会文化・スポーツ振興課の工藤様、高千穂町教育委員会教育総務課の緒方様、鳥栖市教育委員会生涯学習課の大庭様、雲仙市教育委員会生涯学習課の横尾様には大変お世話になりました。

九州では総じて「街道」を大切にし、探索し、時に参加型のイベントを開催し、大いに楽しんでいるように感じられました。会員の皆さまの住む地域での情報もお寄せください。

(没後二百年記念誌編集担当 河崎倫代)

2016年度総会報告

―伊能忠敬研究会設立20周年記念―

さきにお知らせしたとおり、6月4日(土)、熱海市起雲閣において、同市齊藤栄市長の来賓を得て、研究会設立20周年を記念する講演会・座談会と総会を開催し、夕刻からは宿泊先の熱海市内伊豆山温泉のうみのホテル中田屋で懇親会をおこないました。記念すべき20周年ということで例年と場所をかえ、記念総会に先立つ講演会・座談会『伊能忠敬と伊豆』は伊豆および熱海市と伊能測量の縁をテーマとして一般に公開し、静岡市など熱海市外からの参加者も含む83名が会場を埋めました。



講演は渡辺一郎「伊能測量隊の伊豆測量」、座談会「伊能忠敬の人と仕事」は司会鈴木純子、パネリストとして熱海市市長齊藤栄、研究会から伊能洋、榎本隆充、木内志郎の各氏でした。



続く総会は石川清一九州支部長を議長として、2015年度活動報告および決算報告、監査報告、2016年度活動計画および予算を審議し、いずれも承認されました。



懇親会場のうみのホテル中田屋は、1815年12月に第9次測量隊が宿泊した宿で、現在まで旅館として営業を続けているゆかりの地です。既報のとおり、昨年12月に玄関脇に記念の標柱が立てられました。GMの橋本茂さんは当研究会会員で、今回の開催にあたり会場の手配などに尽力をいただきました。懇親会は座敷での会食でしたが遠来の参加者のあいさつなど例年どおり賑やかに終了しました。



翌日曜日はあいにく雨模様でしたが、伊豆山神社参拝組と熱海市内組に分かれて散策を楽しんだのち帰路につきました。

講演会参加者	83名
総会参加者	46名
懇親会参加者	43名
巡検参加者	29名

石川県支部ニュース

加賀藩測量の足跡をたどる

(五の二)

室山 孝

はじめに

伊能忠敬による加賀藩測量の足跡をたどる現地探訪五回目の続きである。

享和三年（一八〇三）七月十五日に輪島河井町（輪島市）から出発し、能登半島を時計回りに測量した手分け測量の平山郡蔵隊（三名）は、二十二日、忠敬本隊（五名）と松波村（鳳珠郡能登町）の海岸で合流し、その日は同村の肝煎与五兵衛方に泊まった。

今回は、忠敬本隊が同年七月十四日に川嶋村（鳳珠郡穴水町）から内浦海岸を北上して平山隊と合流するまでのルートを、逆に辿ることになる。

踏査の日程は、昨年平成二十七年（二〇一五）六月十三・十四日の一泊二日のうち第二日で、参加者は河崎・寺口・室山の三会員に、能登町宇出津在住の徳田さんが松波から加わった。



松波村～小木湊（「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 金沢工業大学」にて）

二、能登町白丸・穴水町川島

① 白丸村・高源寺（7/22）

七月二十二日、忠敬本隊は雨の中白丸村を出発し、「川尻入海」（小さな入江になっている）の測量に難儀しながらも九里川尻村を経て松波村領の海岸に至り、平山隊と合流した。昼休憩地の記載はない。前日の宿泊所は白丸村の西方真宗寺院高源寺で、曇天のため天体観測はできなかった。

高源寺について近所の方に話を伺うと、住職は県外在住のようで月一度ほどしか来ていないという。寺の外観写真だけ撮り、次の目的地に向かった。



高源寺

② 小木新町・サツマヤ徳兵衛（7/20）

七月二十日、忠敬本隊は小木新町サ



左側の建物が「サツマヤ」の新村商会。
右側の家並みは、測量時は海だったという。

ツマヤ徳兵衛方に止宿した。翌日出発して間もなく「白山・立山・米山」を測っている。その観測地の記述はないが、リアス式の九十九（つくも）湾の入り口南側の岬山が日和山と呼ばれており、その岬の先端から測ったのかもしれない。

鳳珠郡能登町小木は能登を代表する漁港の一つである。『測量日記』にも「湊にて町と子」し、「本町・新町・狐師町・塩崎四ヶ所ニ分ル」とある。サツマヤ（薩摩屋）は新町にある新村商会であることが判明していたので、訪ねてお話をうかがった。それによると、以前は家のすぐ前が海岸であり、道路の向こう側は埋め立て造成されたらしい。とすれば、忠敬の訪れた頃は、宿の前が海岸で視界が開けていて、そこで天体観測ができたと思われる。

付近一帯はかつて薩摩屋の土地であり、幅広く商売をしていたようで、近代に入っても、米かち（精米）やうどん製造・綿打ちもやっていたという。新村商会の屋号が薩摩屋であったことは確認できたが、古文書などは伝わらず、それ以上詳しいことはわからなかった。

③ 宇出津村・出雲屋忠兵衛（7/19・23）

七月二十日、忠敬本隊は宇出津村（鳳珠郡能登町）を出発し、途中加賀藩領と加賀藩御預地が入り組む真脇村の清右衛門方で中食をとった。

宇出津で測量隊は二泊している。まず七月十九日に忠敬本隊が、ついで二十三日に松波で合流したあとと全員で宿泊した。宿泊先は同じ出雲屋忠兵衛方である。『能登町史』によれば、出雲屋は宇出津村の村役人であった。ただ、その屋敷地についての記載はなく、伊能大図に天測の☆マークがある古い町並付近のいくつかの寺院に問い合わせて、わからなかった。

宇出津は後背地に山林と耕作地を有する農村であるが、小木と同じように入り江に立地する漁業の町でもあり、『測量日記』に「家五百余軒あり」と記される大きな集落であった。入り江になった湊付近に古い町並があり、その背後の高台に寺や神社が立地す

るのは小木と似ている。

その高台にある酒垂（さかだる）神社の宮司加藤三千雄氏を訪ねた。伊能測量隊が来る三年前の寛政十一年（一七九九）六月十日、宇出津の「寛政の大火」によって神社は全焼。当時の宮司加藤吉彦（えひこ）は学問好きで、その時は伊勢の本居宣長の塾に入門し留守中であつた。帰国した吉彦によって、文化四年（一八〇七）より社地を高台に求めて本殿の再建が開始され、同十二年に現在地に遷宮したという。測量隊が宇出津を訪れた時は、「寛政の大火」からようやく町が復興しつつあつた時期であり、酒垂神社はおそらく今の社務所付近に仮殿がある程度であつたらしい。

社務所で明治十二年（一八七九）の神社明細帳（控）を拝見すると、「酒垂神社宝物古器物目録」の中に出雲屋の名前を見つけた。そこに

一 太刀 長五尺五寸、幅三寸四分、
巻振銘出雲国兼常作、寄附人寛永五年出雲国士族西脇勘左エ門方、今宇出津村平民元出雲屋忠八郎、

とあつて、この太刀は寛永五年（一六二八）に出雲国の武士西脇勘左衛門が酒垂神社に寄附したもので、明治十二年当時、その子孫は宇出津村の平民で元出雲屋の忠八郎に当たるといふことであつた。とすれば、寄附者の西脇勘左衛門が「出雲屋」の創始者で、出

雲出身のため屋号としたということであろうか。出雲屋は酒垂神社の氏子でその近辺に居住していたことは明らかと思われるが、その跡地は不明である。



酒垂神社からの眺望。この家並みのどこかに出雲屋があつたと思われる。

なお、二十四日、伊能隊は宇出津から舟で甲村に戻つており、次の測量地の能登島に渡るためであつた。

④七海村・久作（7/18）

七月十八日、忠敬本隊は七海村（こから鳳珠郡穴水町）の久作方に宿泊した。曇り空であつたが、夜間雲間に若干の天体観測をしている。近くの寺院に電話でうかがつたところ、肝煎久作の家は中田姓を名乗り、漁港近くの大きな家とのことであつた。訪ねてみ

ると、周囲を塀で囲まれた広い敷地に大屋根の主屋と蔵が建つていた。現在は転出して無住となつてゐる。



旧肝煎久作家

⑤古君村・助右衛門（7/17）

七月十七日、忠敬本隊は古君村（穴水町）の助右衛門方に宿泊した。翌朝、舟で沖浪村まで戻り、前日やり残した区間の測量を進め、古君村に戻つて助右衛門方で昼食をとつた。

助右衛門は二三四斗余の高を持つ肝煎であり、子孫は浜中薫家であるとの情報を得て、古君漁港に近い浜中家を訪ねた。は海岸線に沿つて南北に細長く続く古君集落のほぼ中央に位置して、測量隊はここで天体観測を行っている。この家は古君村の大地主・富農で、嫡男は代々「助右衛門」

を名乗り、農業・漁業のほか、十七世紀後半より海運業を営み、最盛期には北前船二艘を持つて財をなした。質屋・酒造業など手広く営み、帆船を多数所有して漁師に船を貸与していたともいう『穴水町の集落誌』。



旧助右衛門家



古君村～鹿波村（「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 金沢工業大学」にて）

近世の『能登名跡志』には「古君村あり、助右衛門と云よき百姓あり、蝶の鏡と云不思議なるかぐみを持伝へたり」とあった。そこにいう「蝶の鏡」の話は聞けなかったが、北前船によってもたらされたものなのであろうか。

⑥甲村・惣右衛門（7/24）

伊能測量隊は、甲村（穴水町）を二度訪れている。最初は七月十七日、鹿浪村を出発した忠敬本隊が昼食のため甲村の「惣右衛門」方で休息した。



旧惣右衛門家

二度目は七月二十四日、測量隊全員で宇出津町から船で甲村に向かい、惣右衛門方に宿泊している。奥能登の測量が完了し、次の目的地である能登島へ

渡るためであった。甲村は入り口の狭く窄まった深い入江を持つ集落で（伊能大図にもこの入江が描かれている）、入江の入り口に架かる甲大橋（県道が通る）をはさみ、湾の北側と南側に對峙して集落が広がっていた。

「惣右衛門」について自治体史ではわからず、現地で聞き歩いた結果、湾の南側の集落の一画、県道が大きく迂回する角地に周囲を生け垣で囲まれた大きな敷地の家が、子孫の泊家であることが判明した。地元で「トマッサマ」と呼ばれた資産家であったという。今は無住とのことだった。

なお、伊能測量隊は七月二十五日、この甲村より船に乗り、湾の対岸「鹿嶋郡ノ嶋」（能登島）の祖母ヶ浦（ばがうら）へ向かっている。

⑦鹿浪村・藤七（7/16）

七月十六日、忠敬本隊は鹿浪村の藤七方に宿泊している。鹿浪村は加賀藩領ではなく御預所であったため村高や家数を答えており、『測量日記』には「高四百七十六石七升三合三勺、家百二十五軒」とある。その夜、鳳至郡の山間部にある「鹿沼（浪）村組合山入四ヶ村」（院内・藤巻・中谷・梶）の人々が忠敬らを見舞いに来たときあり、四か村の石高や家数も記載されている。

能登の各地に約六〇か村点在する御預所では、加賀藩領とは異なり、御

預所役人の藩士や庄屋が挨拶に訪れ、村高・家数などのメモを提出し、測量に付き添うなど、幕府御用に対応している。なお、この日晴れていたが到着が遅れたため、天体観測は行っていない。



旧庄屋「藤七」家

庄屋「藤七」について、子孫は黒坂卓家ということが判明した。後日電話により、先祖に「藤七」という名前の人がいたことを確認できた。

⑧中居村・北村重兵衛（7/14・15）

七月十四日朝、忠敬本隊は御預所川嶋村（穴水町）の庄屋池田栄斎方を発ち、加賀藩領の中居村北村重兵衛方に止宿した。その夜、測量の済んだ鶴島・大町・川嶋の村役人と、これから向か

う曾良・岩車・鹿浪の村役人が見舞いに来ている。いずれも加賀藩領ではなく御預所の村々である。その夜からの大雨のため次の日は出発できず、一日逗留し二泊している。

七月十六日、忠敬本隊は中居村を鹿浪村に向けて出発し、途中御預所の岩車村治郎右衛門方で休憩している。宇出津酒垂神社の加藤宮司より治郎右衛門家は現在の大野木家らしいとの情報を寄せられ、後日確認することになった。



旧治郎右衛門家

中居村は古来能登国の鋳物師の里として知られる。『内浦町史』によると、北村重兵衛は鋳物の商売と運搬に従事していたらしい。『穴水町の集落誌』にも、嘉永元年（一八四八）に中居で鋳造した大筒（大砲）を、田鶴浜まで

船積みし能登街道をへて羽咋まで運送させるよう藩より命ぜられた記録がある。

穴水町立能登中居博物館の浦さんに北村重兵衛家が中居下出にある北村幸男家とのことを教えていただき、訪ねたが不在であった。後日電話で問い合わせたところ、屋号が「ジュウベサ」であること、昔建物に関する石碑みたいなものがあつたことしかわからないとのことであつた。

今回の伊能探訪の最後に、前回の踏査で確認した、石川県内で初めて設置された伊能測量隊宿泊地案内板(川嶋村池田栄斎宅跡)を、もう一度見に行くことにした。それは穴水町川島の町中にあり(七十七号で報告)、四人でそれを確認したあと、のと鉄道穴水駅前で解散した。

おわりに

一泊二日の今回の踏査は、奥能登をほぼ一周する長丁場であつた。能登半島の半分以上を回ったことになるが、沿海部を走つたため、あちこちで塩田もしくは塩田の痕跡を見、また明治期の塩田再興碑も見られたことが強く印象に残っている。伊能測量隊もまた、炎天下、塩作りに励む人々を横手に見ながら仕事を進めていったことであろう。中には、製塩作業を中断して測

量手伝いを割り当てられた村人も多かったに違いない。

今回も多くのの方々のお世話になった。旧知の方々のみならず、見ず知らずの我々に親切にしていたいただいた方々にも感謝の気持ちでいっぱいである。

※

なお、七十八号で報告した①名舟村銭子九郎兵衛については、「前古九郎兵衛」に訂正します。平山隊が表記を誤つたようです。またその跡地にお住まいの「濱高悦郎氏」の表記は筆者の誤りで、お詫びの上、「濱高悦朗氏」に訂正します。(室山記)

※

一泊二日の奥能登探訪で、伊能測量隊の宿泊所となった家々を尋ねた。宿所は十五家。そのうち、子孫がお住まいの家は七家、家屋は残るが無住の空き家が四家、家屋のない空き地が三ヶ所、所在地も子孫も不明が一家だった。土地への禁足が解かれた明治期以降の日本の変貌を目の当たりにした思いがする。(河崎記)

九州支部ニュース

伊能忠敬没後200年記念行事

「伊能測量旅程・人物全覧データベース紹介と講演の集い」福岡にて開催

九州支部長 石川 清一

去る四月十八日福岡市立中央市民センターで開催した概要です。二月東京での研究会本部より伊能測量協力者顕彰に關しての記者発表後、渡辺名誉代表から九州地区は特に伊能と縁が深い地域で関係者も多い(全体の三分一)ことから福岡での説明会の話があり開催に至つた。

今回は特別に渡辺名誉代表による「伊能忠敬の九州測量を支えた人々」と題した講演も行われ好評でした。

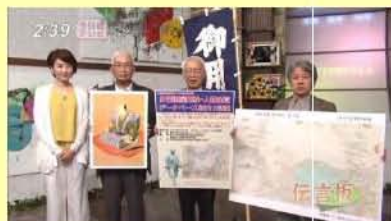


伊能図のパネル展示

当日は会場フロアに伊能図パネル

の展示や受付対応などを九州支部の会員で行い、午後一時半より城野会員の司会で始まり、石川支部長の開会挨拶の中で、伊能測量支援者データベース化の趣旨と当伊能忠敬研究会を紹介し、続いて講師の渡辺一郎名誉代表及び横溝高一e資料館 ITアドバイザーの両氏を紹介した後、講演及び説明と実演に入った。(内容省略)

当日は会場前方中央の来賓席には福岡・佐賀から関係者のご子孫の方々も来られ熱心に聴講下さつた。



テレビ番組に出演

この説明会イベントについてはRKB毎日放送の名物テレビ番組へのPR出演や、聖教新聞・地元福岡の西日本新聞・毎日新聞に記事

が掲載される等の効果から当日は熊本地震後にもかかわらず予想を超える120名の来場者があり、質疑でも熱心な伊能ファンの声に接し改めて伊能忠敬翁の偉大さを認識した一日でした。二日間遠路福岡において頂いた渡辺先生、横溝先生にお礼を申し上げます。準備にご苦労された井上事務局長、馬場幹事はじめ支部の皆さん有難うございました。

会員便り

姫路市で伊能図関連絵図展示

姫路市 三木 敏明

一月二十二日（金）より二十四日（日）まで三日間、姫路市立大津公民館で「大津絵図展」を開きました。旧大津村六カ村に保存されている絵

図三十点を展示、講演は私がしました。その中で伊能忠敬に提出した下絵が二点あり、一点は同じものが記念館にあり国宝に指定されている。今回の準備中に見つけ記念館の写真と並べて展示しました。反応も大きく今後扱いが変わるかもしれません。



写真2. 姫路市大津区西土井自治会所蔵
汐入川図 写真1の控えと思われる。



写真1. 伊能忠敬記念館蔵地図絵図 643
播磨国揖東郡西土井村参考絵図



写真4. 伊能忠敬記念館蔵地図絵図 644
控えが見つからない。

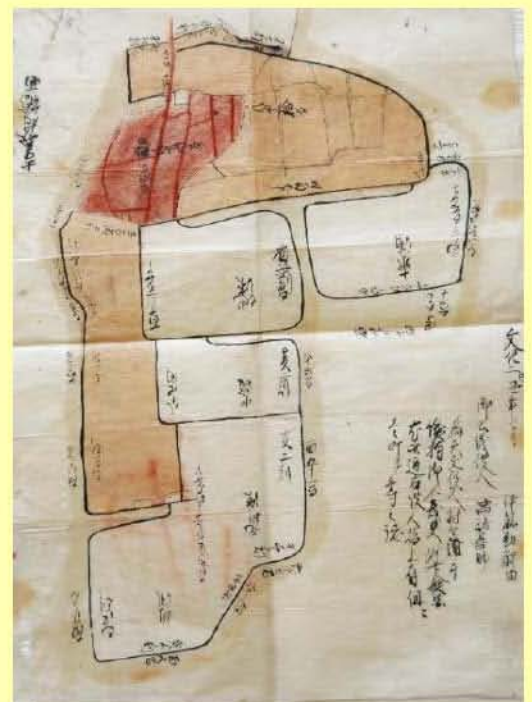


写真3. 吉美 安積弘允氏蔵
吉美村絵図 記念館リストにない。
御公儀役人として伊能勘解由と高嶋善助の名がある。勘解由のサインは本物のように思える。しかし高嶋は高橋（至時次男）の間違いか。



米国議会図書館蔵 伊能大図 141号「姫路」(部分)

今後地元に残る下絵を探したいのと、記念館で実物を確認したく思っている。



写真5. 三木家蔵陣笠

文化二年十月十七日他 忠敬日記に出る、私の先祖京極藩士三木平右衛門が被っていたであろう陣笠

北国街道伊能ウオーク

長野県須坂市 市川 美津夫

伊能忠敬公が約二百年前の享和二年の第三次測量と文化十一年の第八次測量の帰途、信州北半部を測量したことを偲び、その測量ルートを忠実に歩き、測量日記に書かれた所は必ず寄ると伊能ウオークを「信州伊能ウオーク実行委員会」を立ち上げて、歩き始めてから三年目になります。

本年度は昨年に引き続き、北国街道を歩いています。

地元新聞も大変興味を持っていただき、その宣伝効果が大きく、第一回の矢代宿・坂本宿は史上最高の百人を超える人に参加頂きました。今後は追分宿まで北国街道を歩き、その後、中山道洗馬宿から善光寺街道を松本方面へ北上する予定です。

運営方針は「昭和を生き抜いてこられた参加者の豊かな知恵と経験を頼りに申し込み不要の当日参加で」というものです。これが結構好評です。

また「歩く健康」「人とのふれあい」「学び」を大切にしています。

潜在的に歴史ウオークに関心がある方はかなりおられると思います。特に「人とふれあいたい」という思

いを持つておられる人が多いと感じます。

2018年の伊能公没後200年という節目の年に向けて続けていきたいと思っています。伊能研究会員の皆様のご参加・御支援をよろしく願います。

また私も始めてみたいという方おられましたら、市川(長野県須坂市)福島173 電話 090・9354・1419)までご連絡下さい。交流いたしましょう。

新入会員自己紹介

東京都 野田 雅子

長年親しんできた幕末維新期の流れで、ひよんな事から維新前後の地図や海図に興味を持ちました。

関連の書物を読むうち、そこから遡ること50年余、化政期に作成された伊能図の重要性に思い至ります。箱田良助を父に持つ榎本武揚の御子孫榎本隆充先生からご紹介で前田幸子さんとお話を伺って、伊能図の「謎」とロマンに魅せられました。

幕末好きとしては血が騒ぐところですが。

伊能図の持つ美しさは心に響きます。測量隊の情熱、長期にわたる苦闘が画面に主張しない、正確の写し美しく描くことへ昇華されて神々しく思えます。

伊能図の測量ルートを見ると、中山道から父の実家からそう遠くない所を通って関西へ入り、今度は母の故郷で、私が幼い日祖母に連れられて見た「石の宝殿」を伊能忠敬も見えていた、と知り親しみを覚えていきます。

測量も地図も全くの門外漢ですが、皆様の御教示を仰ぎ勉強したく思います。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

熊本県 平田 稔



熊本県玉名郡
(県北、福岡県
境近く) 在住の
七十二歳の年金
生活者。入会の

そもそもは自著「池部啓太春常」を、図々しくも渡辺名誉代表に送ったこと。二月十六日付熊本日日新聞に出た「測量協力者子孫探し」の記事が、私をつい迂闊にさせ、本を送り届けるなどと云う乱行に駆り立てた。このとき年相応に冷静に行動していれば、入会手続きから「伊能日記」全二十八巻CD-ROM購入まで、一気に爆買することもなかったのに。

池部啓太は二度の九州測量時に御用隊一行を世話した肥後藩測量師範・池部長十郎の実子。二度目(文化九年)の測量では啓太自身、父を手伝って山野の測量に汗を流し、藩から褒美まで受けている。池部啓太を調べるには父長十郎の生涯が欠かせず、長十郎を調べたら伊能日記以外に、二度にわたる九州測量の協力者名も次々に出てきた。熊本の子孫探しはいわば「身から出たサビ」と諦めざるを得なかった。それで入会したという次第。皆さま、お手柔らかに。

石川県 大星 正嗣



1998年全国
47都道府県を2
年間にわたり一筆
書きで歩き続ける
「伊能ウオーク」

の壮大な計画に、日本土地家屋調査士会連合会(以下日調連)から広報事業として全国各会に「伊能ウオークサポーター隊」を結成するよう指示があり、当時私は石川県土地家屋調査士会(以下石川会)の会長として富山の氷見から福井の吉崎御坊までリレーでつなぐ役目を担った。会員は伊能のTシャツを着用して総動員。伊能ウオーク本部隊を全力でサポートした。更に同時開催で金沢市、七尾市で地図展、小松市では小学生を対象に伊能忠敬教室を行った。そして2000年1月東京日比谷公園でウオーク本部隊の方々と再会を果たし感激したことが走馬灯のように思い出されます。

その後2009年4月東京深川スポーツセンターを皮切りに開催された「完全復元伊能図全国巡回フロア展」で日調連は「土地家屋調査士制度60周年記念事業」として企画した。私は日調連副会長の立場で全国の各会に協力要請をしながら会場を視察した際、伊能の関係者も沢山

紹介して頂いた。

日調連の役員を退任した後も2015年2月佐賀県唐津市で開催したラストフロア展に出掛けたり、伊能研究会石川県支部の活動に同行したりしていたのでこの度入会を勧められ入りました。宜しくお願いいたします。

福島県 松宮由生子



皆様、初めまして。この度、入会させていただくことになりました松宮由生子(ゆう宮由生子)です。

ここと申します。東北支部に所属しております松宮輝明の長女です。

「伊能忠敬測量隊 東北を行く」新聞連載時には微力ながら父の助手を務めました。それまで伊能忠敬は私にとりまして歴史上の一人物でしたが、父と一緒に東北での足跡を調べるうちに、その偉大さに圧倒され現在に至っております。

私は国指定名勝である須賀川牡丹園の運営団体、公益財団法人須賀川牡丹園保勝会に前職は勤務し、文化庁管轄である組織の事務局の仕事を担当しております。

学生時代は漆芸・陶芸を専攻し

美術の教員免許を取得、現在は易学と天体の動きを学ぶ為、青山五行・小池雅章先生に師事しております。これからは皆様のご指導を仰ぎながら、伊能忠敬の研究について真摯に取り組んで参りたいと思っております。何卒よろしくお願い申し上げます。

その他の新入会員

静岡県 古村 佐和子さん
佐賀県 中野 登さん
石川県 金七 修さん

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字(704字×3段または480字×四段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくことがあります。

②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的にJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。

わからない場合はL判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル(JPEG形式またはTIFF形式)にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくは本誌六七号および六八号を参照)

送り先

・電子メール添付の場合 kaho@inoh-ken.org

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておってください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号(第80号)は2016年10月発行 原稿×切は8月30日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています！

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール mail@inoh-ken.org (留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

郵便振替口座 00150-607216100

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬e資料館 「Inopedia (イノペディア)」伊能忠敬と伊能図の大事典 <http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料 <http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料 <http://www.ttm.or.jp/~koko>

編集後記 ◇今号は、発行が予定より少し遅れてしまった。◇締め切りを守って原稿をお送りいただいた皆さんには大変申し訳なく思っている。◇現在機関誌の編集は、私を含め理事3名が交代でレイアウトの作業を行っているが、今回は事務局を兼務している私が研究会20周年記念講演会を兼ねた総会の準備に追われ、原稿の編集になかなか手が回らなかったことが原因である。◇機関誌の編集は60ページ余りあるので、編集には一定のまとまった時間が必要であり、編集を担当している他の理事も、私と同様な事情を抱えている。◇ついで、このページにも掲載している投稿要領を守っていただき、編集者の作業を軽減していただきたい。◇前号の編集後記でも著作権の問題を取り上げているが、それ以外にも原稿の内容に問題はないか、図版は鮮明か等改めて執筆者の責任で十分確認を行っていただきたい。◇なお、やむを得ず締め切りが遅れる場合は、予め原稿のページ数や提出時期をご連絡いただくようお願いしたい。(T・H)